

東北文化資料叢書第十一集

小津久足
陸奥日記

東北大学大学院文学研究科東北文化研究室

二〇一八年三月



小津久足 『陸奥日記』上巻 表紙（慶應義塾大学文学部古文書室所蔵）

至愚人のいふもふらふら つくあへん
かたきと高人のいふもふらふら
慢狂いころのうらやま
てわらうとくしはあまの御もふらふら
あつちをあらまふらふら
人もあへん
まめのこと又いふね昔のまめとせはさふらふら
つひはあつちをあらまふらふら
清政事のこととせはさふらふら
さうねいふらふら

あまの人のいふもふらふら
このあまのいふもふらふら
あつちをあらまふらふら
あまの御もふらふら
あつちをあらまふらふら
あまの御もふらふら
あつちをあらまふらふら

陸奥日記卷下終

達磨宗の歌
雑学庵のあは

久良ふらふら

『陸奥日記』下巻 結語部分 (慶應義塾大学文学部古文書室所蔵)

小津久足

陸奥日記

小津久足 『陸奥日記』 刊行にあたって

佐藤 大介

この本は、江戸時代後期の商人で、旺盛な文芸活動を行なった小津久足（文化元年（一八〇四）～安政五年（一八五八））の手による紀行文『陸奥日記』の全文を翻刻した史料集である。

小津久足は、伊勢・松坂（三重県松阪市）を本拠とし、江戸・深川（東京都江東区）を拠点に海産物商を展開した豪商・湯浅屋与右衛門家の主人であった。映画監督・故小津安二郎の先祖筋にもあたる。

久足は、滝沢馬琴の友人として知られる一方、近年の江戸文学研究では、七万首におよぶ和歌と四六編の紀行文などを残した彼自身の文芸活動、人物に迫る研究がなされている。久足自身の意志により、生前に彼の作品が出版されることは無かったが、その客観的かつ批評に富んだ筆致は、江戸時代の紀行文学の到達点と評価されている。その紀行文の中でも代表作とされるのが『陸奥日記』である。

天保十一年二月二十七日（西暦一八四〇年三月三日）以下カッコ内は西暦での月

日を示す)、小津は干鰯商を営んでいた江戸・深川(東京都江東区)を出発、下総(千葉県)、常陸(茨城県)、浜街道(福島県および宮城県沿岸)を経て、三月十四日(四月十六日)に松島(宮城県松島町)に至った。帰路は奥州街道(宮城県、福島県)を南下し、下野(栃木県)をへて、三月二十七日(四月二十九日)深川に戻った。目的地である松島はもちろん、途中の史跡や風景、出会った人々への詳細な描写と、久足の独自の視点による論評が加えられている。文学者、商人、また旅行者としての久足について、また『陸奥日記』の江戸時代紀行文の中で位置づけについては、この後の総論および論説の文章を参照していただきたい。

また、今回の出版は、二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災が契機になっている。久足が『陸奥日記』でたどった旅路の多くは、地震、津波、そして原発事故の被災地となった。

私は、宮城県域を中心に、被災した地域に残された古文書その他の歴史文化遺産のレスキュー活動に従事している。約一〇万点の被災史料を救出する一方、津波で一瞬にして失われ、救出できなかったものも数知れない。一度失われた史料は、二度と取り戻すことが出来ないものである。

さらに、今なお続く「復興」過程の中で、大規模な土木工事、集落の移転、区画整理などにもない、久足が通った地域の集落、地名、道筋、山河、海岸の風景は激変しつつある。被災地では、過去数百年にわたってその地で受け継がれてきた歴

史文化を、またそこに人々の暮らしが積み重ねられた「ふるさと」があったという証を、一挙に失う危機に直面している。

私は、歴史学、人文学研究に取り組む立場として、被災した地域を単に「災害が起こった場所」とさせず、人々の歴史的なあゆみに裏付けられた暮らしがあったことを伝え、将来にわたってそのことを知るための手がかりを残すことを、専門性を活かした災害支援の一つだと考えている。暮らしの痕跡をほとんど失った津波被災地や、私の故郷・福島の、フレコンバッグに埋もれた町を訪れる中で、その思いはより強くなった。失われた手がかりを取り戻すには、何をすべきなのか。その一つは、被災した地域の外に残る史料を集めることであろう。そのような中で、江戸時代の旅行史、観光史の立場から『陸奥日記』を分析した青柳周一、高橋陽一両氏の研究を通じて、その存在を知る事となった。本文が未活字化ということであれば、それを公刊すること自体に意義がある。さらに、小津久足による描写の特徴ゆえに、そこには被災した各地の、過ぎ去った歴史を知るための貴重な内容を含んでいると考えたからである。青柳、高橋両氏に、以上のことを説明し、分担して解読を行いたいと提案したのは、二〇一五年十二月のことであった。

両氏からは快諾を得る一方、青柳氏から、江戸文学者の菱岡憲司氏が小津久足の未刊紀行文についても出版を進めている、との教示があった。『陸奥日記』についても出版される可能性があるとのことであったので、青柳氏から菱岡氏に照会したところ、「陸奥」に関する作品を、被災した東北の地から発信する意義を指摘され、

全文の解説原稿を快く私たちに提供されたのである。本書の刊行は、この「一二万字の被災地支援」無くしてはありえなかったことを明記しておきたい。

菱岡氏からは合わせて、『陸奥日記』を歴史学の視点から検討することの意義について示唆を受けた。久足がたどった各地の史跡、伝承、当時の社会状況の調査には、その経路に当たるそれぞれの地域に根ざした調査研究が必須である。そこで、千葉、茨城、福島、宮城、栃木の研究者に呼びかけ、二〇一六年から「陸奥日記研究会」を立ち上げている。「三・一一」被災各地での史料レスキューなど、歴史学、人文学の立場からの地域連携、被災地支援に積極的に取り組む仲間である。目下、久足の陸奥への旅路について、文学・歴史学の観点から学際研究を進めているが、本書はその最初の成果でもある。研究会の呼びかけ人である菱岡、青柳、高橋の三氏に加え、江戸紀行文学研究の第一人者である板坂耀子氏からも寄稿を受けた。記して感謝したい。

『陸奥日記』が、江戸文学や江戸時代の文化史、経路となった各地の地域史研究で活用されることはもちろん、「三・一一」により被災した地域に暮らす方々や、そこに思いを寄せる方々にとって、それぞれのふるさとを知るためのよすがとなれば幸いである。

小津久足 陸奥日記

目次

小津久足『陸奥日記』刊行にあたって……………	佐藤大介	ii
〔解説〕		
『陸奥日記』の位相……………	菱岡憲司	1
「東北紀行」とは何か……………	板坂耀子	3
『陸奥日記』の東北旅行史的特徴……………	高橋陽一	6
〔論説〕		
一九世紀の商人・旅行者としての小津久足……………	青柳周一	9

『陸奥日記』の位相

菱岡 憲司

小津久足は一般に、曲亭馬琴の友人、西荘文庫の主である蔵書家、小津桂窓として知られる。伊勢松坂の豪商で、通称は新蔵、のち与右衛門。文化元年（一八〇四）八月十二日生、安政五年（一八五八）十一月十三日没、享年五十五歳。その文事には、紀行・詠歌・蔵書・小説受容の四つの柱が見出され、それぞれの営みにおいて、卓越した到達を示している。

小津久足の紀行文は、文政五年（一八二二）十九歳の折の『吉野の山裏』から、没する二年前の『梅の下風』（安政三年）まで、浄書本で四十六点にもぼる。なかでも、複数冊をなす長編紀行『煙霞日記』（二巻二冊、天保八年（一八三七）『ぬさぶくろ日記』（二巻二冊、天保九年）『浜木綿日記』（三巻三冊、天保十年）『陸奥日記』（三巻三冊、天保十一年）『青葉日記』（三巻三冊、天保十三年）『桜重日記』（二巻二冊、天保十四年）『志比日記』（三巻三冊、弘化元年（一八四四）『海山日記』（二巻二冊、嘉永六年（一八五三）は、いずれも質量ともに充実した近世紀行文学の傑作である。五十歳で執筆した『海山日記』以外は、三十代半ばから四十代初めの、気力体力ともに充実した、もつとも脂の乗った時期につづられている。そして『陸奥』

日記』^①は、同時期の雄編群のなかでも、旅した場所といい、構成の妙といい、文体の洗練といい、いずれをとっても久足紀行文の白眉といえる。

近世紀行文学を専門とする板坂耀子は、『江戸の紀行文』（中公新書、二〇一一）において、「江戸時代の紀行の代表作は松尾芭蕉の『おくのほそ道』ではなく、初期の貝原益軒の『木曾路記』と中期の橘南谿の『東西遊記』、後期の小津久足の『陸奥日記』である」と述べる。『おくのほそ道』はもちろんのこと、『木曾路記』『東西遊記』とくらべても知名度の低い『陸奥日記』が、なぜ江戸時代の紀行の代表作といえるのか。板坂の見解を敷衍しつつ私にまとめれば、以下のようになる。

代表作とは、多くの共通点を持つ作品群のなかで、共有する特徴をいかして最高の到達度を示したものと認識によるならば、『おくのほそ道』は名作ではあっても代表作とはいえない。なぜなら、江戸の紀行文を特徴づける「豊かな情報」「前向きな旅人像」「正確で明快な表現」という新たな評価軸に合致しないためである。『おくのほそ道』が中世までの伝統的な紀行文の中心をなす主情的な「旅

の愁い」に重きを置き、事実の改変さえも行って虚構的な文学世界を描いたことはよく知られる。しかし江戸時代には、従来の紀行文には見られない新たな潮流が生じている。それは、情の重視（主情）から知の重視（主知）への転換であり、それを決定づけたのは、『木曾路記』をはじめとした貝原益軒の紀行文に他ならない。その背景には、世情不安定な中世（憂き世）から泰平の近世（浮き世）へと、いう時代の心性の推移や、参勤交代による街道の整備にともない、旅が憂いから解放され、娯楽としての旅が可能になるなどの環境変化が存在する。正確で豊富な地理的知識を重視して、憂いなく前向きに旅を記録するという近世紀行文の特徴を『東西遊記』『陸奥日記』も当然、備えている。

そのうえで特筆すべきは、『陸奥日記』は正確な事実の記載という主知を旨としつつも、旅先での見聞に触発されて齒に衣着せぬ「私」の心情を吐露する——すなわち中世的な「旅の愁い」に限定することない主情を描き得ていることである。「今古和漢雅俗一致」を標榜する久足は、中世までの主情と近世よりの主知という、新旧特徴をふたつながらに備えた紀行文を完成させた。江戸の紀行文の代表作たる所以である。

この度、『陸奥日記』がはじめて全文翻刻されることにより、文学・歴史学はもとより、国語学・民俗学・地理学など、多くの学問分野で活用されることを期待する。そして何より、久足が旅した土地に生まれ、育ち、日々の生活を営んできた方々の目に触れることを希

望する。さまざまな理由で往時の姿が失われたとしても、その土地と、土地に根ざした人々の生活がかつて存在したことはまぎれもない事実であり、『陸奥日記』によって、かけがえのない土地の記憶と先人の息づかいを取りもどすことができると思えるからである。

注

(1) 草稿・浄書ともに題名に振り仮名が振られていないため、読み方に決定的な証拠を得られないのだが、久足は書名の由来となる歌を、紀行中に詠込むことが多い。本作においても、書名への直接的な言及ではないものの、旅を終えて、「陸奥をめぐりこしまに時すぎて東の花はちりにけるかな」との歌を詠んでおり、音律よりムツではなくミチノクとの読みが確認できるため、『陸奥日記』と読むのが適切であろう。

「東北紀行」とは何か

板坂 耀子

一 紀行文学史の中で重要な存在

たとえば東海道では文学的伝統と現実の卑俗化の板挟みにあって、紀行の名作は生まれにくい。中国地方は九州方面への大方の旅人が瀬戸内海の船旅を選ぶために通過されずに、紀行の数は非常に少ない。江戸の周辺は長途の旅というより近郊紀行の名作が目立つ。名所がひしめく京都では題材が多すぎて紀行作家は苦勞している。四国、九州、木曾路、それに江戸時代の紀行文学史の中で最も重要な蝦夷紀行などはそれなりに名作が多いが、旅する行程が限られていて、安定した作風だが変化に乏しい。

そのように考えると、東北紀行は、その範囲の広さとともに作品の多さと多彩な性格で、おそらく紀行を地域別に見た時には群を抜いた存在だろう。

かつて、膨大な江戸紀行の研究に取り組むにあたって私はいくつかの特徴を持つ作品のグループに分類することから始めた。それを東北紀行に応用するとき、当面意識するのは次の三点である。

1 蝦夷の前庭、日光の奥庭

蝦夷紀行は大半が東北を経由する。蝦夷地の松前の殷賑に比して東北の貧しさに強い印象を受けている作者も多い。蝦夷紀行にとって東北紀行の部分はどのような価値や意識のもとに書かれているかは今後の検討課題だろう。一方で東北紀行と銘打ちながら実際には蝦夷まで行っている紀行も少数ながら存在し、それは蝦夷紀行の書名を冠したものと異なる性格を持つのかも考える必要がある。

同様に位置や地域を考慮するなら、これも一定の量と質を確保する日光紀行類との関連や作者の意識も問題となる。蝦夷地への前庭として描かれる東北は、また日光の奥庭として描かれている地域でもある。

2 松島という中心

次に目につく作品群は松島を題材とした紀行の一群である。もとよりその他の東北紀行でも松島は欠かすことなくとりあげられるが、通過する場所ではなく、そこを目的とした紀行としては質量と

もに東北紀行の中で最も大きな存在である。以前に私は、松島は関東以南のみならず、東北地方の人たちが訪れる中心として多数の作品を残しているという点でも重要で、別途の検討を要すると述べたが、^①今もその印象は変わらない。

3 有沢一族の紀行類

江戸紀行の本流は林羅山から貝原益軒を経て、本居宣長をはじめとした国学者の紀行や蝦夷紀行に引き継がれ、幕末の小津久足にいたって完成するというのが私の大まかな江戸紀行文学史の把握だが、これでは説明のつかないのが、益軒以前の江戸時代初期に北陸の有沢一族が参勤交代の途次に記している膨大な紀行類である。一見備忘録風の道中記のようだが、内容や表現は益軒が基礎を築いた江戸紀行の特徴を、より早い時期にもかかわらず充分に具えている。その実態については勝又基氏が報告されているが、^②そのような意識や作風を生み出すに至った背景は今後も重要な研究対象であろう。

二 歴史と風土が生み出すもの

更に全体を通しての東北紀行の印象として、次のようなことを感じる。

1 古代への憧憬

「おくのほそ道」の旅にあたって芭蕉が求めたのは日常から脱した苛酷な旅の環境とともに、辺境や異境だからこそ残る古代への憧憬だった。それもまた江戸紀行全般に通ずる特徴であり、僻地への同情や軽蔑は時にあっても、より目につくのは都会では滅びた過去が現存することへの讚嘆である。文化果てる地は、そのまま文化が生き残る地でもあった。歌枕と古戦場はその象徴であり、芭蕉が平泉と壺の石文で感涙にむせぶように、江戸時代では歌枕より古戦場がむしろ大きな存在となる。

「歌枕になくても美景」と、風景を賞賛する記述は江戸紀行にししばしあるが、それはあくまでも異例で新鮮な観点であって、関東では鎌倉、九州では太宰府や対馬の人氣が示すように、江戸時代の人々は現代の私たちよりはるかに歴史的なものへの関心が強い。たとえ卑俗なまやかしであっても、何らかの伝説に彩られない地名や建物は、どんなに美しくても魅力を感じなかったのではないかと思えるほどである。

2 破格な形式

紀行評論家でもあった小津久足は、知的考証を紀行の重要な要素と考える。一方で国学者の片岡寛光のように、こうした考証を紀行から排除することを強く主張する紀行作家もいる。

その寛光が序文で、本来あるべき紀行の姿として絶賛する服部菅雄「壺石文」^③は、滞在記と旅行記が混在し、各地で見聞した奇怪

な逸話を長文で書きこむなど、むしろ異色で破格な紀行だ。

東北紀行には、地域が広範にわたり作品数が大量であることを考慮しても、奇談集の体裁を取るもの、伝説の紹介を主とするもの、紀行としては変わり種の芭蕉の「おくのほそ道」や只野真葛「いそづたひ」などのように、このような自由さ、破格さを持つ作品が多い。それは通常の安定した形式では表現できない、蓄積されて何重にも重なった豊かな文化の風土が生むものかもしれない。

三 「陸奥日記」の意義

小津久足「陸奥日記」を、このような東北紀行の中において見るとき、その意義や価値は更に明らかになる。

それは、蝦夷紀行や日光紀行の一部ではなく、「東北」を中心の題材とし、異色な変化球ではなく、けれんみのない堂々とした本格的な紀行として完成させた、ありそうでなかった貴重な東北紀行と言えよう。奇をてらわず肩肘はらず、それでいてゆうゆうと「駕籠がない街道はきつい」などという他の紀行にはない日常の情報をさりと書きこむ。いつものことだが、生活者として芸術を楽しむことへの、あきれるほどの自己肯定と自信も、資本主義の近代がすぐそこに迫っている時代の反映なのだろうか。そういう意味ではこれは江戸時代そのものが生んだ東北紀行の総決算でもある。

注

- (1) 拙著『江戸を歩く』（葦書房 一九九三年）中の「なぜ、松島が」の章。
- (2) 勝又基「藩士文芸としての紀行文」ペリカン社『江戸文学』28号 特集「近世紀行文」。
- (3) 皇學館大学紀要32号に大杉光生氏の翻刻がある。これは静岡県富士文庫の写本が底本で、東北大学にも内容はほぼ同一の写本がある。

『陸奥日記』の東北旅行史的特徴

高橋 陽一

「松島の景すゞろにみまほしく」。『陸奥日記』上巻冒頭のこの一言が、小津久足の東北（奥羽）行脚の動機を端的に表している。わけもなく松島の景色がみたくなったという出立のシーンは、「松島の月先づ心にかゝりて」草庵を出た松尾芭蕉『おくのほそ道』の旅立ちの場面をも連想させる。

松島は、江戸時代前半の一七世紀には日本三景（「三処奇観」）の一つに数えられており、東北を代表する、全国的に知られた名所であった。江戸時代における松島への旅の記録は数多く残されているが、それらを分析すると、旅の行程は、①松島往復型 ②東北周回型 ③北海道往復型 ④江戸・上方旅行型 ⑤その他のおよそ五パターンに分類できる。①はその名の通り松島来訪を主目的とし、松島もしくは金華山を終点にUターンして帰路につく行程である。②は松島、および松島と並ぶ東北の名所であった平泉もしくは出羽三山をめぐる、東北を周回する行程、③は公務等で北海道（蝦夷地）に渡航する途中に松島に立ち寄る行程、④は東北地方を出立し、江戸見物や伊勢参宮の途中で松島に立ち寄る行程であり、⑤は松島から三陸沿岸をたどる行程などが該当する。『陸奥日記』の行程は①

に当てはまり、久足の松島への憧憬と年来の宿意を汲み取ることができよう。^①

松島往復型の旅は、儒学者・細井平洲（『おしまのとまや』）や若かりし頃の伊能忠敬（『奥州紀行』）も行っている。この旅は、『陸奥日記』のような紀行文（時に和歌を盛り込みながら旅先の詳しい状況、故事、著者の感懐を綴った自己表現の旅の記録）を著す知識人の旅に多くみられる一方、道中日記（簡潔で客観性の強い旅の記録）を著す庶民の旅にはほとんどみられない。自然景観や松尾芭蕉の足跡のみならず、歌枕や霊場といった古代以来の風景が積層した松島は、学者・歌人・僧侶といった雅文芸を享受する人々にとってまさに旅の聖地であった。

『陸奥日記』の内容的特徴と史料的价值は、久足の幅広い学問に裏打ちされた教養と、日常の営みである商いや非日常の旅といった豊かな人生経験によって養われた卓越した観察眼、そしてあるがままの感情の発露にあるといえるだろう。^② その久足が旅先の事物を評価する際に持ち出したのが、「俗」という指標であった。例えば、仙台では藩主伊達家の菩提寺である大年寺など「めでたきつくりぎ

まなる「寺社」について、それらは「俗人」の喜ぶ所で、自分の心にはかなわないため訪問しなかったと述べている。その一方で、松島に関しては、「甚寂莫たる地にして、俗気なし。よに名だかきところなれば、さぞ俗気あらん、とかねておもひしにたがひて、いと心にかねるところなり」と、静寂で「俗気」がなく、想像と異なりとても心にかなう場所であると称賛している。

また、高所から松島を一望できる富山の「大仰寺」に登った際には、次のように綴っている。

絶景とよにいふ景の、俗にちかきたぐひにあらず、真の絶景とは、これらをやいふべき…この山は幽邃にて、美景なれば十分といふべく、都とほき僻地の景は、おほかたすごくきびしきものなるに、いとをだやかに、花やかにして、都ちかき山のさまともいふべき趣あり

松島の眺望は僻地であるにもかかわらず険阻ではなく、穏やかさと華やかさを備え、都に近い自然景の風情もあるが、決して「俗」には染まっていない。これこそが「真の絶景」であると、久足は最大級の賛辞を松島に贈ったのである。山中の参道を登って寺の書院に辿り着き、眼前の眺望が一気に開けたその時、押し寄せてきた高揚感はいかばかりであっただろうか。

忌み嫌う「俗」な場所、すなわち過度に繁華であったり、大衆的な営みがみられる場所ではなく、かといって僻地にありがちな荒々しさが全面に出ることもなく、美麗で気品のある自然景を備え

た場所。久足にとって、松島は風景・雰囲気において絶妙なバランスを保った理想郷であった。

一方、いわゆる白河以北の東北に対する江戸時代人の認識が読み取れる点もまた、『陸奥日記』の特徴であろう。それは未知なる異界・異境としての東北認識であり、「はるけき陸奥」という上巻冒頭の表現にすでに滲んでいるが、帰路白河に至り、「はじめて辺鄙をはなれたるこゝち」がした久足が、旅を振り返って綴った次の一文にはつきりと表れている。

すべて国風、東夷のなごりありて、人にかたるとも、その境をみずしては、まことすまじきことどもおほし

「夷」とは、未開の異民族を指す言葉である。「国風」に「東夷のなごり」があるとは、古代の東北に暮らし、「蝦夷」と呼ばれ異端視されていた人々の慣習や風土がこの地方に残存しているということであろう。久足は、実際に現地を歩いてそれを体感したと強調しているのである。

こうした東北認識は、江戸幕府の巡見使に随行して東北・北海道をめぐった古川古松軒の『東遊雜記』（天明八年（一七八八））などにも露骨に表れており、江戸時代にはある程度一般化した認識であった^③。久足自身は、東北を未開性や野蛮さで塗り固めてはならず、むしろ旅先ごとに異なる東北各地の地域性を子細に描写し、僻地や辺鄙な場所には好感を抱いてさえいる。だが、久足ほどの教養人であっても、（あるいはだからこそなのか）根底に境界や民族に

対する鋭敏な感覚を潜伏させていた点は押さえておく必要があるだろう。約一二万字におよぶ明快で細やかな記述で東北の実情を書き尽くした『陸奥日記』は、旅行史上の金字塔であるのみならず、江戸時代の東北地域史、さらには江戸時代人の精神史を探る上でのバブルといえるだろう。

注

- (1) 近世の松島旅行の具体的な分析については、拙著『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉―』（清文堂出版、二〇一六年）を参照。
- (2) 『陸奥日記』の内容上の諸特徴について、詳しくは菱岡憲司『小津久足の文事』（ペリカン社、二〇一六年）第三章『陸奥日記』を参照。
- (3) 東北に対する後進・未開・異境イメージの歴史的経緯については、河西英通『東北―つくられた異境』（中央公論新社、二〇〇一年）を参照。

一九世紀の商人・旅行者としての小津久足

青柳 周一

はじめに

参照いただければ幸いである。

一 干鰯問屋「湯浅屋与右衛門」としての小津久足

小津久足とは、きわめて多面的な存在である。伊勢国松坂（三重県松阪市）に本宅を置いて江戸で出店を經營した商家の当主にして、幾度もの旅を経験した練達の旅行者。その旅の経験に基づく、質量ともに当代随一の紀行文作家。本居春庭の下で詠歌に励み、後鈴屋門の重鎮にもなった人物。そして類い希な蔵書家でもあるといった風に、さまざまな顔を我々の前に見せている。こうした久足の個性の把握に努めながら近世史の中に位置づけ、その著作や和歌の歴史の価値を明らかにするには、改めて国文学と歴史学との共同研究が重要となるであろう。

本稿は、久足の多様な側面のうち、商人と旅行者としての特徴を幾分なりとも掘り下げ、『陸奥日記』のテキスト理解の一助とすることを旨とするのである。なお久足の文事については菱岡憲司氏が近年刊行した浩瀚な著書¹⁾において、現在の研究上の到達点が示されている。筆者も拙稿で『陸奥日記』の考察を試みており、あわせて

久足は、江戸小網町三丁目（東京都中央区日本橋）で干鰯魚粕魚油問屋を営む小津家の六代当主であった。その屋号を「湯浅屋与右衛門」という。ちなみに松坂には小津姓が多く、久足の小津家（与右衛門家）は江戸で紙・木綿問屋を經營した小津清左衛門家（小津産業株式会社および小津グループ各社の創業家）の別家である。

弘化三年（一八四六）に久足が著した『家の昔かたり』³⁾には、「天保六甲午年（実際には五年）、江戸大火にて（小網町の住居が）やけたり（中略）干鰯問屋のうち、橋本小四郎、久住五右衛門（五左衛門）両家ともに、この時深川へ転宅の企ありしかば、転宅せずしては便利もあしかるべしとて、かたぐい⁴⁾叟談となり、天保七丙申年四月廿六日に今の深川油堀通富久町にはうつりし也」とある（引用史料中の括弧内の注記と傍線は筆者による。以下全て同じ）。久足は天保七年（一八三六）に湯浅屋を小網町から深川富久町（江東

区深川)へと移転させたのであり、それから四年後(天保十一年)の『陸奥日記』でも、やはり「深川なる、なりはひ(生業)の家」から旅立っている。

なお『陸奥日記』には出発の様子が「なりはひの家のまへより船にのりぬ」と記されているが、おそらく久足は富久町の裏手にあった堀(現在は埋め立てられて「亀堀公園」となっている辺り)から船に乗り、小名木川まで出て中川船番所へ向かったと思われる。

曲田浩和氏の論考⁽⁴⁾によれば、江戸で干鰯の取引が行われる干鰯場(銚子場・江川場・永代場・元場)はすべて深川に集中しており、天保期から嘉永期にかけては湯浅屋以外にも、多くの干鰯問屋がその深川へと移転している。同論考では湯浅屋と橋本・久住ら「仲間三軒」が、天保五年の大火後に深川へ揃って移転したことを示す史料も紹介されており、『家の昔かたり』の記述が裏付けられる。湯浅屋と橋本・久住は干鰯問屋として同じ銚子場(江川場)組に属し、天保期には「紀州・勢州領出稼六人」⁽⁵⁾ Ⅱ紀州藩領から江戸へ出店している六軒の問屋の一員として行動を共にする様子も見られ、経営上近い関係にあった。

あわせて曲田氏は、湯浅屋が明和九年(一七七二)に小網町で火事があった際には深川で仮宅を持ったものの、また小網町へ戻った事例から、明和期には深川ではなく小網町を本拠とし続ける意味があり、それが天保期には変化するのではないかと推測する。すなわち、江戸干鰯問屋が新興流通勢力である内海船と密接につながり、

また他業種の兼業化も進む(湯浅屋は一八世紀以来米穀問屋も営んだが、嘉永期以降は雑穀・荒物問屋も兼業している)といった状況から、問屋が深川の取引場と結びつきを強め、積極的介入が必要となった結果として、天保期以降に問屋自体が深川へ移転したと論じているのである。

『家の昔かたり』によれば、久足が当主となっていた時期の「佐久間町火事」(小泉祐次氏の翻刻文には「文化十二己丑年」とあるが、原本によれば文政十二年(一八二九)である。菱岡憲司氏のご教示による)でも小網町の店が類焼しており、この時にも「深川に転宅せん」の企⁽⁶⁾があったものの、「浄謙居士(四代当主新右衛門。久足の実父)」が「事をつまやかにするをきらひ、大きくとりひろぐることをこのまれし人」であり、「江戸市中よりして、江戸外深川にうつること、甚不承知」であったため、移転が頓挫したという。しかし、曲田氏の議論を参照するならば、四代当主個人の反対により諦めたというよりも、明和期と同様に、この頃には未だ深川移転を行う条件が十分整っていなかったのではなからうか。

いっぽう、久足は同書中において、四代当主の商人としての「器量」は認めており、深川の「銚子場」(銚子(千葉県銚子市)周辺の村々から集積された干鰯を主に扱った干鰯場)の蔵が類焼した際、富久町の土地を購入することで現地での評判を回復した件を評価している。この場所が、天保期に湯浅屋の移転先となるのである。なお久足は「商人はたゞ地面にまさる宝なし」「わが代に地面のあまた出

来たること、実によろこぶにたへたり」とも述べるように、土地に高い資産価値を見出し、その集積に努めていたようである。

また湯浅屋は、地元松坂では紀州藩から扶持を与えられて御用を務めているが、東北諸藩とも経営上深く結びついていた。たとえば嘉永六年（一八五三）には仙台藩による専売制度（「御国産仕法」）のもとで江戸表元方問屋を勤め、安政四年（一八五七）の同藩による国産品専売の仕法でも中心的な役割を担っている。^⑥さらに『家の昔かたり』には、八戸藩と湯浅屋の関係は「網方御とりあげにて国産」（文政二年以降の「御国政御主法替」による干鰯・べ粕などの国産品買上げ策のことか）^⑦となつて以降は「不都合」な状態にあったが、湯浅屋とともに同藩へ出入りしていた「栖原久次郎」（先の「紀州・勢州領出稼六人」にも名を連ねる干鰯問屋）が没落して以降に良好となつた（「わがたゞ一軒の支配となり（中略）六代め与右衛門（久足）代には、この御屋敷結構なる御得意となりぬ」とある。

ところで、久足は『陸奥日記』の旅の動機を「松島の景すゞろにみまほしくなりしかば」としか語っていないが、湯浅屋にとつて重要な意味を持つ銚子周辺および東北地方の現状を自分の眼で見て確かめようとする、商家の当主としての意識が働いていたことも想定し得る。ただし久足の紀行文には商用に関する具体的な記述はほとんど見られず、『陸奥日記』でも以下の①②③しかない。そのうち銚子については経営上の関心があったことを率直に表明しており（①）、当時の湯浅屋がこの地域と特に強い関係があったことが窺わ

れる。

①息栖神社（茨城県神栖市）の参拝を済ませた後、久足は「銚子ありの光景もみまほしく、はたそこには、なりはひ（生業）のことにつきてしたしき家もあれば」といった理由で、銚子の「盛岡屋何がし」の家を訪ねる。この「盛岡屋」は、南部問屋の盛岡屋権三郎^⑧である。銚子滞在中には、これも「なりはひのことにつきてゆかりある家々」から、鮮魚（「かたい・あんこなど」）の数々を贈られている。

②仙台・国分町の旅籠屋である小畑屋（太兵衛）に久足が泊まった際、「なりはひのことにつきて、すこしのゆかりある家」である「ますや何がし」から酒肴を贈られている。「ますや何がし」は、仙台藩の蔵元を務めた升屋平右衛門とも思われるが、確証がない。③帰路の栃木宿（栃木県栃木市）では、「われと主従のちぎり」のある「釜屋新助」という商人の家に一泊している。ここでは、「なりはひのことにつきてしたしき家」である「河内屋なにがし・釜屋なにがし」という商人もあわせて訪ねている。

二 一九世紀の旅行者としての小津久足

『陸奥日記』の冒頭に、「もとより青雲には心もかけず、べちにもとめもなければ、たゞひとつのもともめあり。そのもともめといふは、名山水をさぐるのくせにて」という一文がある。近世の中後期

には、「山水之癖」「山川癖」「丘壑之癖」などと称される人びとが出現していた。こうした人びとは旅と風景を愛好し、現地へ足を運んで実際の風景を直に確かめるとともに、写実的な絵画や記録を遺した。近世における旅行の隆盛の中で、自然に対する実証的な観察眼と精神が次第に育まれたと言えるであろう⁹⁾。久足もまた自らの性向を「癖」として認め、その「癖」に促されるまま旅をくり返した一人であった。

久足は、『陸奥日記』の旅の頃には経験豊富な旅行者となっていた。たとえば旅程についても事前に慎重な検討を行っており、江戸から奥州へ向かうには「日光のかたをにかけて」（日光街道から奥州街道を）行くのが「よのつねのみち」——一般的なルートとしながらも、出発時期が旧暦二月末であり、道中の降雪も懸念されることから、浜街道を選択している。浜街道が通る現在の福島県浜通り地方は冬でも雪が少なく、比較的温暖である（暖流（黒潮）の影響などによる）ことは当時から知られていた。

いっぽう当時の旅行者は、現地の人びとにも支えられながら旅をしていた。久足もまた各地の名所を訪ねるに際して、しばしば現地で案内者を頼んだことが『陸奥日記』から読み取れる。銚子では前出の盛岡屋が「磯めぐり」の案内を自ら買って出ており、水戸（茨城県水戸市）では宿屋の主が久足に案内者を雇うよう勧めている。旅行者が大勢集まる松島（宮城県松島町）以外でも案内者は存在しており、久足は太田（茨城県常陸太田市）や桑折宿（福島県伊達郡

桑折町）、日光の鉢石町（栃木県日光市）などでも案内者を用いている。

このうち太田では「案内銭は百五十文」と定められていた。太田や鉢石町では案内を「なりはひのかたはし（本業以外の仕事）」（鉢石町）とする住民がいたが、それ以外にも久足は街道の茶屋や馬士などから名所や地名・地理についての情報を得ている。さまざまな職種の人びとが地元にあつて旅行者を案内できるようになっていたのであり、ここから近世の地域社会に対する住民自身の認識の深まりと広がりが見て取れる。

久足は奥州への旅の予習や、帰還後に『陸奥日記』を執筆する参考として、数々の文献にもあたっていた。それらは文中や頭注で引用され、巻末には松島についての紀行文の書名が約二〇篇列挙されている。まさしく参考文献一覧である。書籍文化の恩恵を存分に享受したという点でも、久足は近世という時代の刻印を強く受けた旅行者であった。

久足の読書経験と、旅先での史跡探訪との結びつきを窺うことができる事例として、『陸奥日記』から多賀城碑（宮城県多賀城市にあり、かつて歌枕「壺の碑」と同一視された）に関する二つの文章を引用しよう。

- ①「すべてこのあたり、昔の多賀城の跡にて（中略）「つぼのいしぶみ、この碑のことにはあらず。こは多賀城の門の碑なり」といふ説あれど、そはなま学者の、おのが才をうらんがため

に「考」、あるいは「論」など、ことごとくしく名づけて、益なきことをしるすのたぐひなれば、いづれにてもありぬべし。(中略) この碑はひとたび土中にうもれたりしを、仙台の城主、吉村の君の時、いたりふかき御みやび心よりして、ほり得させ給ひて、ふたたび世にはいでたる也。」

②「このあたりにては、小児を「わらし」といひ、「大道小道」といふことありて、よのつねにいふ三十六丁を「大道一里」といひ、六丁を「小みち」といふによりてなれば、今のよの陸奥歌とやいはまし。(中略) 六丁を一里といふは、古風なることにて、多賀城の碑文の道法にもかなへるは、をかし。」

①の後段で、久足は仙台藩五代藩主である伊達吉村の時期に碑が発見されたとしている。しかし、享保十年(一七二五)の細井広沢『観鷲百譚』では、これを四代藩主綱村の時期としており、文化年間(一八〇四〜一八)の山田聯(慥齋)「多賀城修造碑面考」では「義公よつて搜索し得出する所なるべし」と、碑の発見を徳川光圀の功績に帰す。⁽¹⁰⁾

こうした伊達綱村や徳川光圀が登場する碑の発見伝承は、光圀が綱村に碑の雙鉤(文字の輪郭だけを墨の線で写しとること)を要請したこと(享保四年(一七一九)の佐久間洞巖『奥羽観蹟聞老志』などに記録される)が、碑が発見された経緯として受け止められる中で生じたようである。しかし久足は『陸奥日記』で光圀への深い敬慕をたびたび表明しているにも関わらず、①では彼に全く言及し

ていない。ここから、久足は光圀の登場する発見伝承自体に接していない可能性が高い。

伊達吉村を発見者とする伝承は、天明六年(一七八六)橋南谿『東遊記』後編や、享和元年(一八〇一)田宮仲宣『橘庵漫筆』などに見られる。このうち『東遊記』は、『陸奥日記』巻末の参考文献一覧にも挙がっている。いっぽう、同じ一覧で『東遊記』と並ぶ紀徳民『松島記行』(細井平洲『遊松島記』か)、半井通『松島記行』(和氣柳齋(半井行蔵)『松島紀行』)、沢元愷(平沢旭山)『漫遊文草』の「奥羽曆」(「游奥曆」)などには、碑の発見者の情報は記されていない。⁽¹¹⁾以上から、久足は碑の発見についての知識を主に『東遊記』によつて得ていたと考えておきたい。

また②では、「六丁を一里」とするこの地域特有の距離の表現(大道一里が三六町、小道一里が六町)について、それは「多賀城の碑文の道法」とも一致すると述べられている。碑に記された里程を六町＝一里として解釈する説は、新井白石『北海隨筆』や、長久保赤水の宝暦十年(一七六〇)『東奥紀行』などに見られ、古川古松軒の寛政元年(一七八九)『東遊雜記』でも「水戸赤水先生の考を聞しに」と、『東奥紀行』の説を踏まえた考証がなされている。久足は『東奥紀行』と『東遊雜記』をともに読んでおり、これらに示される里程の解釈を受け入れていたのであろう。

ただし、赤水と古松軒は多賀城碑と壺の碑を別物とするが、久足は否定的であり、「こは多賀城の門の碑なり」と説く「なま学者」

を罵倒する(①)。これについては、まさに古松軒が『東遊雜記』で「今世にいふ壺の碑は、多賀城の門碑なり」と記している。

久足は紀行文中で貝原益軒とその著作にしばしば言及するが、『陸奥日記』については赤水の『東奥紀行』の影響にも注目すべきであろう。たとえば「阿伽井が嶽」(福島県いわき市平の関伽井嶽)の「竜灯」については「長久保赤水が『東奥紀行』にもいみじくかきて、図をもいたせれば」と、同書から知識を得たことを明言している。また松島にあっても、雄島について「墓碑、あるは俳人の碑などならびたり(中略)この碑(頼賢の碑)のみをのこして、外はとりすてまほし」と記すが、ここには『東奥紀行』の「傍に一小碯あり、面に芭蕉の朝夕の句を刻む、好事の徒の為す所なり、其の他石仏碑碣仏碑率堵婆の類、累々乎として相列る。(中略)殺風景に非ざるか、我若此国に当路せば車を下らずして先づ之を一掃せんと」(原漢文)という一文との関連性が見出せる。⁽¹²⁾

こうした赤水の「雄島観」は、遠山景晋が文化二(三年(一八〇五(六)の北方出張について著した『未曾有後記』(「赤水が言葉は理り余り有。我はたゞ一掃のみならず、墓碑造り戒名彫たる奴原をば首打切て捨んづ」)や、文政十年(一八二七)小宮山楓軒『浴陸奥温泉記』(「石仏戒名五輪塔俳諧碑オビタシク(中略)赤水紀行ニ是ヲ一掃セシコトヲ云ヘル、理リナリ」)にも影響を与えている。書籍は知識の源泉となるが、読み手が実際の風景と接する時の印象や感情を規格化もし得ることを、こうした事例は教えてくれる。

むすびにかえて

以上、本稿では小津久足の商人また旅行者・紀行作家としての側面に検討を加えた。ただし久足自身は『陸奥日記』で、「かく陸奥かけて心のまゝに旅立しつゝ、露宿風餐のわづらひなきも、はたなりはひのかけにして」と、自分がこれほど自由に旅行できるのは「なりはひ(生業)」―商家の当主という裕福な境遇のおかげと認識していた。また「つかへある人は、さがりがたきゆゑもあれど、商人の身にては、なりはひのひまをぬすまば、漫遊はこゝろのまゝなるべし」と、主君に仕える武士と異なり、商人には「さがりがたきゆゑ」―移動を制約される理由が必ずしもなく、生業との折り合い次第で旅行は思いのままとも述べている。

すなわち久足自身は、商人であることと旅行者であることは密接に関連しており、むしろ商人であるからこそ旅行者でもいられると考えていたのである。久足の自己認識の基礎には、あくまで湯浅屋与右衛門という商人であったことが置かれていたのであろう。

また久足は、近世の商人が文化的にどれほど豊かな存在であり得たか、その可能性についても我々に示してくれている。彼は、彼自身が愛した『近世崎人伝』の著者である伴蒿蹊―近江国の八幡(滋賀県近江八幡市)に本拠を置く近江商人・扇屋伴莊右衛門家⁽¹³⁾の五代

当主であった―なども比肩する、近世社会が生んだ文芸の巨人の一人であった。

注

- (1) 菱岡憲司『小津久足の文事』(べりかん社、二〇一六)。
- (2) 青柳周一「天保期、松坂商人による浜街道の旅―小津久足『陸奥日記』をめぐって」(平川新編『江戸時代の政治と地域社会 二 地域社会と文化』清文堂、二〇一五)。
- (3) 『家の昔かたり』については、小泉祐次「小津久足自筆稿本『小津氏系図』と『家の昔かたり』について」(『鈴屋学会報』五、一九八八)での翻刻を参照・引用した。
- (4) 曲田浩和「近世後期における問屋の深川移転について―材木・干鰯商を中心に」、『江東区文化財研究紀要』四、一九九三)。
- (5) 湯浅屋・橋本・久住の関係は、原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、一九九六)、柚木学「天保期以降における菱垣廻船・樽廻船の動態」(『経済学論究』三〇一、一九七六)などを参照した。
- (6) 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編五(近世三)』(二〇〇四)。
- (7) 菊池勇夫「文政天保期における八戸藩の藩政改革と農民闘争」(『史苑』三六一、一九七五)。
- (8) 盛岡屋については、斎藤善之「近世における東廻り航路と銚子港町の変容」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇三、二〇〇三)参照。
- (9) 「山水癖」については、内山淳一「風景美への憧れ―記録と絵にみる山水癖」(仙台市博物館『特別展図録 江戸の旅―たどる道、えがかれる風景』、二〇一三)参照。
- (10) 以下、多賀城碑の発見伝承と里程の解釈については、安倍辰夫・平川南編『多賀城碑―その謎を解く「増補版」』(雄山閣、一九九九)参照。
- (11) 本稿では、早稲田大学図書館古典籍総合データベースおよび国立国会図書館デジタルコレクションによって確認した。
- (12) 近世紀行文に見られる雄島の風景の記録については、高橋陽一『近世旅行史の研究―信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』(清文堂、二〇一六)参照。
- (13) 「庄右衛門」とも表記されるが、本稿では近江八幡市史編集委員会編『近江八幡の歴史 五 商人と商い』(二〇一三)に従った。

小津久足『陸奥日記』

凡例

- 一、慶應義塾大学文学部古文書室所蔵本（二四〇・二三八・三）を底本とした。
- 一、通読の便を考慮して、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・字下げを施した。
- 一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。
- 一、見消等の訂正箇所は、訂正後の文字のみを翻字した。
- 一、踊り字の「ト」「、」「くく」は底本のままとしたが、漢字の後の「ク」「く」「」等は「々」に統一した。
- 一、底本の付箋・頭注については、該当箇所の本文上欄に記した。その際、付箋文は（付箋）と明記したのち「」で示した。
- 一、本文に誤りが認められる場合も底本のままとし、当該文字右脇に（ ）を用いて注記した。
- 一、小字双行による割注は（ ）を用いて示した。
- 一、虫損で判読不明の箇所は、およその文字数を□で示し、右脇に（ムシ）と注記した。
- 一、文中の地名にも原則として濁点を施したが、小津久足自身が濁点の有無を区別している可能性がある箇所もある。そうした箇所については原表記に従い、濁点を施さなかった。

陸奥日記 卷上

陸奥日記卷上

(表紙見返し部分付箋)
『集古十種』歌之事。」

身をさめ家をととのふることは、わが得たるところならねど、おのづからにうけえたる幸は、あやしきものにして、衣食住の三をかくことなければ、もとより青雲には心もかけず、べちにもとめもなければ、たゞひとつのもともめあり。そのもとめといふは、名山水をさぐるのくせにて、年々にその奇をもとめて、去年は熊野の滝よりかけて天の橋立の勝をきはめしも、これ、はたうけえたる清福とやいはん。されば「隴を得て蜀をのぞむ」てふことのごとく、松島の景すゞろにみまほしくなりしかば、この春江戸に来たるついで、そのことおもひたちぬ。江戸にはなりはひのことにつきて来たるなれば、はるけき陸奥の旅も、道の半をことのついでにすませたるは幸の旅路なり。

時は天保十一年といふとしの二月のことにして、あひともなはん人のあるは、ことさまたげがちにて、もとより心になふ人もなければ、供のをのことうちつれて、廿七日の朝、深川なる、なりはひの家を立いでんとす。

先は日光のかたをかけておもむくがよのつねのみちなれど、このころ余寒ことのほかにて、きのふは雪さへふれれば、中禅寺などは雪もふかゝらん、さらば、かへさにかよはん、とかねておもひし浜街道のかたをこそ、とてそのかたに、きのふとみにおもひさだめぬ。けさもそのなごり、猶いさゝか雪ふりつゝ空くもりたれば、「けふは、おもひとゞまりて、天気よくなりて旅だゝんこそ、よかんめれ」と人はすゝむれど、けふはさてもありなむ、ながき旅路に雨露風雪の苦は、いづれのがれがたかるべければ、いでや、かばかりの雪に、くづをるべきかは、とてなりはひの家のまへより船にのりぬ。

はるかなるみちのおくにも時しありてゆけばゆかるゝものにぞありける

おもひたつ心ぞしるべみちのくもとほしとなにかわきていふべき
ゆくさきとほき旅にいでたつことなれば、きのふまでは心もとなかりしも、一步ふみいづれば、はやく千里のみちもいとほざる心とはなるものから、

さすが猶けさのこゝろぞたゞならぬ旅より旅にいづるわかれも

船のうちよりかへりみしがちなり。中川の御番所のまへは船人名のりすめり。土根川にいで、行徳に船はてぬ。こゝは、はやく下総の国にて、川のむかひも、むかしは下総の国なりしを、今は新武蔵といひて、葛飾郡は両国にわかれたり。こゝまでは、すぎし秋、国府台の古戦場より、真間の紅葉かけてみめぐりしをり、来たりしことありしが、国府台の松のむら立川上に見ゆるにつけては、そのをりのことおもひいでられて、なつかし。

その行徳まで水路三里也。こゝまでおくりに来し人々ありしかば、茶屋にて酒のませてかへしぬ。いそぐ旅路をさまたげつゝ、何のやくなき「おくり」てふことのあるも、あやなき世のならひ也。をりく雪ちらくくとせしも、こゝにて天気よくなりぬるはよろこばし。

村名ノカナハ、仮字ヅカ
ヒニカ、ハラズ、ソノト
ナヘノマ、ニシルセリ。
コハソノト(コ)コロニイタリ
テ人ニトフ□キノタヨリ
ヨカランガタメ也。

この宿を出はなるれば日光山はるかに見えて雪いとしろきに、こゝろのうらはまさしかりけり、とおもひつゝ、かはらしシユク宿・とほかげなどいふ村々をすぎ、八幡宿ヤフタにいたる。行徳より一里八丁といふ。こゝには名もしるく、左のかたに八幡御社おはしまし、鳥居・二王門などありておくふかくたゝせ給ふ宮ゐのさま、よのつねならず。ところにあはせては大社なり。御本社と拝殿との間に、寛政五年に地中よりほりいだせり、といふ鐘をおきたるが、元亨の年号ありて、銘の手跡、甚殊勝にめづらしきかね也。加藤千蔭が寛政六年にしるせる『うなかみ日記』に、このかねのことを「去年ほりいだせり」とあるも、今ははやくむかしのこととなりぬ。かゝる実事は、ものにしるしおかまほしきこと

にて、後にそのことしのぶくさはひとなるものぞかし。鐘楼なるもおなじつらにや、とゆかしくて、のぼり見れば、こはむげにちかきよのかね也。

もとの鳥居をいで、いさゝかゆきたる右のかたに、いかきつくりめぐらしたる竹むらあるは、「やわたのやわたしらず」とて、この竹村のうちに人のいることをゆるさず。里人もいることかたきによりて、かく名づけたるなるよし。されば年々に竹村はおもひのまゝにしげりそひゆくさまなれど、なほやぶの中はくまなくみえて、よのつねの竹村なるを、かく入がたきよしいふはいとあやしきことにて、そのゆるよしは里人もしらざるよし。昔、水戸黄門光圀公はいりたまひしかど、「この後、かならず人(マ)にいることなかれ」とおほせられしよし、さと人いひつたへたり。さばかりいみじかりし名將の、かくやくなきことなし給へり、といふは、まつたくそらごとにて、よにすぐれたる人には、かならずかゝる妄説をいひつたへて、中々その人の名たてとなるためしあるたぐひなるべし。

さて、この宿より左のかたに入て、ふかまち村といふをすぎ、中山村といふにいたる。こゝには中山寺てふ法華宗の寺ありて、そのはやしは右のかたにちかく見えたり。この中山むらのうち、左のかたの畑の中に名馬塚といふ塚ありて、松の木立のつかじるしなるも木立ものふりたり。こはむかし名馬をうづみしつかなるよし。かの「駿馬の骨をば、かはずやありし」といひし人にみせなば、よろこぶべき古跡也。

そのつぎのむらは、右はかみ山新田、左は藤原新田といふ村なるよし。真菰沢といふ村をもすぐ。夏はさぞひきわづらはんあやめ草こゝには真菰さはといふなり

鎌ヶ谷宿カマガエにいたれば八幡より二里八丁といふ。この宿をすぎ大きなかねの仏たてるあたりより、ひろき野にいづるを、鎌ヶ谷野といふよし。小金が原のつゞきにて、かぎりなき平原なるが、山はひ

「ヲカシ」ノ仮字、本居
□ニテハ「ヲ」ト「オ」
ト意ヲタガヘテモチユレ
ド、ワレハオモフヨシ□
リテ、「ヲ」、ノミ用ユ。

とつも見えざるに、たゞつくば山のひとつ見えたるさま、いとをかし。

やゝゆけば、野馬どもかすあまたあそびたはむるゝさま、めづらしきものにて、画にかきたらむ
がごとし。歌の題にては「春駒」をやくよりたびくよみしかど、この真景はしらざりしを、はじ
めてこのさかひにいたりて、むかしよりさだまれる題の偽ならぬをしりぬ。

のどけしな心のまゝに草はみて霞をあさる野辺の春こま

むれあそぶ駒にはまれて里の子がかる草やなき鎌ヶ谷の原

さしも紅塵しげき江戸も、かく半日あまりのみちをへだてきたれば、かゝるめづらしきさまをみる
は、あやしきものにて、このこまを見ては、にはかに江戸のかた、とほくなれるこゝちす。この馬ど
も、ひるはゆきゝの人をおそれがちにみゆれど、よるは狼をおそれて人なつかしげに街道ちかくいづ
るよし。獣も、そのほどくゝに心あるもの也けり。

『御行実』ハ西山公ノ御
詩文ヲ集メタル『常山文
集』ノ附録ナリ。

この原ゆけどくゝかぎりなく、あるは林の中などに入る。この野原には木立なくして、ゆきゝの人
どもの路うしなふことありしを、「まよはせじ」とて、西山公の松をうゑさせたまへりしことの『御行実』
にみえたるを、ふとおもひいでゝ、

あふぎ見よこの野ゆきかふ旅人は松よりしげき君がめぐみを

鎌ヶ谷より二里にちかく白井宿シラエにいたる。けふは木下キオロシまでとおもひたるなれど、水路は水まさりて、
のぼり船おそく、陸路は泥なめらかにしてあゆみがたく、いづれもきのふの雪のなごり、道はかどら
ず。こゝにて日もくれしかば、角屋なにがしといふものゝ宿にやどりぬ。あらましよりみちとほくあ
ゆみしは、うれしきものなれど、かくのごとく、かねておもひし宿までえゆかざるは、甚心ゆかぬも
のにて、たゞそのことのみ、くちをしくおぼゆ。こよひいとさむきに、はやゝよひもちかく、彼岸は

とくすぎたるに、雪のふれるもめづらしき年かな、^(な)どおもふにつけて、

この春はいづこに花をながめむと心のうらもかつまよひつゝ

こたび具したる、とものをのこは、酒も煙草もこのまざれば、おのづから暇をつひやさず、道ゆくこともすみやかにて、あつらへつけたるやうなれど、宿につきてははなしがたきにもならず、たゞ心のうちにてかゝることどもおもひつゞけて、ふしぬ。

廿八日。はやくも目は、たびなれけむ、暁とおぼしきほど、とくさめたるに、先とりあへず、天氣のほどいかならん、と戸をやるに、あか星の光くもらはしげなきは、天氣よきしるし、といとうれし。朝飯のまうけいそがしつゝ、あけはなるゝほど、宿りをいづるに、霜いとふかし。

春ながらあさしもさむみふみちはしら井の里のしろたへにして

宿を出はなるれば、しゝばが原といふ曠野なり。こゝも一昨日の雪にて、きのふのみちのごとく泥なめらかなるを、けさの寒に氷つきて、きのふよりは、こよなくやすし。この原にも馬おほきよしなれど、霜さむき朝、雨ふる時などは、林の陰にひそむよしにて、ひとつも見えず。

空にさへ野馬は見えぬさむさかなふるしもしろき春のあさあけ

茶屋あるあたりより左のちまたにわかれ、野すぢのみちつきたるところを、うらべといふ。そのうらべ村をすぎ、坂をすこしのぼれば手賀沼といふいと大きな沼、左のかたにみえて湖のごとく、そのむかひに筑波根のみゆるに、かたへは雪もかゝりて、いはんかたなきながめ也。

かめなり村といふにいたれば、右のかたの小山は貝がらばかりにて、つきあげたらんがごとし。さと人は「このあたり昔、海なりしなごり也」といふ。桑田、海となりしたためしは、かゝるをやいふな

らん。

そのかみの海のなごりを万代になほとどめたるかめなりの山

白井より三里にて木下宿キオロスにいたる。こゝは竹袋タケフクロといふがまことの名也とぞ。この宿は川のほとりに

て、船をいだすところなれば、ものなどくふに、いときたなく、むつかしきは船つきのつねなり。

かくて船をかりて、それにのりぬ。けさのしもは、ひるあたゝかならむ、とおもひしもしるく、日

ごろのさむさにかはりて春日のこゝちしつゝ、「天青雲白十分晴。帆飽舟軽尽日行」など、うちずん
じらる。

梶とりは、はつか独にて、櫓をおしつゝやゝこぎいづれば、たちまち川中ひろくなりぬ。文間フシマ杜と

いふは左のかたに見ゆ。

さて、この船中よりみゆる山は、つくばと富士とにて、外の山は見えず。

富士筑波ひとつに見つゝかざとりをたかき山ともたのむ船かな

かく天気はよけれど、船人はいさゝか風あるをつぶやくめり。とうぞう川岸カシといふは、左のかたに

ありて、よきさとなるが、そこには常陸の地もまじれりとぞ。又左のかたに十里ジウリ・たかはなどいふを

見て、かないづといふにいたれば、右のかたは源田川岸ゲンダカシといひて、家、はつかにならびたり。こゝ

まで船路五里なり。

こゝにあがりて、武蔵屋といふに入て、ものくはんとするに、とみにとゝのはねば、そをまつほ

ど懐中曆とうでゝ見れば、けふは子の日ならねば、爪をきる。かくて、「さい」といふ魚のあつもの、

てうじいだせるをくふ。

ひらかは・十三間戸デウサンマドなどいふを左に見て、かう崎ザキといふにいたれば、岸ちかく、いと木ぶかき森あ

陸故翁詩(敬)

『土佐日記』「ツメイトナ
ガクナリニタルヨミテ、
日ヲカゾフレバ、ケフハ
子ノ日ナリケレバキラ
ズ」。

(付箋)

「コノ社、式社ナルコト
或人イヘリ。考ベシ。

○ナンモンジヤノ木ノコ
トモ、ミエタル書アリシ
ヤウニオボユ。吟味スベ
シ。」

りて、神崎明神カウザキの御社也といふ。この森のうちに、「なんじやもんじや」と俗にいひて、その名さだかならぬ木あり、とて船人をしふ。

けふはひるすぐるほどより北風つよくなりしかば、ふきもどされがちにて、船の行ことはなはだおそく、船人はますくつぶやきぬ。「とくとおもふ船なやますも水にはあらで風の心のあさき也けり」とわれもつぶやきつ。こゝにて日もくれかゝりぬ。

しら鷺のやどる木末はくれかねて下のみくらき神崎の森

日入たる。げにや北風、又ひとしほはげしくなれるに、船人は「夜をかけても」といへど、さむさそゞろ身にしみてたへがたく、よるのものゝ用意もなければ、左の岸なる押砂オシズナといふにのぼりて、左原屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。船はかりきりといふにせしかば、その家のまへにもやはせつ。きのふもけふもあらましたがひて、いと心ゆかねど、こよひは旅泊のこゝちして、かゝる水うまやにやどること、はためづらしきこゝちす。かの源田川岸より水路二里ありとぞ。

おし砂のおしてはゆかぬ船とめてこゝにひとよのたびねをぞする

廿九日。日よし。あけはなれてこぎいださするに、けさはいとのどかにて、両岸のけしきそこはかとなくかすみあひたるに、雲雀の声々、そこかしこに聞ゆ。故郷にありしほどは、いまだこの声をきかぬほどなりしに、江戸にては、たゞ市中にのみありて、はた聞べくもあらず、ことしはじめてなれば、いとめづらし。

朝日かげのぼりそめたる空に又まけじとおのれあがる雲雀か

右のかたに今村といふがあるは、藤堂和泉守殿の領地なるよし。故郷ちかきあたりなる国守の領地

ときけば、なつかしくなきにしもあらざるも客情なり。

左によつや村といふ村あり。こゝに綱引する里人七八人もみゆ。何のせんなきことながら、うちつ
けに、得ものあれかし、みまほしや、とおもふほど、鯉ふたつをひきあげたるはめざまし。

このあたりすぐるほど、おなじさまにさしくる船ありて、その船人は本意なげなるおもゝちして、「わ
れは鹿島ちかき、なにがしの里にすめるものなるが、としぐ春になりて雪ふれば、その雪の気にあ
たりて死せる鯨のながれることあり。ことしもその雪にてえものありしを、かく籠にいれて神崎に
もてゆきて価得てん、ときたるに、かの村は田つくることおほき村にて、はやく種まくころにちかづ
けば、鯨くひたる人のくそまりは田のため肥にあし、とてかふ人なければ、かくむなくこぎかへり
つゝ、又さるかたにもてゆきてうらんとす也」とはすがたりす。こはいまだきかざる説なれば、田
つくる人は心すべきことなり。

神崎の社は、きのふもとほくより、いちじるくめにたちしが、けふの船路よりも、うしろにとほく
かへり見らる。きのふは、のぼり船の追風うら山しかりしも、けふはわがゝたの追風なれば、さのみ
つよからねど、船の行ことすみやかにして、ふとゐねむりせしまに佐原サハラといふにいたる。こゝにて、
おし砂より三里半なり。

ふく風もけふはさはらで夢のまにこゝまではやく船は来にけり

このあたりにて「すぎし日の風雪に、息洲イダスのほとりにて、そこなはれたる船なり」とて引もてきた
るをみるに、船中に水いりてむぎんにみゆ。あら海ならぬも、かゝるあやまちあれば心すべし。

佐原より一里にて津宮ツミヤといふにいたる。いと大きな鳥居の水中にたてるは、香取の大神の鳥居に
て、かたちは野宮の鳥居のごとく、丸きそのまゝの木をもちひて、黒木ならぬばかり也。

岸にあがりて佐原屋といふにてものかひ、その家のまへより、ひろきみちをたゞちにすこしゆけば、横にゆくみちありて、いとひろければ、これこそ御宮にゆく道ならめ、とおもふものから、しらぬみちは里人にきかではあらじ、とへば、「そのひろきかたは銚子街道にて、たゞにゆくほそみちのかたにゆけ」とをしへたり。何ごとも人にきくが益あるものぞかし。

そのみちをすこしゆけば田の中の道にいづ。田うちかへし水いるゝさと人、いそがはしげにて、このあたりは、ほかよりあたゝかなるにや、菜花さかりなり。「けふのあたゝかさは、やよひの半ともいふべきほどなれど、種まくには今すこしほどもあるべきに」と人とへば、「早稲つくるをむねとして、水のたよりあしきところゆゑに、はやくせきいれおく也」といふ。そのさと人ども男女のけぢめなく、女も男のごとくはぎあらはに足結しつゝ、あみ笠をきていさましきかたちしたるは、かたはらいたし。

かくて社家ある町の中に入れてしばしゆけば、右に神宮寺ありて、塔などものふりて見ゆ。そのまへより左にをれて鳥居のほとりにいたり、すこし石階をのぼり、楼門にいたる。この楼門にたゞちに入るみちもありて、石階右にみゆ。そのほとりに御柱てふ木たてり。

さて御前にまうづるに、御宮づくりいとかうぐしく、たふとさいはんもさらなり。この神の御ことは『式』はまうすもさらなり、国史どもにもみえてゆゑよしことなる神にましますば、はやくまうでまほしくおもひしを、ことし本意とげて、いとうれし。

神さびていく万代を経つ主の宮居はいともたふとかりけり

御前に槇杉などの大樹のめざましきも見ゆ。ほどよき糸桜ありて、やう／＼ほころびそめたるほど也。

衣におるものならませば糸ざくらこれこそ花の香とりなるらめ

故郷のさくらは今はや咲そめぬらんかなど、おもひやらるゝも、旅のならひ也。

さて、もとのみちを船場までかへる。この間十八丁といへど、ゆきゝ一里には、すこしとほし。又船にのりて川をよこぎり、せきわくとて水門めきたるものゝ中に入、ほそき川をすぐ。両岸は洲にて田をつくれり。こゝよりうしろをかへりみれば、香取の神山は、よそめしぐろきまで杉の木立しげりあひたる、たとしへなくたふとく見ゆ。

又ひろき川にいで、それより又もほそき川にいれば、両岸は加藤洲カトウズといふむらにて、こゝに板はし十二かゝれり。つぎくゝにすぎゆくに、いづれもかりそめなる棚橋也。このあたりに「十六島」とて、島めきたるところ十六あるよし。「十二のはし・十六島」とて、よに名だかきほどにはあらぬあたり也。

十あまりふたつかけたる棚橋はきゝわたりしにたがふさまかな

この加藤洲村の家々の庭に、一むれのごとく土を小だかくして、そのうへに、わらにて祠をつくり、幣たてたるは、鹿島の神をいはひまつれるなるよし、古風にみゆ。

又ひろき川をすぎて潮来イタクにいたる。津宮より一里にて、こゝは、はやく常陸の国也。うしろは一堆の松山にて、家居もつきくゝしくみゆ。昔は板久とかきしを、西山公の御時、このあたりにて潮を「いた」とよぶことのあるによりて、かくはかきあらためさせ給へるよし。今も御領主より御ゆるしの遊女あり。

入江のほとりなる和泉屋なにがしといふものゝ家にやどりぬ。楼にのぼれば、まへなる入江のけしき、たゞならぬさまなり。いまだ晡時すぎざれば、長勝寺といふをたづぬ。こは四五丁ばかりもあるところなるが、山門・いらかもものふりて、本堂もおなじさまにものふりたり。この寺は頼朝の建立なりとて、本堂の棟には篠竜胆の紋をつけたり。その時のまゝに祝融の災もなきにや、殊勝なる禅刹に

源家ノ紋ハ竜胆ニハアラザルヨシイヘル説モアレド、シバラク俗称ニシタガヘリ。

て、都にもたぐひすくなかるべく見ゆ。本堂のまへなる梅は頼朝のうゑられたるなるよしにて、木立いとふるくみゆるが、をりから花ざかりなるは、「人はいさ」とうちずんじられて、あはれなり。

うゑおきしひとの心をおのれのみしりてむかしの香にほふらむ

『常山文集』ノコト上二
イヘリ。

卷四。

卷七。

卷十四。

鐘楼にのぼりてみれば、鐘は「元徳庚午」の文字ありて、清拙和尚の銘なれば、筆跡も殊勝に古色なつかしく見ゆ。「ちかきほど、こゝに御領主のあそび給ふまうけなり」とて、その仮御殿をつくるまうけ、いとなげ也。『常山文集』に「潮来村野亭即興」の御詩もこの寺のこと見え、又大岳和尚といふを、この寺の傍にとぶらひ給へる御詩、又元禄十一年三月朔日、この寺の後山にのぼり給へる御詩など見えたれば、領守のこゝにあそび給ふも、ふるきためしなるべし。かばかりゆゑよしもある寺なれば、このところには似つかはしからぬばかりの雅地なるを、遊里の名のみよにたかく、その名におほはれて、この寺のことはしる人まれなるも、遺憾なること也。

そのかへさに遊女町を見るに、木戸いかめしく、さすがに古風に見ゆ。かく船よするあたりなるも、むかしの遊女のさまには、よくかなへり。

宿にかへり、夕げくひ、欄干によりかゝりてとほく見はらせば、日ははやくいりて、そのなごり、よもの木末ものふかく霞わたれるひまより、つくばねのほのかにみえたる、江戸よりみるさまにかはりて、山のすがたをかしくみゆ。ほどとほく川のごとくみゆるは、名にたつ霞が浦也とぞ。

くれふかくこむる霞の浦とほくめにつくばねのふたならびかな

このさとのをどりは、よに名だかければ、そをみぬもくちをしくて、ことさらびたれど、河内屋といふ楼にのぼるに、おくまりたる楼は、川にたてかけたるひろき楼にて、木材もいやくはあらず、おもひの外につくりなしたり。たちまち遊女七八人も出来たるが、その名は源氏名といひて、竜田・

百代・八重桜などいふ、うちぎはみやびたる名をつけたれど、その名には似げなく、そのさまはしたなく、けうとくなめげにて、衣はあかつき、帯はそこなはれたれば、名のみきゝたるかたこそ、はるかにまさるべけれ。

ほどなく障子のあなたにて、雷のおちたるごとく大鼓うつさま、わきかへるやうにて、きもゝつぶるゝばかりなり。それにつれて歌妓二人、絃歌の声あやしくしらべいづるにつれて、八人の遊女、はぎあらはにつまをりかけて、男のごとおもひくゝにいでたち、手拭もて面をつゝみたる中には、はらめる女のごとく腹ふくらかにして、すりこ木腰にたばさみたるもあるは、ことにかたはらいたし。をどるにつれて何かうたふこともあれど、もろごゑいとさわがしく、いかにともきゝとりがたし。この曲をはれば、いづれもにぐるがごとくしりぞきて、又一曲あるもおなじさまにて、かはれるけぢめわかりがたく、別にことなることなし。もとよりこのをどりは価もいとやすからねど、みるにたらざるさまにて、情てふことは、かりそめにもあらぬものなり。むかしは「真菰の中にあやめさくとは」、又「十二の橋」などいふ、みやびたる文句もありしを、「そは時にあはず」とて、今は唱歌もかはれるよし。古風をうしなへるは、あたらことにて、世に名高きには似ず、みるもなかゝ心ぐるしきものなれど、人にかたらんくさはひには、ひとつのみものなるべし。

わが友なりし岡山正興は、風流なる人にて、よにすぐれたるすきものなりしも、日光より三社めぐりせし時、このところのをどりを見て、情なきにこうじたるよし、むかしかたりしこともありしを、そのをりは耳にもとめざりしが、今こそ、げにおもひあはさるれ。なにごとも、きゝし時はうはの空にて、としへて後、げにと心づくならひおほきものぞかし。かゝる楼には、いとたへがたければ、宿にかへらむとすれど、しひて客人をとゞむるが、このさとのならひなるよし、わりなくとゞめられ

て、その楼にふしたれど、ひとりねのかたまさりて、中々なり。

船とむるいたこのさとのいたづらにうきたる夢をむすびけるかな

三十日。日よし。朝とくこぎいださするに、よべのうつりがのなごり、わすれがたくは露ばかりもおもはざれど、さすがにものあはれなるかたもあり。さるは、このあたり再遊すまじきにあらねど、「五年をへて」とも「六年をへて」とも、しかとはさだめがたければ、かれ脱籍の期、今にもきたりなば、いづこによするをもとむらん、と再会はかりがたきをおもひつゞけてなり。

朝びらきおもひかへせば袖ぬれてむすびし夢も跡のしら波

やゝこぎいづれば、川中ことの外ひろくなりて、あたかも海のごとくなるは、げに「土根の一名、坂東太郎とよびて、坂東第一の大川なり」といふも、ことわり也。

かへりみれば、筑波根のあるかなきかに霞わたれるさま、いひしらず。この山は、この船路の風景をとりぐによくそへたり。かむらといふあたりには、六人塚とて、塚じるしの松の大木かれたるがみゆ。こは左のかた也。

けふは又風あしくて、帆を斜にかけて、しばしははしりたるも、船人がおもふやうならねば、おろしぬ。かくては、ちかくてとほきものは船のみち、ともいふべくおもはれて、心はいともだゆれど、ことわざにいふ「のりかゝつたる船」にて、かちよりもさすがにゆきがたく、つまはじきしてをり。

船靈にぬさたてまつりいのれどもおもふかたより風はふきこず

右に小見川といふをみて、息栖にいたる。水中に鳥居ありて、その鳥居のもとを心とどめてみれば、まるきかたちして井のごときもの、水底にみゆ。今ひとつ鳥居あるもとは、角にておなじさまなる

ものみゆ。これを「めがめ・をがめ」といひ、又「神水」ともいひて、むかしは水のうへに一きはたかく水わきいでしかども、今はうもれて、かくなれる也といふ。光俊が歌に、「神さぶるかしまを見れば玉だれのこがめばかりぞまたのこりける」とありて、こは鹿島にまうでし時、神代よりとゞまれるつぼの、その時までのこれるをみてよめるおもむきなり。そのつぼと、これとはもとよりべちなるべけれど、これらもそのたぐひにやあらん。

さて、鳥居は大きな鳥居ひとつありしが、風雨にたふれて、今のは、かりの鳥居なるよし。ほどなく修造あるべきよしにて、大きな木、岸に横たはれり。

岸より一丁ばかりゆきて御社にまうづるに、木立ものふかく、たふとく見ゆる社地也。

玉垣は鹿島香取にへだてなくいきすの神をあふぐもろ人

こは三社めぐりとて、この御社と鹿島・香取にまうづることのあるをおもひて也。いたこより、こゝまで三里なりとぞ。

きしのほとりなる柏屋といふに入ものなどくひ、又こぎいださするに、とにかく風おもふやうならねば、船人なやめり。さゝ川といふを右に見やゝゆけば、左におもしろき松山・砂山などあり。鹿島にゆくには、かのいきすよりたゞにゆく船路あれど、こなたにしも来たるは、銚子湊のかたにゆかんとて也。さるは、この銚子あたりの光景もみまほしく、はたそこには、なりはひのことにつきてしたしき家もあれば、それをもとぶらひがてら也。

世の風流このむ人は、おほかた家業を俗事とわたくしに名づけて、いやしくおとしめつゝ、はては家をそこなふにいたりがちなれど、予がこゝろはそれとことにして、清福を得たる人は富をかき、富をえたる人は清福をかくがよのつねなるに、ふたつともにうけえたるは、そらをそろしきまでありが

たくおもひて、めづらしき書どもの価たふときを、心のまゝにたくはふること、貧書生のくはだておよぶべからぬも、またくなりにはひに富たるからのことなれば、常になりはひの恩をわするゝことなし。かく陸奥かけて心のまゝに旅立しつゝ、露宿風餐のわづらひなきも、はたなりはひのかけにして、たゞ風流にのみふける人の、囊錢こひつゝ漫遊するには、はるかにまさりて、なか／＼風流人にまさりたる生涯なれば、そのなりはひにつきたる人とはまほし、とてかくみちをまはりつゝ、銚子にはおもひたてる也。

左に太田村といふありて、松原の中に桃花咲たるが見ゆ。

むら松の中にさきたる桃の花もよの春をなほちぎるらむ

このあたりは、むかし三十余ヶ村ありしところなるを、海溢のためながされて、松原・砂山などになれり、といひつたへたりとぞ。はや日もくれかゝれるに、蛙の声のきこゆるは、これもことしはじめてなれば、いとめづらしく、かつはかゝる松原の中に蛙のながあやしくて、船人にとへば、「松原のあなたには、田あまたあり」といへり。

なく蛙声なかりせば松原のあなたの小田はいかでしられむ

さらでだにふるさとおもふ夕ぐれのあはれすゝむる蛙何なり

左に矢田部、右に小舟木などいふをみる。日はくればはてたれば、それよりは、ものゝあやめもみえず、いとわびしけれど、はやく引しほにて、川の流おだやかにして、船のゆくことすみやかなれば、亥の刻にちかく、松岸といふに船はてぬ。こゝは銚子の入口なるが、岸なる家に入て宿をからんとするに、いとなめげなり。されど今は、よもふけそめたり。かねてする人なる盛岡屋何が家には、こゝより一里あまりもありといへば、はじめてとぶらふに、よふけてとはんも心にあらねば、いかゞはせん、

とたゆたふものから、わが松坂などのごとく、軽薄なる里の風にあらず、とかねて聞しかば、そをたのみにて、かごをかりて、それにのりて、その家にいたらんとす。こは、こゝにやどらんことはいとはしく、船にて身はつかれたれば也。その間のみちは一里あまりなるも、よるのみちさだかにはみえず。

さてその家は、おなじ銚子のうち荒野村・万町コウヤ ヨロツといふあたりなれば、その門にいたり、ほとゝとたきつゝ音なへば、主たちまち出来つゝ、かねて面はしれる人なれど、あなたにはおもひまうけぬことなれば、「こはく」とて、よろこびくつがへるさま、いとうらなければ、心おちあて、うれしくなん。

先、地炉のほとりに案内し、自在の釜を火にちかくのぼして、にほひよき茶を煮つゝ、もてなせり。この家に陸奥人もやどり居たるが、こもかねてしる人にて、すぎし秋、江戸にありしほど、この家の主とその人と、三人ともなひて芝居見しことのありしをいひいでつゝ、「江戸にては、おなじく芝居を見、又かゝる炉辺にて、ゆくりなく面をあはずも、あやしき契也けり」などかたる。その陸奥人には、今ゆくさきの案内・宿りのことなどをきゝて、旅のうさは、とみにわすれぬ。

おくまりたる室に案内するに、雛うるはしくかざりつゝ、いづかたもおなじならひ、をりにあひたるもゝ・椿の花うるはしく、かめにさせり。旅にいでは、ひゝなかざるところとしもわすればにてたるを、家いでしより月日のうつりしこと、今さらにおどろかれて、家なるむすめどもゝ、かくかざらん、去年うまれたるむすめは、ことしはじめての節句なれば、こはいかにかざりけん、などおもひやられて、あやしく旅のおもひをそへたり。

故郷を猶都ともしのぶかなこゝにひとしきひなにはあれども

たびぞうきひなにはあれどわが家はさすがにものゝたりてすまへば
など、おもふついでに、

常にたゞせばきをかこつ故郷も旅にしくればこひしかりけり

わがすむさとは、おほかた人のよろこびほこるものなれど、われはつねに松坂のさとの、せばくか
たいなかにて、人はみな井蛙のみにて、たぐひすくなき繁華の地のやうにおもへるが心かなはぬを、
かくとほくはなれ来りては、故郷たふとくなりて、実情をあらはせるもはづかし。

かくて、よるのものゝまうけも日ごろにかはりて、いとあたらしく、「よなかごろ、めぎめたまふ時、
便なからん」とて、主がかたはらにいねたるも、いとあつき心なり。もとより主は、をりく江戸に
いづる人なれば、かゝる田舎に似げなく、かたくなにあらで、よく事を解したる人にて、「かゝる田
舎なれば、ことたらはぬがちなるは、みゆるしをかうぶりたし」としばくいふは、さすが也。「わ
れもとつ日までは息栖にありて、しばしなきほどなりしが、家にかへりて後なるこそ、こよなき幸
なれ」といふに、「そはいかなることにて、しばし、かのところには」とへば、「かのあたりにて、
船くつがへりたることにて」といふに、さてはきのふみし船は、そのふね也けり。しる人の物にある
船也ともしらぬほどしも、心くるしくおもひしを、かくきゝては、ひとしほ心くるしくて。

三月朔日。日よし。わがこゝにきたるを、はやくきゝしりて、なりはひのことにつきてゆかりある
家々より、かれい・あんこなど、かずおほくおくりこしつ。いづれもあざらけきかぎりなれば、うち
みにもこゝろよし。

けふは、「磯めぐり」といふを、主「案内せん」といふ。こは、かねて名だかくきゝてゆかしかりしかば、
こたび必、とおもひこしなれば、いとうれしくて、巳の時ばかりよりいづ。ともなへる人は、かの陸
奥人と、ほかに陸奥の船人二人、家主にゆかりある何がし、外にやどり合せたる江戸人など也。「四

海兄弟」といへるもことわりにて、かく国々の人をひとつにともなひつゝ、うらなくかたらひゆくも、

をかしきこと也。ともなふ人おほきは、わが常にこのまざるところなれど、旅にてはいとはしくおもはざるも、おのづから心よわくなれるにやあらん。

先、妙見堂といふにまうづ。「こは加藤清正ぬしにゆかりある本尊にして、ゆゑよしもたふとき御像なり」といふもしるく、堂のたてざまも、よのつねならず見ゆ。

新生といふあたりを左に見、飯岡観音堂にまうづるに、庭なる銀杏の木、いと年ふりたるのみかは、塔などもありて、本堂のいらかも甚ふるく、庇のうらに竜の頭のさしいでたるほりものゝさま、よにめづらしく、所にあはせては、心にくき寺ともいふべし。坂東三十三所順礼とて、西国三十三所に擬したるそのひとつにて、よに名だかきみほとけ也。

(付箋)
「総持居士ノコト、『甘雨亭叢書』中『澹泊史論』上ノ四十ウ、ニミユ。」

寺内に早器居士といふ人の墓ありて、ふるくみゆるは、神祖の御時の人にて、乞食のまねしつゝ、たゞ読書のみせし畸人なりとぞ。

飯貝根といふに入、すこしゆけば、大きな井桁つくりめぐらしたる清水あり。このあたりの井は、おほかた塩気あれど、この水のみ塩気なし、といへり。

そこよりすこしたかきところののぼれば、かりそめの茶屋ありて、そこより大洋ひとめに見ゆ。かの陸奥の船人が、こゝよりは金華山、亥の方にあたり、松島は子丑にあたれるよしいふ。方角はあやしきものにて、旅にてはとにかくたがへがちなるものなるが、こはことさらにあやしくおほゆ。

こゝより下にみゆる人家のかぎり、いづれも牡蠣がらにて屋のうへをふきたれば、あたかも雪のつもれるがごとく、とほくつゞきたるは、いとめづらし。むかひにみゆる松山は、波崎といふ所にて、玉崎大明神とまうす神もおはすとぞ。

手むけにとしらゆふかけてたえまなく、だくる波の玉崎の神

「このあたりはすべて、川のむかひは常陸の国にて、波崎はすなはち常陸の国なり」とぞ。

その波崎あたりは、としぐ鷹をとりて、公方様にたてまつる所なるよし。「そをとるには、陸奥より鷹のわたる時を考て、小鳥の足にほそき綱ツナをつけ、それをながくひきて、小鳥のおのづから空とぶさまにしつゝ、人はひそみ居れば、鷹は数百里の波濤をわたりきて、翅つかれ、腹うゑたれば、その鳥をひたつかみにつかむところを、やう／＼に綱をひけば、つなありともしらず、まちかくよりくるを、かねて用意したる綱うちかけて、やすくとり得る也」と、かの家主かたる。そのほど／＼に意表にいづる人才のかしこさ、感ずべし。

またこのあたりに八景あるよし、しか／＼とあるじいへど、この八景といふものは、近江なるをうらやみて、おしてさだめたるがよにおほく、こゝなるもその類なれば、耳にもとまらず。

それより和田不動といふにまうづるに、入口に竜の口より、ほそき滝おつるやうにつくりなしたるあり。本堂のほとりより、すこし山越の道をゆきて、川口明神といふにまうづ。こは白紙大明神ハクシともまうす神也とぞ。それより川口といふにいたり、千人塚といふ小だかきつかにのぼる。こは、あまたの人のむかし溺死せしを、はふりし塚也とぞ。「頂に火たけるあとのみゆるは、この浦の漁舟のとほくこぎいでゝ、日くれてのちかへる時のしるべにたける也」といふ。

こゝは川口のさまあらはにて、大洋もたゞめのまへ也。この川口には、中山道なる軽井沢よりこなたの川々は、すべておちあふよし。げにさるべきさまにて、「海にいるあたりいとひろく、銚子の口のごとくなれば、銚子とはいふなり」とかねてきけるも、そらごとならぬをしりぬ。

海岸にいと大きな巖どもそばだてるを、「第一の島・二の島・三の島」となへて、「こは大船ど

コノウタヨミテ後ニオモ
ヘバ、加藤千蔭ガ飯岡ニ
テ浪ノオモシロキヲヨメ
ル長歌、『海上日記』ニ
アリ。サテハ、ワガ歌ニ
ノ箭ナリ。ミヅカラハー
ノ箭トオモヒテ二ノ箭ニ
ナレルタメシハオホシ。
浅学ノワレラハコ、ロス
ベキコトナリ。

もの、いたくかしこむあたりにて、この岩にふるゝ時は、たちまち船はそこなひやぶるれば、この銚子口にいることはたやすきことにあらず」とぞ。こゝより外国には、おもひのほかみち法ちかきにやあらん。この澳より漂流せし人は、おほかた十日ばかりの日数をへて、外国にいたれるがおほきよし。その国どもは、福州ばら天竺などにいたるといふ。されば、をりく異国船も沖に見ゆるよし。もしきたなき心ある船のよせこん時のそなへに、大筒を領主よりつねにまうけおかるとぞ。しかるを、かく海岸のあしきは、これわが国の神ながらなる、くすしくあやしきことわりにて、外国のきたなき奴らがおそふこと、企およびがたきゆゑよしなり。

さて、このところのさま、その要害のかたきのみかは、みわたしひろく、その岩の外にも、あまたの岩どもおほく、けをそろしきまで波のうちよるさま、とりくみどころあるを、そも昔よりさばかりいひはやせし人のなきは、かく輻輳の地にして、風流人のすくなきけにやあらん。

なげくなよわれみはやさん言の葉にかけし人なき浪の岩がね

「けふは、めづらしきなき日より也」といふも、かくけをそろしきばかりなれば、風ある時はいかゞあらむ。

かくて、磯辺づたひのみちをゆくに、石門めきたる岩あるあたりもあり。あるは、わかめかりほせるあたりもありて、けしきのうつりゆくさま、みちにあかず。

ゆきあふうら人のきたる衣の裾に、もやうありて、背にいと大きな紋所つけたるは、男に似げなきを、「いかに」とへば、「こは漁おほくありし時、そのいはひにとて、網の主より一様に着するなり」といへり。

この磯辺には、蒲公英・初紫など、おほく花さけり。この初紫は、わが伊勢の国ちかき志摩国の海

辺の外にはなきものよし、本草家といふがいへりしことありしが、すべてよに本草家といふものは、ゆかずして名所おしきはむるたぐひにて、おほかたは書のうへにてあなぐりもとめつゝ、おしきはむる説どもなれば、かゝる僻説もいでくるなめり、と今さらをかしくおぼゆ。

いが栗のごとき貝からおほきは、「雲丹なり」といひ、又「亀甲石」とて、青きにしろく亀の甲のごとき筋ある石も、このいそべにあり」といふ。防風はひまなきまで生たれど、おほきにすぎて、このあたりの人はすさめずといふ。

あしか島といふあたりは、小だかき岡のごときところなたにありて、それにのぼれば、千里鏡をかけたなり。その岡の六丁おきに、大岩三つならびたるが、すなはちあしか島にて、とほめがねにてみれば、あしかおほくむれつゝ、さしもひろらかなる岩も、ところせきまでおしあひつゝ、ねむりたり中にはねむらずして、首もたげつゝなくもあり。そのなきごゑは、たとへんものなけれど、しひていはゞ、鷗の声の大きなるがごとし。「かたちは犬のごとく、颯のごとくにて、馬に似たり」とかねてきけるは、たがへり。あか色なると、薄鼠色なりと、白きとみゆ。そのさま、むくつけなるものにて、おごめくさまも、みぐるし。とほめがねならでは、およびがたければ、さだかにはわかりがたけれど、おほかたは、かくいへるがごとし。外にも岩あれど、それにはかりにもものぼらず。一年のうち秋のうち、しばしはすまざるよし。東海にては、陸奥と伊豆とこゝとの三所におほきよしいふ。こはいとめづらしき見もの也。歌に、「とゞのながれね」といへるは、この獣のことなるに、「ながれね」ならぬはあやし。

音にきくとゞのながれねそれならで岩がね枕かたき夢見る

その「ぐい〜」となく声、風の吹さまにて、かの荒野村までも聞ゆるよしいふは、さもあらん。

おもひの外、大きな声なるもの也。このあたりにて、主わりごをいだしたるが、山海のものいとさま／＼に調味したる、かゝるあたりまで口腹の驕奢、甚しき世のさまなり。

駕籠などはなかりし所なるを、去年よりして出来たりといへり。きみが浜といふあたりをすぎ、犬吠ボウのはなといふにいたる。こゝには大きな岩の中をくゞるところありて、海岸にも岩おほく奇境なり。

いろ／＼のうらのみるめをかるもよしながき春日にいそづたひして

長崎といふあたりをすぎ、外川村トカハといふにいたれば、「むかし漁師の家あまたありしが、たえたるあと也」とて、石がきそのまゝにのこれもあり。しかるを、ちかきとし、このあたりに又、漁師の家あらたにいで来て、漁家のかずあまた也。栄枯さだめなく、うつりゆく世のならひ、このいそべのしほのみちひにも似たりけり、とあはれなり。

こゝに犬若イヌワカといふ大岩もみえて、その岩のうへに漁人の家つくりかけたるが、あやふげなり。そのほとりの大岩を仙岩センガイハといふよし。むかひにとほく、飯岡イヒツカのはなといふがさしいで、いとながし。こゝより富士もみゆといへど、けふはかすみふかくてみえず。

ふじのねの見えぬうらみも飯岡のいひいでがたくかすむけしきや

この漁家のうち、主のしる人ありて、その家にいこふに、いとかりそめなる家なるが、あたらしく茶を煮つゝ、「こは菓子ともおもほせ。手づくりのひしほなり」とて、いだせる味噌の味、いとよしかたへに雛をかざれるは、かゝるすさみすべくもあらぬ家なるに、とおもへば、なか／＼目につきたるに、海苔とるべき籠に蓬つみいれたるも、あはれふかし。

かごにいれしのみなうで、三日の日のもちひのためとよもぎつみたり

こゝよりすこし坂をのぼりて山に入、高神村タカミといふにいたり、建徳寺といふにもうづ。所にあはせ

ては、たてざまをかしく、鐘樓のさまなどは、ことによしあるを、ちかきころたてたりとおぼしき三十三所の観音の石仏ひまなくみゆるに、趣をうしなへり。

このむらにふるき百姓の家ありて、この国の多古村タコ東庄ヒガシノの氏神の御輿共、一年めにはかの仙岩セソガイハのうへに御わたりありて、そのかへさにその百姓の家に入給ふが例にて、その家の女のうち、としたけたるが、「明神さまおたちやれ」といふまでは、御輿かきあぐることなりがたきよし。「こは、かの岩のほとりにて、その家の遠祖の、その明神のみたまを、とりあげたてまつりしゆゑよしありてのこと也」といふは、めづらしきこと也。

おなじ村のうち、広福寺といふにもまうで、畑の中の道をすぎ、かの新生村にいで、橋ひとつわれば荒野村にて、日くるゝほど、かの家にはかへりぬ。

けふのみち三里あまりといへど、四里あまりもあるべくおもはるゝに、たかすながちにて、なかには岩かどふむあたりもありしかば、足おもひの外つかれたるに、広福寺よりかなたは、何のみるめなきみちなりしかば、心さへうみつかれたるにや、甚くたびれぬ。

こよひ雨ふる。家にあるほどは心にかゝらぬ雨も、いと心づかひにて、さばかり音しつるなる春雨も、耳とゞめつゝさはりがちにて。

二日。猶雨ふる。雨をかごとに、あるじは「今ひと日」ととゞむるを、しひて船のことたのみつ。かばかりの雨は、いとふにたらざれば、一日もはやくすみやかにたゝするが本意なるを、旅する人とゞむるが礼儀のやうになれるも、あやしきならひにて、俗に義理てふことは、中々にことわりにたがへること、おほきぞかし。しれる人々をもまねきて、はなむけの盃、あるじがすゝむるに、きのふ

『夫木集』雜十五車、為
家卿歌。

『諸州廻記』。

には一きはまさりて、いと心づかひしたるあるじぶりなれど、時うつらむことをいとへば、客舎の鹿飯にも心をとらせられて、うまくはおぼえぬを、よの中の酒戸は、「のまづ」とおぼめくが常なるものなれば、われもそのたぐひかとうけがはれず、わりなく酒すゝめらるゝは、いとうるさし。わがごとく、口腹をむさぼらずして、大食美食を俗なりときらひ、すゝめねどもくふばかりはくらひ、すゝめられてもしひてくはざる姓(性)は、かゝる席にては指くはへがちにて、ものすさまじきを、「酒のみたまはぬがまことならば、飯きこしめせ」とて、ひたものくはさんとすゝむるに、こうじはてたるが、もしなりはひのためならぬ交なりせば、つとたちて席さけまほしきこゝちぞする。主が心きゝたるも猶かゝるまうけありて、実情をうしなへり。「かざりてわたる世となりにけん」とむかしの人もいへるごとく、たのもしからぬ世の交にて、真卒(卒)はすくなく、厚情に似て非なることおほし。所の風なりとて、飯をうづたかくもりたるもうるさきに、とにかく盃の先さしくるは、ことにうるさく、相伴人なかりせば、かくひまなくはあらじを、「よに酒席ばかり、をかしからぬものはあらじを」と口のうちにつぶやかれぬ。その人々は、おほかたは旅なれぬ人なるべし。旅の一日は十里のたがひとなることわりをわきまへず、ひたぶる「今日日を」ともろ声にすゝむるは、きくものうく、貝原翁が田舎人にとゞめられて、天王寺の伶人の佳期をうしなへるをなげきしも、さこそとおもひあはさる。

されども、しひてその人々に辞して、未の刻すぐるほど、船にのらんとす。けふは朝はやく、とかねてはおもひしも、かく時のうつれること、かへすぐも本意ならず。「船路なれど、馬の鼻向に」とて、このさとの名産なる縮と、べちに蒲団をあらたにとゝのへて、「このふとんは、相馬街道はよるものいときたなく、ことたらはぬがちなれば、その用意にしたまへ」と主のいふは、いとあつき心しらひなり。

あつすまあつき情に今よりの旅寝のうさはしらずやあらまし

とふとうかめど、なりはひの交なる人にだに、さくかきてあたへんも、はゞかりなきにあらねば、心のうちにおしこめおきつ。

「今は」とて、船にのれば、その岸まで、その人々はいふにおよばず、家内ことごとくおくり来たるは、実情あらはれて、船のうちよりもみかへりがちに、なごりおほかり。

「家の息子、水戸まで案内に」とて同じ船にのる。「船かろきに、帆を十分にかくるはあやふし」とて半かけたれど、をりからあげしほなるに、追風さへよければ、ゆくさにかはりて、船は矢のごとくにはしりて、いとこゝろよし。やゝゆけば、「雨すこしつよくなれり」とて、かたへ^⑤筈をふきたり。

いなさ風いなどはいへどふきそひてふりそふ雨になやむ川船

横雨にかたとまふきし川船はひたちばかりを見つゝゆく哉

とよめるは、さきにもいへるごとく、あなたの岸は常陸、こなたは下総にて、川をさかひとせれば也。一瞬の間に五里の michi をはしりて、笹川にいたるほど、日くれかゝり、雨又いみじくなれゝば、船人「いかにともしがたし」とて、その岸に船をつなぎぬ。げに船人の詞もいつはりならぬにや、はやくつどへる船おほし。

こよひは船のうちにて、浮寝のまうけもありしを、このさとは、ともなへる人のゆかりの家あるよしにて、そこにもなはれぬ。おもひのほかよき家つくりにて、人なつかしげに主まうけせらるゝは、いと幸にて、かの水鳥の陸にたゞよへるたぐひにはあらず。夕げすゝめて後、家主ねもごろにものたりしいでゝ、「このさとは須加山といふ里にして、笹川といふ名は、たゞ川岸の名なるを、今はさゝ川のかた、よく人もしれり。川中は、この川のうちに、こゝはことにひろくて、むかひの岸まで三十

丁余あり」などいふに、かの坂東太郎の名は、これにつけてもさこそ、とおもはる。

こゝは、秋になれば鮭をとるよしいふに、「そは、いかにしてとるぞ」ときけば、「むかしは網代木にてとりたるよしなれど、そは田に水ひくためあし、とて禁じられて、今はあみしてとる」とこたふ。あじろ木は田上・宇治にのみなり、と心せばくおもひしを、こゝにもその名のあること、げにも、ものはひろく見きくべきこと也。ふとおもへば、この川にあじろ木ありしこと、芭蕉が『鹿島記』とやらにいふ書に見えたるやうなりしか。

よるものゝまうけも、心しらひあさからねば、

うきねにはあらでひとよをさゝ川のさとにふしよく夢やむすばむ

川船はげにもうきたるものぞかしおもはずくがに宿をかりけり

こよひ地震ゆる。

三日。よべの地震は天気よくなるきざしなりけん、いとよき日になれるは、おもひまうけぬ幸也。けふは節句なるに、このあたりのならひ也とて、「しるこ餅」といふを、てうじていさせり。

朝とく川岸にいたり、船にのるに、よべはさだかならざりしが、川中にいさゝかの洲こそあれ、かの主が詞のごとく、川中いとひろし。されば、この岸に船をつくるは、船路とほくなるといふ。よべの雲なごりなく晴わたりて、あたりの山にのみ靄のゝこれるさま、今のよの画工の筆とりがたきあたりを、靄にてほどよくかざるたぐひにはあらず、古人の画の山水にいとよく似て、見どころあり。

草もゆるぐばかりの風はなければ、船人は櫓をおしゆくほど、いとあたゝか也。「かく暖にすぐるは、又雨ちかゝらん」など船人のいふに、晴雨のことには博士ともいふべき船人の詞なれば、心にかゝり

て、天気よきにも猶、雨のことをあんじわづらふも、旅のならひ也。

息栖のみまへをすぎ、根嶋ネバタケといふにいたるほど、むかひに鹿島の三笠山といふが見ゆ。こは春日なるをうらやみて、しひて名づけたるなるべく、さいふべき山にもあらねば、めにもとまらず。

こゝより見れば、息洲・鹿島・香取は鼎足のごとくに見ゆ。鶯のなきけるに、

心さへはれわたる日は鶯のなくねはたけもこゝちよげなる

徳島トクシマといふをこぎめぐるに、人家まばらにて、菜花など咲たる、よしありて見ゆ。

ほどなく大船津オホフナヅといふに船はてたり。笹川より四里なり。こゝにも水中に鳥居たてり。このさとは、あやしきならひありて、井は家々になく、みたらしの流の末あるは、前なる川水をくみてもちゆとぞ。鶏をかふことも、いむよしなり。

五丁ばかりゆきて根本寺コンボンジといふ寺、みちの左にあり。門には「東海禅窟」とありたる額かゝりて、手跡もたゞならずみゆ。この門をはじめ、本堂もわらぶぎにて、いとものさびて、所のさまものしづかに、ゆゑゆゑひよしある寺なり。この寺のことも、芭蕉が『かしまの記』にみえたるやうにおぼゆれば、わがこのむみちにはあらぬふみどもゝ、いとまあらばよむべきことにて、かねて名をきけるときかざるとは、その所にいたりて、こよなくをかしさのたがふものなり。このあたりの山に、なにがしの城跡といふもありとぞ。

すこし坂をのぼり、又すこしゆきて左のかたに神宮寺といふあれば、一丁ばかりもよりて堂を見るに、これもわらぶぎにて、ものさびたり。本尊をはじめ仏像もいとふるく見ゆ。こゝは「祭頭サイダウ」といふ神事の時、人のむるゝところなるよし。大きな銅のぬれ仏もあり。この寺、むかしはいと大寺なりしよしなれど、中ごろの神主に、仏をいみて、やんごとなきあたりよりをさめ給へる経巻などを

鹿島社ニテ唐本『一切経』
供養シ侍ケル時、日ゴロ
ハ雨ヤマズ侍ケルガ、ケ
フシモ空ハレテ、コトユ
エナク供養トゲタルコト
トテ、

導師

権僧正隆弁

今ヨリヤコ、ロノヤミモ
ハレヌラシ神代ノ月ノ影
ヲウツシテ
カヘシ

藤原時朝

チハヤフル神代ノ月ノア
ラハレテ心ノヤミハ今ゾ
ハレヌル

(付箋)

「コノ石ダンハ、九月九
日、スマヒノ時、カヅリ
ヲタク所ナルヨシ。亀ト
ハ社中石ノ間トイフニテ
アリトゾ。イキタル亀ノ
甲ヲハギトリテナスコト
トゾ。鹿島神主吉川林足
ノ説。大宮司ハ中臣鹿島
連トイフトゾ。」

も、やきすてたるがあるよきけば、この寺もそのころより、かくは衰微せしなるべし。唐本の一切経を藤原時朝が供養せしうた、『新和歌集』にみえて、こは「建長七年乙卯十一月九日」の奥書ありて、時朝の名をしるせし残欠まれにあるものにて、予も好古の癖よりして、そを一巻珍藏せるが、これもそのをりの焼のこりなるべし。

さて、もとのみちにかへり、すこしゆけば左に降魔山といふ寺ありて、本尊は不動尊なり。庭に糸桜の大樹ありて、ほどよくほころびそめたり。

みちながみいそぐゆくへも猶しばしひきとめらるゝ糸ざくらかな

そのみならず、みちのゆくての菜花のほひの鼻をうがてるも、このにほひばかりよに春めくものあらねば、いとこゝろよく、おのづからにのどやかなることちす。

大船津より十八丁にて、大鳥居にいたる。二王門は四体ありて、像もよのつねならず古色あり。この門よりすこしまへに、右のかたにいがきつくりめぐらしたる中に、石の壇のごときものあるは、御齋オモノミをえらむ時、亀トあるところなるよし。こはよにためしすくなきことなれば、古風のゝこれることたふとし。

御本殿は、いと神さび、たふとくたゝせ給ふ。あたりに、ことなる大樹の杉もありて、御山のさまもおくぶかく、よのつねならず。この御宮は香取とおなじく、『式』にも宮とありて、ゆゑよしことなることは、いまさらいはんもなか／＼をろかになりぬべければ、まうし奉らず。

人はみなあふぎみるべしこれぞ此かすがの宮のもつみやしろ

この御社にも、としごろいかで／＼とおもひしを、江戸にはをり／＼ものするによりて、なか／＼にいつにても、となほざりになりたるを、けふ三月の節句にしも、まうでたるは、ことにかしこし。

けふは社人たちのかり衣にて、ゆきかひしげきも、田舎めかず。

それよりたゞに馬場といふをすぎ、おくのいんといふ御社のみまへより、いさゝか坂をくだり、御たらしにいたる。こは、ことの外きよき水にて、夏なりせば、なほいかにあらん。子どもは、さむさしらずがほにとびいりつゝ、たはむれくるへり。いざとて、

むすぶ手に旅のけがれをそゞぎなば罪はのこらじみたらしの水

のみこゝろむるに、その味たへにして、茶をにるにいとよからん、とおもはるれば、なにがしのからびとにのませなば、千たびもゝたびうらやむべし。

又おくの院のほとりまでかへる。この御社は、はじめ御宮のありし地なるよしへど、いかゞあらん、俗人はおくのいんといふものは、かならずあるものとおもへるから、参詣の人よろこばせん、とてかくはいへるなるべければ、いともをかしからぬとなへにて、このおくに高間原といふところもあるよし。ともにをかしからぬとなへなり。『夫木集』藤原長能が歌の注に「鹿島の社に跡宮」と申社は、「大明神のはじめて天くだらせ給し所也」と見えたれば、このおくの院、もしはその跡宮なるを、かくいひつたへのあやまれるにはあらざるか。

この御社の左のかたはらをすぎ、すこしゆけば要石にいたる。いがきのうちに、いとちひさき石をおきたるにて、名だかきばかりにはあらず。こは「地震といふものは、地中の大魚にして、そのかしらをこの神のおさへて、うごかせたまはぬなり、といひつたへたり」と案内者のいふに、

要いし地震をしづめて吹風もさわがぬみよをあふがざらめや

こたびはみちをかへて、はじめかよはざりし山のかたに入に、このあたり木をきりしあとおほきは、ちかきころの荒年にきりたるなるよし、いとかしこきこと也。

御宮のうしろをかよふほど、木ぶかき杉の中に鷺の巢おほきよし。雛の声々、いとかしましく聞ゆ。おのづからなくねこぶかく神さびて神代の杉をしむるしらすぎ

大宮司殿の館のまへをすぎ、もとの神宮寺のまへなるみちにいで、それより五丁ばかりゆきて、御齋殿といふにいたる。いたいけしたる女の童のおほきは、その御齋のつかひたまふなるよし。この御齋と申は、としごとの正月七日に御もりかへとて、神供そなふるつかさにて、そのをり、のりたまふ白木の輿などもみゆ。こは世の人には、かりにもま見え給はず。その女童にも口かためて、殿の中のことは、いかなるおもむきともしる人なしといふ。「おものみ」とまうすとなへは、「御物忌」なるべし。齋の字をかくは、齋宮・齋院の例なりとかや。この殿づくりも、かうぐしくみゆるに、御守てふものゝ価ししたる定書といへるもの、はりたるは、うるさし。かの二王門に「大神楽」とかける額かゝり、その外にも「神楽」の文字をかける額のありしも、おなじくうるさくみえしが、こは伊勢にもあるためしにて、今のよのさま孔方氏の権つよきより、ものゝ本末みだるゝことなげかはし。さて、その神供とまうすは、かの日に飯と雉子二羽とさゝぐるなるが、つぎのとしのその日にもりかゆるまで、そのかたちそこなはれぬを、ふしぎなりといへり。

こゝよりたゞに大船津にいたらん、とて畑の中をすぎ、うしろをかへり見れば、御齋殿のあたりは一堆の岡山にて、木立よくしげれり。このみちの間、十八丁もあり。

船にのり、さきに船人にあつらへおきたる飯いで来たるほどなれば、そをくふほど、「風かなひぬ」とて船人はいそぎ船をいだすに、よべの雨こそあれ、きのふもけふもゆくさにかはりて風よく、さのみつよくはおぼえぬも、かけたる帆は十分にて、いとこゝろよし。

やゝゆけば延方村といふにて、名だかき地藏堂あり。かちよりくる人は、そのほとりより十八丁の

わたしをわたりて、鹿島にまうづるなり。

この延方をすぎ、大洲オホスといふを左に見、潮來のまへをすぎ、古刀根川といふあたりをすぎ、牛堀といふをすぐれば、いとひろき湖にいづ。これ潮來のやどりの楼より、とほくみえし、かすみが浦なり。このうらのひろきこと、いはんもさらにて、浮島といふ島ありて、それには人家おほし。又そのしまに城跡もありといふ。風あしき時は、このしまのうしろのかたをかよふよし。「けふは風よければ、島のまへをかよふなり」と船人いふ。こはまへのかた、みちゝかけれど、まへは湖ひろく、うしろは湖せばければ、あやふげなきによりて、風によりては、けふのみち、かよひがたしといふ。この湖のけしきよいとうちひらけて、つくば山はいふにおよばず、香取・神崎などもひとめにみえ、麻生アサフ・天王崎などいふも見ゆ。鹿島よりこの湖の口まで三里なり。

大山オホヤマのはなといふあたりも時のまにすぎ、船はひたはしりにはしりぬ。日くれかゝりたるほど、風なきて三日月の光ほのかにあらはれたるは、ものあはれなり。

三日月はかすみの浦の風なきて船はおそくも成にけるかな

くれすぐるほど、土浦に船はてぬ。牛堀より七里なり。こゝは、このあたりしる土屋何がし殿の館ありて、よき里なり。

川のほとりなる伊勢屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。例の船つきのならひ、宿りはさわがしく、きよからず。けふの船人どもは、よくうごきはたらきて、おのづからに船もはやりしこと、ゆくさの船人の、ものうげなりしには、こよなくまされり。すべて木下よりのる船は、船人の食事などもこなたよりあがなふさだめなれば、なか／＼日数のおほくなるをよろこび、風水をかごとになし、日数のぶるやうとなすよし也。さはいへ、霞の浦も風あしき時は浪かしこきよしにて、五日も六日も船

を半にとむることありといへば、諺に「いそがばまはれ」といふがごとく、道いそぐ人は、このふたつの船路は、よくべきことなり。されども、けふはをりよく、凡十一里あまりのみちなるに、ゆたかに鹿島にもまうで、かくこゝにやどりぬ。すぎし日は、船路のおそきをかこち、けふは、はやきをよろこぶ。船路ばかり、心にまかせぬものはあらじ、とおもふも畢竟は私にて、ひろく私なき天を、せばきひとつの船のことゆゑに、うらむるなり。

さて宿りの名を伊勢やといふが、なにかやなつかしくて、ゆゑよしをとへば、この家の老婆は松坂より来たるなるよし。その松坂の家の名をきけば、しらざる人にもあらねば、ものがたりもよくあひて、故郷のこゝちするは、うれしきものから、かゝるにつけても、故郷のことのましておもひいでらるゝに、やどりたる室に雛をかざれるをみれば、

かひなくもうらやまれけり旅にしてものこひしかる独寝の床

四日。日よし。宿を出はなれ、真鍋村といふにいたり、いさゝか坂をのぼり、並木の松の中より左にわかるゝみちあり。たゞにゆくは水戸街道、左のかたは筑波街道なれば、そのかたにいれば、右のかたに「正一位午頭天王」といふ額かゝれる御社ましますは、御位階めづらし。

すこしゆきて松原に入るに、おほかた赤松にて、木立をかしく、左右を見れば、畑の菜花の盛なるも、にほひよし。

そこはかと菜の花かをる春風に朝日露けきはたのわか麦

又「しどみ」といふ花のさけるもみゆなるが、わが国にては「ぼけ」といふ花なれど、実なりて味酸きものゝよしいへば、それとはことなるにや。

右のかたに清滝の観音といふにゆくみちもあり。家二軒ばかり道のかたはらにあるは、常名といふ村の出郷なるよし。この村の名は、『道徳経』よむ人は、いかゞきくらん、とをかしき文字なるを、いかなることにか、「したな」とよむといふ。

芝村といふをすぐれば、左に道陸神の社あり。大畑村といふを右に見、藤沢宿にいたれば、土浦より二里なり。宿中に梅桃などの咲たるを、

春の色はなほおくありて梅にほひ桃ほころぶる藤沢の里

左に高岡の報恩寺といふあり。とりでの台といふあたりは、すこし小だかく、みはらしよし。大島村・大形村などいふをすぐるに、このあたりに高崎大明神と申神おはして、小社にはあらずといふ。この大形村をはなれて、筑波山ちかくみえそめたるは、こゝまでは前なる山にさへられて見えざりしなり。とほくよりみしさまをおもへば、すこしひくゝなれるやうにおぼゆ。

藤沢より一里にて小田宿オダにいたる。小田天庵はこのあたりにすみし人なるよし。かたへの山には城跡もありとぞ。又宝珠山とて、宝珠のかたちに似たる山も、ちかく見ゆ。この宿中に、右のかたに寺ありて、その庭に糸ざくら・ひがん桜など咲たり。

糸ざくら盛にさけるこの里は小田うちかへすころやちかづく

三枚橋とて、大きな石もてかけたる橋をわたり、北条新田といふをすぎ、北条宿にいたる。小田より一里なり。こゝにてもものなどくひ、石のみちしるべあるところより右にいる。たゞにゆくは江戸みちなり。

神郡村といふにて杖をもとめ、山にのぼる心がまへす。この村をすぎ神領の境をしるしたる榜示あれど、神郡の名をおもへば、かのあたりまでも昔は神領なりけん。

うすゐといふより、やうく／＼のぼり坂にて道いとあし。一の鳥居といふまで北条より廿八丁なり。その鳥居には、「天地開闢筑波神社」といふ額かゝり、かたはらには銅の二王一体のみたてるは、よにめづらし。こゝに茶屋あるにいこふに、みはらしひろし。

これより筑波町の入口にて、よき家どもおほけれど、平地はすこしもなく、やゝのぼりて結束何ケツソクがしといふものゝ家を宿とさだめ、もし日くれなば、と挑灯の用意し、刀などをもその家におきて、たゞ杖のみをたづさへ御山にのぼらんとするを、こゝにては「御山オヤマをする」といへり。こゝより上は馬・駕籠・荷物などは、かけてもとほることかたし、といへば、まづさかしさいかならん、とおもひて、いでたつ。

すこしゆけば下馬の札ありて、知足院といふ寺あり。制札は天正の年号ありて、「軍勢甲乙人等」云々てふ古風なる文なり。それより大御堂といふにまうづるに、入口に橋殿めきたるところあるは、御祭礼の時、六所明神とまうすが御輿にのりてわたり給ふ御はしなるよし。つねは人のかよはぬやうにせり。二王門いかめしく、「中禅寺」といふ額かゝれり。本堂もいともさびびて、塔などもあり。

こゝより右は女体山、左は男体山みちなれば、先、男体山にまうでん、と左のかたより坂をのぼるに、かねておもひしよりも坂路ほそく、けはしくおぼゆ。

二の鳥居といふをすぎ、茶屋あるところにいたる。このまへに赤松と老桜と枝をまじへてたてるがあるは、さかりのころさぞとおもひやられたり。

又ものぼりて、又も茶屋あるところを、みちの半といふ。けふはいとあたゝかなるに、けはしき坂をのぼりしかば、夏のごとくに汗あへて、甚くるしかりしかば、洪茶もいとうまく、数杯をかたむけつゝ、この茶屋に杖をとゞむるに、谷間には鶯の声ひまなくきこゆ。

神にしもまうづるみちとしらざらんく／＼といとふうぐひす

(付箋)

「ビシヤコ」ノコトヲ「山バン」ナラントオモヘルハタガヘリ。「山バン」ハ別ニ一種アリ。」

この山道には、かたくりの花ひまなくさきたり。この花は、わが松坂のあたりにては、いとすくなければ、他よりもとめて、わが庭にもうつしうゑて花を愛せるが、その花も今は咲ぬらん、と何につけても故郷のことぞおもひいでらるゝ。この山の名産、つくばねの木といふもあれど、いまだ芽は春ならねば、こと木もおなじやうにて、たゞ山攀のほひのみ、鼻をうがてり。

やゝのぼりて、みな川といふところにいたる。石の不動尊ありて、雫のごとくおちくる水を、かけひにてとりたり。この末、みな川、桜川におつといへば、陽成天皇の御製は、いとよくかなへり。所を見たまはずして、よくも実景をよみかなへさせたまへるものかな。今の世の歌人は、実景にむかひてよめるが、実景にかなはぬがおほき。はや、こゝのさまは、かのから国の岷山よりいづる水をいへる濫觴の故事にもよくかなへり。

からくして五軒茶屋といふにいたれば、その名のごとく、かりそめなる茶屋五軒ありて、こゝより二丁にて男体山にいたる。この二丁の間、ことにみちあしく、鉄のくさりにすがりてよぢのぼるあたりもありて、のぼりつくしたる絶頂に、すなはち御社はたゞせたまひて、堅魚木づくりなり。かゝる高山のいたゞきにしも鎮座したまへること、あやしくもたふときかな。御まへよりは、みはらし、いとひろけれど、たゞ畳などしきたらんやうに見えて、ものゝあやめもわかれがたし。江戸のかたは、さすがになつかしくて、「いづこぞ」とへば、「けふはかすみて、めもおよばず」といへば、まして、ふるさとはいづこのかたとながめやらんだゞ霞のみめにたてるそら

国原はひろく霞のたち／＼てよもに薙をしくかとぞみる

御社のほとりには、たかき竹のさをに、はたをたて、それに神の御名をしるし、御社には「天地開闢筑波神社男体宮」とゑりたる額をかけたたり。かくたとしへなく、かしこき御山なるに、御社ちかく

末社なみたちて、まうづる人に銭をむさぼりとらむとする人どもの居たるは、またく伊勢のごとし。かゝる山の頂にも、かゝるあしき風のうつれるは、かの孔方氏のしわざなるべし。

かくて御社のうしろのかたにいたれば椎尾シビノヲといふにくだるみちあり。又「富士はいふにおよばず、湯殿山・日光山なども、空よくはれたる時、そこかしこに見ゆ」と指さしをしゆれど、けふは見えず。吾国山ワカクニ・加波山カバ・足尾山アシノヲなどは、ちかく見えたるを、杖とゞめてみるほど、たちまち風はげしくふきおこりつゝ、雲ちかくおほひきたりて、いとくらくなり、今も雨ふりぬべきけしきなるにおどろかれ、足をはやめつゝくれば、かの茶屋までいたらぬほど、空はたちまちはれわたりぬ。高山のさまは、あやしきものなり。この山は、日に七度、空かはるといふ。

かくて、もとの五軒茶屋にいたりていこふに、唐腐（マヤ）と餅をいだして、唐腐は角にて陰にかたどり、餅は丸にて陽にかたどり、男体・女体にかたどれるなり。「この湯は、みな川の水なれば、茶を煮て、その清き色をうしなはんことをおそれ、茶は煮ざるなり」など、茶屋のあるじ、鼻油ひからかして、ほこりかにかたる。こゝには、ふもとより日々にのぼりきて、よるはかへるなるよし。世路は、この山のさがしきにもまされるよ、といとおそろし。

それよりみちをかへ、山の尾つたひ、女体山のかたにいたらんとするみちを、御幸が原といひ、神のかよひ給ふみちなり、といふ。草木おひしげりて、風いとさむし。

神さぶる岩根こゞしくみちさびてみゆきが原に山風ぞふく

鶴鶴石・めだつ・をだつなどいふ石を見、御祈祷の御札守などいふものをかざりたる家のまへにいたる。こは男体山のかたにもありしが、あさくしくおもはれて、かゝる家はなくもがな、とぞおもはるゝ。

このをのへの道はさばかりくるしからぬみちにて、岩むらの中のあしき道をすこしのぼりたるところに、女体宮ましませり。宮のたてざま、額も旗もまつたく男体山のかたとおなじさまにて、がくと、はたの文字の一字かはれるのみ。末社もおなじやうにならびたり。この末社の中には、扉やぶれて、御霊実あらはにみゆるもあんなるが、いづれも古雅なる像なれば、あながちにちかきよにたてたるにもあらざるべし。この女体宮のうしろのかたも、甚みはらしひろく、ふもとのかた、ひとめにみえて、松杉のたとしへなくしげりたる、しぐろきまでにて、町はひわたるほどにみゆ。この山は、ふもとはすべて松、その上は杉・もみにて、半よりうへは、おほかた、ぶなといふ木のみ也。

くだり坂にかゝれば、こゝにも鉄のくさりありて、男体山のかたよりは道あし。雷の岩屋といふをすぎ、大黒石・安座アザ常社ジョウシャなどいふをすぎ、北斗岩ホクトイといふ岩の中をくだり、こはらき社ワラキ・渡社ワタリなどいふをすぎ、天岩戸といふにいたる。このうへなる大岩を高天原といふ。その名は例のいかゞなれど、伊勢なるにはかはりて、上代の墓にはあらず。おのづからの崖をくだるなれば、所のさまはをかし。こゝに稲村社イナムラといふもありて、天照大神なりといふ。

このみまへより梯をくだるに、このほとりに、かの御輿のわたり給ふ、といふところもあり。これらのみならず、みちすぢもいはむらおほく、かのくさり所々にかゝりて、岩むらのおほきこと男体山にまさりて、甚あやふきところがちなるに、われのぼり坂よりくだり坂のかたを、なか／＼になやましくおもへば、やすらひがちなり。「刀よこたへては、かよひがたきところあり」と宿の主がいひしは、げにもしかり。

すこしくだりて、天岩戸扉石といふがあるも、名には似ず、おもしろき岩也。されば、かの春のみ山ならねど、

つくばねの岩が根ごとに立ぞよるよにもあやしき陰をこひつゝ

こゝを弁慶もどりとといふ。

又すこしゆきて聖天の祠ありて、そのほとりに大きな鐘を地上におきたり。銘はなけれど、仏像を鑄たるさま古く見ゆ。この鐘を弁慶がかつぎのぼりて、岩にさへられてもどりによりて、弁慶もどりととは、かのあたりをいふよし也。弁慶が力つよかりしこと、実録に見えぬを、いづかたにても力のつよきことは、たゞ弁慶くゝとのみいひて、かゝるたぐひのつたへ、よにおほきも、あやしきことなり。

このほとりに茶屋あるは、道の半といふ。このあたりより十三塚といふにくだるみちありて、水戸のかたにゆくには、その十三塚にかゝるがちかしといへど、そこはやどりあしく、今すこしゆかでは、はかくしき宿りもなし、ときゝしかば、けふの日、あしのおよびがたきをしりて、みちいさゝかとはけれど、こよひはこの山にやどらん、とさだめたる也。

弁財天の祠のほとりをすぎ、二の鳥居にいたり、こたびは中禅寺の右のかたにくだりて、かの二王門のまへにて、はじめの道にゆきあへり。すぎこしみちには、かのみなの川ばかりのながれありて、そをあか井の滝といひ、又こゝにちかく白雲の滝といふもあれど、これもおなじさまにて、いとほそき滝なり。この門のまへに来たるほど、日もくれかゝりて、ゆふ月のかげあらはれそめたり。

つくばねや新桑まゆのおもかげもほのかにかぶ夕月のかげ

この山のみち、およそ五十丁、みち三里ともいひ、又男峰へ五十丁、男峰より女峰へ十三丁、女峰のくんだり道七十二丁ともいふ。女峰への十三丁はちかけれど、のぼりくだりは、そのほどより猶とほし。山みちは、いづかたのも、しかと道法わかりがたきものなれば、いづれが是なるやさだめがたけ

れど、そのなやましく、さがしきことは、わらぐつやぶれ杖のさきそこなはるゝばかりなるも、老若男女ともにのぼり得ざることなきを、「ふしぎなり」といへり。いかにも女などはのぼりうべき坂とは、うちみにもみえざる也。

そもこの山のことは、『式』に「筑波山神社二座（一名神大一小筑波郡）」と見えたれば、もとよりふたつの峰にありけるなるべし。今はおなじやうにたゞせ給へるも、いづれのかたが小社なりけむ。たゞ男体・女体のとなへのいやしきが耳にさはれど、国史どもはいふにおよばず、ふるき歌どもに、その名あまた見えたれば、げによのつねならぬ山なり。はやくより江戸にあるほどは、朝夕にとほく雲のよそにめなれしことをおもひて、

あまたとしよそより見つゝまうづるはけふ新治のつくば山かな

二並のつくばの山を見てもしれ陰陽のことわりあるよなりとは

とよめるは、ひそかにおもふよしありてなり。

宿りにかへりて、ゆあみなどしつゝ、こよひはことにつかれぬ。この山は、さぞな、さむからんとおもひしが、ことのほかあたゝかなるがいぶかしくて、主にとへば、「この町は、ことにあたゝかにて、十月にはさく梅もあり」といふ。高山のうへに、かゝるさかひのあるは、げにおもひはかりにたがふのみかは、こゝには遊女さへあり。こもいと似つかはしからねど、昔この山にて、かゞひてふことありしためしをおもへば、ことわりにかなへるか。忌服獣肉の穢は甚いむならひなれど、月水のけがれはいますといふ。これも、ことわりあるやうにおぼゆ。

こゝより江戸へ二十里、日光へ廿二里、水戸へ十二里、土浦へ五里なりとぞ。

名だかき「雫の田井」のことをとふに、「この山のふもとにちかく、志附シツクといふ里はありて、その

あたりしる本堂何がしどのゝ館もあれど、田井のことは、しり侍らず」といへば、「雫の田井」といひしは、そのあたりなりけん。

この山の産物をとへば、「かのつくばねと、めと萩也」といふ。さて旅のならひ、いまだ老のさかひにはいたらねども、ねざめがちなるは、よる／＼のことなれど、

うちとけてこよひは夢やみえなまし結束ぬる家にやどりて

五日。くもりてきむし。かの中禅寺のほとりまで、きのふのみちをのぼり、それよりみちをかへ、山みちにかゝりて、しばしゆきたるところより、すこし谷にくだり、白滝不動シラタキといふに、まうでんとす。くだりはてゝ、谷川の石橋をわたり、その滝のもとにいたりてみるに、松の木立もものさびて、堂のいらかもものさびしく、をかしきところなり。

山人のかよふほそみち立よりてみるかひはある白滝の糸

その不動堂のうしろより、ほそきみちにかゝりて、峠のかたにいづ。この白滝にまはるは、はつか三丁ばかりのまはりなりとぞ。

猶山路をゆきて、のぼりはてたる峠は、見わたしよし。鳥居あれど、かさはおちて横たはれり。こゝは木立ひとつもなければ、かぜあらしきは、おほふかげなきによりて、風のために、さしもの石もかくなれるよし。もとの鳥居も風のためくだけたり、とてそのなごり、かたはらにあり。高山のうへの風のはげしさおもひやられたるに、はるかうへなる男体・女体の宮の、つゝがなくましますは、かへす／＼もたふときことなり。

きのふみし鐘のあたりよりくだるみちは、こゝにつゞきたり。くだりはてたるところ、左のかたに

も石の鳥居ありて、かのかねのあたりより、こゝへもくだるとぞ。その鳥居より二丁ばかりゆけば十三塚村にて、筑波町よりは一里半也といふ。けさよりくもりし空はれて、このあたりにて天気よく、いとあたゝかになりぬるは、何よりもうれし。

きのふ山みちにてつかれたる足のなごり、けさ又くだり坂にてつからしゝかば、この村にて馬をかる。われ馬にのりしことはいまだなし。こは乗馬は身におはぬことゝこゝろみず、旅にてはあやふきをゝそれたることなりしかど、「この街道は、今ゆくさきもおほかた駕籠なし」といへば、せんかたなくてのことなれど、おもひのほか、こゝろよきものにて、鞍上のみわたし、はれやかにて、駕籠にはなかゝゝにまさるかたもあれど、笠をきれば眠をもよほし、ぬげば日かげはしたなくてはたゝくには、甚なやめり。

村をはなれ、むかひのかたにたかくみゆる山のふもとには、いなだ姫さまとまうす神の御社おはするよし、口とるをのこのいふは、『式』にみえたる「稲田神社〔名神大新治郡〕」なるべし。『新和歌集』に「藤原時朝が稲田姫社十首歌」といふこと見えたれば、そのころすでに稲田姫といひけるなるべし。西山公もこの御社にまうでたまふよし、『桃源遺事』に見えたり。かたゝよのつねならぬ御社なれば、まうでまほしけれど、みちとほしときゝて、えゆかず。郡はこのあたりより、かのかたりにて、新治郡也といふは、則「にひばり」をとなへあやまれる也。

すこしゆきて、みちのかたはら右のかたに、ほううん寺といふ寺ありて、庭に糸ぎくら咲みだれたるもよしあり。門のかたはらに碑文もたてれど、安永の年号みゆれば、ふるからぬ碑、とゆかしからず、馬よりもをりず。

小幡宿といふをすぎ、吉生村といふをもすぎ、かちをりといふ村の中にて、みちを左にをれ、川を

わたりたるむかひの左のかたに、佐志能神社の道しるべの石あり。御社は半丁ばかりおくに木ぶかくたゝせ給ひて、鳥居も見ゆ。こは『式』に「佐志能神社〔新治郡〕」とみえたる御社なるべし。つくば山もうしろにみやらるゝに、たゞ女体山のみ見えて、二並にはあらず。かくて、ひろき野原にいづ。駒にのるこゝろはる日はのどかにてながめひろがる野すぢ也けり

馬の草はむを、口とるをのがしかりくゆくは、心づきなし、とおもはるれば、

はむ草をさのみいさむな君が口やしなふはこの馬ゆゑにこそ

といはまほしけれど、これも馬耳風のたぐひならん、と口のうちにてつぶやくのみ。

十字になれるちまたを、たゞにとほりぬけてゆくに、つくばといふもさら也、わがくに山あしを山かば山などもちかくみゆ。柴間村といふをすぎ、一谷村といふにいたり、ものなごくふ。十三塚より四里なり。こゝまでは、ほそ道なりしが、このむらにいぢみちひろきは、笠間といふにかよふ大路なれば也。泉村といふには、左のかたの山のうへに愛宕社といふがましくて、木ぶかく見ゆ。こは女禁制なるよしいふは、めづらしきこと也。

この村より、又ほそみちにいり、広野にいづれば、笠間の城見えて、山城なり。かの鹿島には、一切経を供養し、稲田姫社には十首の歌奉りし藤原時朝は、この笠間にありし人なりけり。

土師村・住吉村などいふをすぎ、なむさんづけ村といふにいたる。文字は「随分附」とかくよし。世に村名ばかり、よみやうのあやしきものはあらねば、これもふるくいひつたへたる称のゝこれるにて、ことわりあることなるべし。

又野原をすぎ、鯉淵新田村といふをすぎ、大きな桜、左にあれど、花はいまださかず。このあたりより、つくば山を見れば、江戸よりみるにはさまかはりて、すがたをかしからず。大きな池を左

時朝が笠間ニアリシコトハ、『一切経』ノ奥書ニ「常州笠間」トアルニテ明カ也。

に見、鯉淵村にいたる。一谷より三里也。

みなの川あたりちかくはながれぬをこは又なにの恋測の里

こゝにて又馬をからんとするに、かへさ日のくるゝをいとひて、かさむといふものなし。「価をまさん」といへど、うべなはざるも、いとたゞしきひなの風なり。茶屋の主は、そこかしこはせめぐりて馬たづねしかど、その功もなく、いたづらに時をうつしぬ。このむらより又広野にいづるに、ゆけどくはてしなく、おもふ君なき旅なれば、かちよりゆくはいとくるしくおもふほど、日さへくれぬ。

馬はあれどかさぬをいとどうらむかな日ぐれてみちの遠き野原に

三日月の光はあれど、松風ものさびしくて、いと心をいたましむる夕ぐれのさまなるに、

まつ風のおくるのみかは今ひとつともなひがほのゆふ月のかげ

この野の間一里にて、つきたるところを川和田村といふ。はやく宿りとりしは、その家のきたなきくま、けちえんにみえわたりて、たへがたきがうへ、今一里ばかりはゆかるべきに、などおもはれて、心よからぬものなれど、かく日のくれたるも心ぼそくて、はた心よからぬものなり。

八幡川ハチマンといふ川のはしをわたり、宮村といふをすぎ、水戸ウヰの上町といふに入て、雷神ライジンの森といふものりのまへをすぎ、和泉町といふにいたりて、伊勢屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。

けふのみち、府中といふかたにいづれば、みちはよけれど、とほしときゝて、こゝにいでたるなれど、近みちといふものは、かならずかよふべからぬものにして、けふのみちも、かよふべきみちにはあらず。そのところの人は、たゞかよひなれたるみちを、「ちかき」といひ、又「さばかりあしきみちにはあらず」などいへど、大路のかたと、こよなきみちのたがひもあるものならねば、大路のかたをゆくべきものなり、とかの馬のとゝのはざりしにても、おもひなりぬ。

さて、この里には、たづねまほしきあたりもおほきを、わが輩のたづぬる古跡は、そのところの人はなか／＼にしらざるがちのものなれば、いかならん、と心づかひなりしに、宿の主、おもひのほかよくしり居て、「明日、案内者やとひて、しるべきせまゐらせん」といふは、ことのほかうれしくて。

六日。日よし。まづ寿昌山祇園寺といふをたづぬ。こは博労町といふにあり。門に下馬札たち、その門をいれば、右に糸桜さきたり。左には関帝廟・如意輪堂などありて、いらかもふりたり。又門ありて下乗札たち、仏殿もゝのふりて、敷瓦のさまいとからめき、額聯などかずおほく、こと／＼くはしるしあへず。すべて黄檗宗めきたるつくりなれど、宗旨は曹洞宗なり。そのさま、この宗に似げなきは、この寺の開山は心越禪師なればなり。水戸家御代々の御位牌のをさまれる堂にとなりて、かの禪師の墓あり。石面には「寿昌開山心和尚塔」とありて、よのつねのかたなる石塔なり。そもこの禪師は明末の人にして、志操たゞしくて、清の代にしたがはず、帰化せしことは、よの人のよくしるところなれば、今さらいはんもことふりたれど、その志操はわがつねに感じおもふところなれば、ふりはへてたづねたるなり。

この寺より盜賊除の札といふをいだすは、「漢寿亭候^(侯)」とありたる印をおしたるにて、文字のさまふるくみゆ。この禪師は寿亭候^(侯)の後裔なりしこと明らかなれば、かの地より将来の印なるべし。こは黄金印なりとぞ。外にも将来の宝物おほく、そは六月虫干の時ならでは、みることかたし、といふもとよりこの寺は、よにめづらしきならひにて、経は唐音にてとなへ、よの曹洞宗にはたがひ、わたくしに「から宗」ともとなへ、こゝはその一派の本寺にて、末寺二十ヶ寺あまりもありといふ。かの額聯などは、おほく開山の筆のあとなれば、よにすぐれたること、いふにおよばず。この墓のほとり

に桃一木咲たるに、

桃園にちぎりかためしそのかみもおもひいづべき花にやはあらぬ

西山の光そはすはこゝにしも海のほかなる月はとまらじ

卷十四。

さて『常山文集』に「天徳禅寺」なる、心越禅師の塔をすぎてつくらせたまふ御詩見え、『千年山集』の中なる朴翁居士が作の『ひたち帯』にも、岱崇山天徳寺に参詣して、心越禅師のあとをとひ、法嗣呉雲和尚と禅談なすよし見えたれば、「天徳寺といふは、いづれにかある」と住僧にとへば、「さる寺はなし」といふ。『御文集』なる「塔」とあるも、またくこの墓のこととおもはるるに、「天徳寺」とあるは、いといぶかし。今の世の僧は、おほくはものしらぬがちにて、たゞ経よむことのみをわがつとめとせるがちなれど、わが宗の寺のことは、よもしらざることあるまじきを、「しらざ」といへば、よくしれる人にたづねまほしきことなり。

それより仙波湖のかたにゆかん、とてよべすぎしみちのかたに、すこしかへる。このあたりは、よべみるかた、みちのたよりはよけれど、よるのめにてみえがたかりしかば、けさしも又来たれる也。このみちよりも、つくば山とほくみゆるを、とはではその山とおもはれぬばかり、すがたかはりてみゆ。まことにこの山は、いづかたよりもよく見ゆる山なりけり。

かくて七面山シチメンとて、七面堂といふがあるほとりに、「御碑拝見道」といふ榜示と、「無用のもの入べからず」といふ制札とたてる、かりの門あるを入ば、梅いとおほく咲たり。こは今の殿のうゑさせたまへるなるよし、みだりにすまじき制札たてり。

その梅の中を一丁ばかりゆけば碑ありて、石面に「儼湖暮雪」と隸書にてかゝせたまへるをゑりつけたるは、則今の殿の御筆にて、御手蹟よにもすぐれて見えさせたまふ。こは御領内、八所にたてた

まへるなるよし。かのから国の康熙の帝の西湖のためしおぼえて、右文の徳化いとめでたきことなり。西山公は御著作のかずおほく、いづれ有益の書ならぬはなくして、かの帝に似させたまへることもおほきに、そのうち又も、かゝる殿のいでさせたまへるは、いともあふぐべき御事にて、御政事も西山公の御時にかへしたまはんの御心しらひにて、その御時のためしのごとく、江戸にのみはおはさず、このころはこゝにおはすとぞ。

この国は文の花さへさかりにて梅にまじれる雪のいしぶみ

この碑のもとにやすらへば、かの仙波湖ひとめに見えて、おもひの外ひろく、船どもはそこかしこにうかび、水鳥のおほくむれたるに、末はかすみわたれる木末のさまなど、いはんかたなく、ながき堤ありて、その中に橋の三つばかりかゝれるもよしあり。

立さらでしばしはこゝにながめせん。はるおもしろくかすみづうみ

碑のほとりより、いさゝか坂をくだりて門をいづるに、こゝにも「無用のもの、いるべからず」といふ榜示たてれど、人のいることは、とがむる人もみえず。

それより湖のほとりをすぐるに、弁天堂といふが左にありて、ほとりに岩穴めきたるものも見ゆ。こゝに神崎寺といふがありて、真言宗なるが、寺中にはしをわたるところなどもありて、いと大きな寺なり。『常山文集』に「神崎寺桜花」の御詩みえたるは、この寺のことなるべし。

もとの宿りにかへり、道をかへて春日の社のかたにゆかんとするみち行ふりに、舜水堂をたづぬ。こは馬場のほとりにありて、堂のたてざまからめきて、中に舜水先生の像を安置せるよしなれど、とざしてみえず。あたりに、いさゝか桜の木立あり。こゝには西山公の桜をおほくうゑられしよし、『湖亭渉筆』に見えたれど、かくおほからぬは、そのうちかれたるにや。かの先生は桜花を愛して、庭に

『舜水先生文集』附録『行
実』二、貞享元年、祠堂
ヲ駒籠ノ御別荘ニ構ルヨ
シミエタレバ、サクラヲ
ウエシハソコニテ、コ、
ニハアラザルカ。識者ニ
タツヌベシ。

数十株をうゑて、「もしかの国に桜花あらば、百花の冠たらん」と常にいはれしかば、そのゆゑに西山公の、さはなしたまへるよしなるに、かくなれるは、なげくべきことなり。この先生の志操たゞしきは、よく人のしるところなれば、今さらいふにおよばず。この先生の文集は、「門人權中納言三位西山源光圀輯」としもしるさせたまひて、ゑりまきとなし給へるは、文に貴賤のへだてなきが、いとありがたき御ことなるに、こゝにかく遺蹟をとゞめさせたまへるも、いとありがたく、めでたきことぞかし。

それより馬場のほとりをすぎるに、殿人たち「われをとらじ」と馬にのりきそふめれど、こはわがあづかるべきことにあらねば、よそに見すぐして御城内にいる。下馬・下乗の札のたかくめにたつあたりもあり。こゝのみにかぎらず、かく城内をかよふこと、心してはゞかるべきことなれど、こゝをかよはでは、ことのほかみちとほきよしなれば、心にはあらねど、こゝにいりたるにて、下町シタといふにいづ。この下町と上町との間一里なるよし。その町と町との間は御城にて、いといかめしくみゆ。

ある家の門に酒うるなるべし、「名酒出門倒」「名酒透瓶香」と両面にかけるが、ふとめにつけり。かゝる看板かゝげたるも、右文の徳化あまねき御国風、たふとむべし。

吉田社の木立やゝちかくなれるあたりより、又も千波湖みゆるあたりありて、御城はたゞむかひに見え、湖の中に一すぢながき堤こゝにもありて、ところ／＼にはしかゝり、柳いとおほきが、はなだの色けぶるがごときは、をりにあひたる春のさまにて、いはんかたなし。こは西湖に擬して西山公の御時きづかせたまひ、かく柳をもうゑさせたまへるなるよし、『桃源遺事』にみえたりしが、今もこのつゝみを新道といふよしなり。みやびもいとたゞならぬ公にましまして、たれかはかゝることなし得む。

こゝにしもありとはしらでもろこしの西のみづうみしたひけるかな

一すぢの柳のつゝみうちけぶりもろこしちかくかすむおもかけ

吉田の御社といふは湖のほとりにて、大社なり。こは『式』に「吉田神社〔名神大那珂郡〕」とみえたる御社にて、今は茨城郡に属せるよし也。かく大社なるは、西山公の御時、寛文七年十一月に古きにあらため、社僧を廃し、御社をも修造せさせ給ひ、乙女八人・神楽男五人おかせ給ふよし、『御行実』にくはしく見えたるは、ありがたきことなり。

又下町にゆきて、このまちのうち、中の湊といふにゆくちまたにて、かの銚子人にわかれたり。この人は真卒(奉)愛すべき人ながら、はなしがたきにはなりがたかりしかど、一日二日のなごり、さすがにたゞならずおぼえて、さびしくなれるやうにおぼゆ。

この町にてもものなどくひ、いこひたる家の主が、「ちかきには殿の御しゝ狩ありて、そはいづれも甲冑を着し、いといさましく、よにめづらしきことなれば、それまでとゞまりて見たまへ」とすゝむれど、こはわれらが見たりとて益あるまじきことなれば、のこりおほくはあらねど、さきにもいふごとく、西山公の遺風をしたはせ給ひて、今の殿の文武のみちみがきたまふを、めでたしとあふぎ奉るのみ。

かくて枝川(エダカハ)の渡といふをわたり、枝川宿にいたり市毛村(イチモギ)といふをすぎ、田彦宿(タヒコ)といふにいたる。こゝより、たゞにゆくが街道なれど、太田(オホタ)のかたにゆかん、とおもふ心あれば、左のかたに道ををれ、管谷・堤・横堀などいふ村をすぎ、額田宿(ヌカダ)にいたる。この宿のすこしまへに向山(ムカウ)とて、左のかたに寺の門おくふかくみえ、松山のたゞすまひ、あたりに池あるさまもたゞならず見えたりしが、こは浄鑑院てふ浄土宗の寺にて、源威公の御せうと万千代君とまうすをかくし奉れる寺のよし、『御行実』『ひた

ち帯』などにみえたるやうにおぼゆ。

又川をわたりて川合村カハアヒといふにいたる。この村より十丁あまりもへだたりたるところに、天神林テンジンバヤシ村といふがありて、天神御社ましますよし。こは、西山公の御時までは菅公をまつりたる御社といひつたへ来たれるを、元禄六年に天神七代の社なることを考さだめ給ひて、「天神七代宮」とみづからかゝせたまへる額をかゝげさせ給へるよし、『御行実』『桃源遺事』などに見えたる御社なれば、まうでまほしけれど、ゆくさきいそがれて、えまうでず。

この川合村より磯部村といふにいたる間は十八丁の繩手にて、左右すべてさくらなるは、ちかきころ殿よりうゑさせたまへるなるよし。この磯部村より大田宿にいたる間も、おなじやうにうゑられたり。こは瑞竜山の御廟所みちなれば、かくはうゑさせたまへるなるよし。八景の碑といひ、とりぐみやびごゝろまします殿なりけり。

この大田まで水戸の上町より五里、下町より六里といへば、上町よりくるがちかけれど、吉田ノ社などにまうでしかば、かく下町よりたゞに來たる也。

この宿の奈良屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。こゝにしも來たるは、瑞竜山をはじめ西山の御山莊などたづねまほしくてなるを、主にそのことはかるに、いと心よくうけがへるは、うれしくて、美酒美肴にもまされるもてなしとやいはん。この宿りは、かた田舎のならひ、浴室と、かはやは、かべひとへ、へだゝれるのみにて、家もきよからねど、あるじ夫婦、まめくしくもてなせば、しる人まれなる旅にては、心よくおぼえて、いぶせきかたは、まぎれてなん。

この宿は水戸より、陸奥の棚倉にゆく街道にして、十三里ありといふ。棚倉は、あらぬさかひのごとくかねてはきゝしかば、いとゝほきあたりとのみおもひ居りしを、おもひのほかにかきあたり也、

とはじめてしりぬ。その棚倉をへて、中街道にいづるみちもあるよし。白川へも二十里、矢吹へも二十里也とぞ。その間は道いとあしけれど、白川・矢明^(吹)までいづれば、道よしといへど、相馬街道もひと度は、とそのかたにおもひたゝんとす。

陸奥日記卷上終

陸
奧
日
記
卷
中

七日。日よし。よべよりのみおきたる案内者つれて、朝とくいど、先、檀林といふかたをさして四五丁ゆけば、山あり。すこしいれば杉の黒木の鳥居ありて、「開会道場」といふ額かゝれり。こを、くぬぎの鳥居といふ。すこし小だかき所に庵室ありて、そのまへ、いとみはらしよく、こゝに「山寺晚鐘」とありたる碑たては、千波湖にたてるとおなじことにて、今の殿の御筆なるが、すぐれてみえさせ給へることは、いふもさらなり。こゝのは、石はましろなる石にて、甚うるはしくみゆ。

そこかしこみめぐるに、この山はみな学寮にて、長屋のごとくにたてつらね、入口ごとに僧の名を、くろきふだに、しろうくするせり。中に「文論場探玄」などいふ額のかゝれるあたりもあり。「三昧講堂」といふがくのかゝれるは、仏堂とみえて本尊あり。その長屋のかずのおほきは、かぞへもあへぬばかり也。こゝは法華宗の学寮にして、さと人は「檀林」となへ、僧のことは「能化衆」となるよし。こゝには、殿より、ひとりの僧に堅魚いくつとさだめて、そをくださるゝよし也。こゝは西山公の御時、こゝの僧、かつをぶしをくはでは根気つゞきがたきよしいへるを、「うべなり」とおもほしめせるよりはじまれる例といへば、この宗の我慢に似げなく、をかきことなるに、そをゆるされし公も公なりけり。

そこよりすこしゆきて、山の寺といふにいたる。こは久昌寺といふ寺なれど、山の寺とのみいひて、かの檀林は、この寺の学寮なり。

先、入口に下馬札たちて、門のほとりには下乗札もあり。門には「久昌精舎」といふ額かゝり、又、山門ありて「菩薩閣」といふがくかゝり、左右に鐘楼・鼓楼あり。本堂には「経王宝殿」といふがくかゝ

り、そのうしろの堂には「聚石堂」といふ額かゝれり。その外、御位牌のをさまれる堂、あるは塔などもありて、おほかたの堂は、わらぶきにてもさびて、しかもつくりざまめでたく、木立ものふかく、都にもいまだみざるほどの心にくき寺にて、このよの外にでたらんやうにおぼゆるはことわりにて、この寺は西山公の御母、義靖定夫人と申奉る君の御菩提のため、日忠上人といふを始祖として、御みづから所をえらび、山をうがたせ、木をきらせ、御創建ありし寺なること『御行実』『桃源遺事』『ひたち帯』、安藤為章が『和歌の御法』などにくはしくみえたり。この公御在世には、新建の寺九百九十七を毀ちたまふよし、『御行実』にみえたるに、たつべき御寺はかくめでたくつくり、みがせたまふこと、なま学者のかたくなに仏をこぼつとは、こよなきたがひにて、感にたへたることども也。

そのうち、その御母君の三十三年御忌に、いみじき御作善、この寺にてとりおこなはせたまひ、結願の夜、御法楽の和歌披講ありしことどもは、すなはち上にいへる『和歌の御法』にいとつまびらかなり。その披講ありし堂は、この聚石堂なるよし。そのふみにかける図むかしみしが、目にのこれるをこゝにておもへば、その時のさまは、かくやありけんなど、いとかしこけれど、しのび奉らるゝに、西山公の御歌は、「観普賢菩薩行法経」といふ御題にて、「露霜とむすびしつみもきえぬべし鷲の御山をてらす日かげに」とありしこと、おもひいで奉られて、

身につもることばの罪もきえぬべし妙なる法の庭にまゐきて
とよめるも、おほけなけれど、敷しまの道にたかきいやしきへだては、あるまじきものを、とおもひゆるしてなむ。

この聚石堂のまへに、糸ざくらのをかしく咲みだれたるを、

ちりもなき吃哩字にさける糸ざくら色やそのまゝ法のはなぶさ

さて、胎内くゞりとして、山をきりぬきたる穴より摩訶行庵といふ庵のまへにいで、山ごえに五六丁もゆきて、御西山といふにいたる。こは『常山文集』に、元禄四年の五月、西山のふもとに菟裘の地を卜したまふ御詩みえたる御山荘にて、かの公を西山公とまうし奉るも、こゝにすませたまひしよりのことになむ。

下乗の札たてるところに、いとさびたる黒木の柱にわらぶきの門ありて、竹のとぼそもよしあり。その門をいれば、こゝをもるひとの家ありて、その家のまへより、庫のほとりにいたる。これには西山公の御像をこめたりとかや。そこより御庭にいづ。すべて御すまひのさま、華美にはあらず、質素をむねとせられて、あさぎの柱のふしがちなるに、わらぶきの屋のむねには鳶尾草イチャハツをうゑられたり。御茶室とおほしきあたりに、枝折戸・竹の編戸などもあり。こゝを西山といふは、佐竹義重朝臣のこのあたりを領せられしころ、都の西山に似たりとて、かく名づけられしよし、安藤為章が『中秋御会記』にみえしはさることにて、山のかぎり赤松の木立、たゞまひいとをかしく、嵐山にいとよく似たり。しかるを、すこしもつくろはず御庭となさせられて、木立はもとめてもうゑられず、梅桃などいさゝかあるのみ。ほそき滝おつるあたり、竹むらおひしげりたるあたりなどありて、こちたくつくりなしたる庭のさまには、はるかにまさりて、たとしへなく幽邃なるさま、たぐひあるべき御庭のさまにあらず。かの『ひたち帯』に、「かゝる、やつくしき御すみか、もとより御ほいの事とはまうしながら、おろかなるまなこよりは、御いたましきかたにぞ、おぼえ侍る」とあるがごとく、おもひのほかかわびしき御住居にて、御庭のひろからぬも、なか／＼に御心しらひのふか／＼しを、かしこくおもひ奉らる。かの御詩に「境致非水又非山。意足到处物皆可」とつくらせたまひ、その秋の十五夜に「憶昔玉楼金殿月。不如对影酌忘憂」などつくらせ給へりしを、おもひいでたてまつるにも、

なみたてる松ものいはゞ西山のむかしのこともとはましものを

昔こゝに鶴二羽はなたせ給ふよし、『ひたち帯』『桃源遺事』などにみえたるを、おもひいでゝ、すみし鶴いづこにさりし山松に千とせかはらぬあとをとゞめて

みづからかゝせたまへる梅里先生の碑文に、「宿志たりて郷にかへる」としるさせたまへる本末をおもひ奉れば、いとおほけなきことながら、わが宿志も似たるさま、なきにはあらず。はやく宿志とげて隠遁の身となり、つひにはさまをもかへて、風流をむねとせまほしき望あれば、この御山荘のさまは、身にしみておぼゆるばかりにて、すぐろに涙もよほすばかりなり。

さて、今いりしみちは、うらのかたよりいりしなれば、こたびは御門よりおもてのかたにいづるに、すこしゆきて下馬札たてり。そのあたり山の根づたひにて、桃の並木ありて、こゝに新宿アラジユクといふ村もあり。をりから、その桃の木どもほころびそめたるほどにて、さかりにもまされるこゝちす。この並木の間八丁ばかりもありて、その末に川あるに、土橋かゝれるを桃源橋といふ。このはしにちかく右のかたに碑あれば、よりてみるに、篆額の文字の「常州西山」といふのみさだかにて、風雨のために碑文はさだかならずなれり。げにこの橋の名のごとく、仙境ともいふべきあたり也。

こゝにしも君よをさけて文のはなさかりをみせし桃のみなもと
からくにゝ牛をはなちしたためしまでおもひぞいづる桃の林に

そもこの山荘の御ことは、『御行実』『桃源遺事』『ひたち帯』、安藤為章が『西山賦』、又おなじ人の『年山記聞』などに、そのさま、いとくはしくしるしたれば、今さらつたなき筆にかきけがさんよりは、とその書どもにゆづりて、くはしくはしるさず。

その『年山記聞』に、「希世の名将のすませたまふあとなれば、後々は名所のかずにぞ侍らまし」

といへるは、先見あきらか也といふべく、とほく名をきつゝ、かく道をまはりたづねきたるは、すなはち名所なり。すべて西山公のゆゑよしあるところへは、さばかりふるきあたりならぬも、われは名所古跡のごとくにおもへり。名所古跡といふは、ふるくゆゑよしあるところのことのみおもへる人もあれど、そはかたくなにて、ゆゑよしをかしき所は、きのふのことも古跡なるべし。

それより医学寮のほとりにいで、かの佐竹氏の古城のほとりをすぎ、太田のうち寺町といふにいつこゝは棚倉にゆく街道なり。この町つゞき馬場村といふ村にて、このむらのちまたをわかれ、小野村といふにいたり、このむらより棚倉街道をはなれ、左のかたに入、瑞竜村にいたる。

この村の入口に、はつかなる坂ありて、のぼりたるところに白雲山旌桜寺といふがあるに在るに、禅宗にて、ものさびたる寺なるが、「瑠璃殿円通閣」などいふ額のかゝれる堂ありて、前に旌桜とて希代の大樹一本ありて、庭もせにひろごれり。これは昔、源頼義朝臣・義家朝臣、奥州征伐のかへさにこゝに旌をとどめたまへるより、この名ありて、花のかたちも、よのつねにことなるよし。そのゆゑをもて西山公の御時、両将の神主をよさめたまひ、「遠孫光圀奉祀」とあそばされけるよし『御行実』『桃源遺事』に見え、このさくらは、おなじ公のいたくめでさせ給へるにや、『常山文集』に御詩六首見えたり。『ひたち帯』にも、このさくらのさかりをみよししして、歌もあんなるが、このほどはまだ冬木のまゝにて、はつかに芽のふくらかになれる計にて、かゝる名花のさかりにあはざること、遺憾なり。「御秘花をるべからず」といふ制札もたてり。

かぐはしき名はとゞまりてはたゞくらはたのなびきもしのばるゝかな

ふくかぜをなこそその関の外にはた名をとゞめたるこれのさくら木

その寺よりすこしゆきて、瑞竜山の入口にいたる。こもれる人は、みな烏髪にて、その人々の家ど

も、ほとりにあり。左のかたに番所といふがあるにりて、案内者が「この御方は御家中にて、江戸よりはじめてまうきて、御廟拝礼いたしたきよしをまうさる」といひ入、錢百銅紙につゝみて、「こは御案内料也」とていだけば、まもる人「刀はこゝにとどめたまへ。供なる人よ、わらぐつは、ぬぎね」とをしへつゝ、さきにたちつゝしるべせり。こは、たゞうへばかりの御さだめとおもはれて、詞づかひなどのまぎるべくもあらぬを、その人はおぼめくなるべし。いとおほやけなることぞかし。

先、下馬札たち、そのおくに下乗石ありて、石の階をのぼれば、又たかき石階ありて、そのうへに御門あり。そこにて草履をぬぎ、又、石階をのぼり、又、御門ある。外よりうかゞへば、四方いかめしく、いがきつくりめぐらして、中に御石のしるしならびたり。こは俗に鼈甲石とて、この国よりいづる石にて、いとうるはしき石なるに、金にて字をゑれり。台は螭首亀趺とかやいひて、うち見は大きな亀のかたにて、そのうしろに小だかくつきあげたる土のしろきを馬鬣封といふ。こは「何公さまく」とて、つきくをがみめぐるに、いづれも御夫婦の御しるし一かまへにて、北の方の御しるしは馬鬣封にあらず、すこしかたちまろくして、土饅頭といふ。その案内者のをしへしやう、わすれじとはおもへど、ことなる御げぢめみえねば空におぼえがたきに、墨斗とりいださんは、はゞかりあれば、書つけず。御石のしるしの文字の記しぎま、御官位御諡号を「何公」としるし、北方は御諡を「何夫人」としるし、その下に「何氏墓」としるされたり。

何がしの君の御廟のほとりに梅の一本たてるもありしは、御愛樹なりしものか、又は『桃源遺事』に見えたる誕生梅なるか。その中にも義公の御廟はそのさまことにして、寿堂とて六角なる堂をからめかしくたてられ、そのうしろのかたに、ひとときはいとたかく石のしるしをたてられたるが、はるかに見あげ奉らる。この寿堂と申中には、『常山文集』にみえたる梅里先生碑文をゑりたる石をたてら

れたり、とかねてきけることあり。さればその碑文中にみえたるごとく、こは御致仕の御時たてられたるにて、御衣冠魚袋などを、この下にかくしたまへるなるべし。その御碑の銘に「月雖隱瑞竜雲。光暫留西山峰」とあそばされけるを、おもひいで奉りて、

西山の峰にはつひにとゞまらで光かくれし月をしぞおもふ

草も木もなびきし文のはなちりてあとはさびしき山のまつかぜ

御功はいやよにたかく雲るまでのぼりける哉竜のいしぶみ

かく「竜のいしぶみ」としもよみたるは、安藤為章が『手向草』に「公の御母君、神竜ふところにいると見て御懷孕まし、御字は子竜と申し、を、瑞竜山にしもかくし奉れば、御碑をたつの碑など申べし」とみえたるを、おもひいで也。

かゝるやんごとなき君だちの御廟どもを、かく拝礼し奉れるは、身におはざることなれば、はゞかるべきすぢなれど、こはもはらこの義公の御廟を拝し奉らんがためにて、文事にあづかるものは、この公の御恩沢をかうぶれることのすくなからぬゆゑなりけり。

かずならぬ草のかき葉もいやたかき文の林のかけはわすれず
と心のうちにおもひつゞくるも、はたかしこしや。

かくて朱舜水先生の墓にいたるに、こはひくきところにて、いさゝか小だかくつくり、ひくき石階ありて、いがき門などもありて、石のしるしには「明徴君子朱子墓」と義公の御筆にて隸書にてかゝれたるをゑりつけて、うしろに土饅頭あり。きのふもいへるごとく、この先生の志操はさらなり、そを義公の師弟の義を重んじて、御家門の外こと人の墓のみえぬ中に、たゞひとつこの墓をおきて、こゝにしもはふり給へる、右文の徳化のをこなはれたること、いとたふときことなり。

これをだにおもひ出にせよもとのよにかへさぬうらみ君はありとも

波とほき千さとの外に死て名をよにとどめたる人ぞこのひと

みし夢のさがもつひにはおなじ夢くちせぬ名のみ石にとどめて

かくよめるは、この先生幼かりし時、「夜暖溶霜月。風軽薄露水」てふ二句を夢みられしが、其兆
いかにともしられざりしを、帰化の後、皇国の風土になれて、はじめてさとりて、海外に漂零するこ
と命なり、とおもはれるよし、『行実』に見えたるをおもひて也。

その外、御子たち御家門がたの御廟どもをもがみめぐるに、いづれも石階たかゝらず、おなじや
うにならびて土饅頭なり。去年かくれたまへりし何がしの君のは、いまだ御しるしとゝのはず、芝に
てたゞ土饅頭のかたちばかりをつくりて、石工ども、その石づくりする音いとかしまし。

明日は、一年にひとたびの土神祭ドウシンといふにて、殿もまうでさせたまふ例なるを、ことしはさはるこ
とありて、御名代なるよし。こは、はじめ土地の神をまつりて、そのうち御廟をことごとくまつるな
るよし。まつる人々の服は、麻上下にあらず、布衣烏帽子にて、御供物の強飯いとおびたゞしく、楽
もあるよし、案内者いへり。この御祭をも拝礼せまほしかれど、一日とどまりては、かの十里のみち
のたがひとなるを、それは、かつは天気よきあひだに一日もはやく、とおもへば、それを拝礼せざるも、
甚遺憾なり。かゝる御祭あるも、まつたく儒家風にならはれたるなるべく、御廟のつくりざまはいは
んもさらなるは、貴人の御うへにはあるべきことにて、いとめでたし。貴人の御廟を法師のより奉る
ことは、なくもがな、とぞおもはるゝ。この瑞竜山の御ことは、『御行実』『桃源遺事』などにくはし
くみえ、舜水先生の墓の事は、おなじ人の『行実』にもくはしく見えたり。

かくて、もとのみちを寺町までかへり、かの古城のまへをすぐるに、まへのかたには、からほり・

土塀などのこれり。このまへにも、ちかきころ、さくらをうゑられたるがみゆ。

それより町の中をすぎるに、けふは市日なり、とていとにぎはし。瑞竜までは、こゝより一里半といへど、そはちかし。されど、ゆくさにそこかしこみめぐりしかば、ゆきゝ三里もあるべく、はやひるにもなれゝば、宿りにかへり、ひる飯くふ。

さて、案内銭は百五十文なるよし。この宿には、かく案内するを、かたへなりはひとせる人もあるおもむき也。御廟のいかめしくめでたきさま、久昌寺の都にもまれなることなど、いみじくほむれば、宿の主は鼻あかめて、いたくよろこびがほなるも、わがさとよしとのみおもへる田舎人には、さもこそとおもはる。

まことに、きのふけふ見めぐりし所々のさまの、よにもことなるさま、かばかりたゞしき風の今にのこれること、まつたくこれ義公の御余沢の千とせをかけてうせざるしるし、とすゞろに感をもよほしつ。その外このちかき御領内に、たづねまほしき義公の御遺跡いとおほけれど、陸奥かけてのみちゆきぶりには、かなひがたくて、又かかねてこのあたりにのみ、ふりはへて来たらまほしくおぼゆ。かくおもふも、つねに西山公の徳をしたひ奉りて、そのすぢの書は、めのおよぶばかりはあなぐり見て、かねてより名をしれるところぐおほければなり。

けふも馬をかり、きのふのみちをかへ、肴町といふよりたゞに坂をくだり、三歳^{サンサイ}幅^{ハタ}などいふ村をすぐれば、左のかたに、まつくら観音といふが山のうへにみゆ。こは瑞竜のかたにゆきしみちよりもみえし山なり。岡田村といふにいたれば、普問寺といふ古き寺みゆ。小目^{ヲメ}・新沼^{ニヘヌマ}などいふ村をすぎて、田中^{タナカ}々村といふにいたれば、浜街道にて、こは仙台にかよふ大路なれば、こよなくみちひろし。

土橋をわたれば大橋宿にて、太田より二里なり。こゝより水戸上町へ六里、下町へ五里といへば、

静神社ハ今那賀郡ニ属ス
ルヨシ、『常陸国志』ニ
モミュ。

太田にまはりしは、はつかに二里のたがひなり。この宿に月照山といふ禅宗の寺あり。石名坂といふ小坂をのぼれば、石名坂村といふ村にて、こゝより右のかたには大海みえ、さしいでたる岬は磯前といふあたりなりとぞ。

三日の原村といふには、「倭文神宮」といふ額のかゝれる御社おはしまして、「やまとふみの神宮」とまうすよし。たかき石山のうへに見あげ奉らる。この巖、神代に天をつきぬかんとせしを、この神のけおとして、こゝに鎮座まします、と里人いひつたへたり。『式』にみえたる「静神社〔名神大久慈郡〕」にはあらぬかとおもへど、この静神社は西山公の御時、吉田神社とともに御修造ありしこと、『御行実』『桃源遺事』などに見えたるさま、ことゝころのやうにおもはる。

このまへに饅頭をうる家に馬とどめて、茶をこひたるに、「今、茶はなし。あたゝめなば、時うつりなん。隣の家にて饅頭をもとめて、茶のみたまひね」といへるは、利をあらそはざる質朴の風、賞すべし。そのみならず、馬夫も礼儀いとたゞしく、しれる馬夫の馬ひけるにあへば、たがひにかぶれる手拭をとりて、目札をたゞしくせり。わが行李はなにごとそぎて、いとかるきを、「あな、おもき御荷物かな。この中には、何をか、をさめたまへる」といぶかしげにいへるも、をかし。

その三日原むらをはなれて、並木の松の右に泉川みちといふ石のしるしたちて、「歌によめる泉川といふは、こゝなり」といふも、かたはらいたし。

いづみ川かけたる波のぬれ衣も衣かせ山なきぞあやしき

「その泉は、杜の中よりわきいづるにて、泉明神とまうすがましますは、『式』にみえたる『天速玉姫命神社〔久慈郡〕』なり」といふは、いかゞあらん。

金沢村といふは、むかし金をほりしところ也といふ。この村をすぎ森山宿といふにいたれば、大橋

より一里なり。大沼村オホヌマといふをすぎ、十石村ジツコクといふは、八幡太郎、奥州征伐の時、兵糧を十石たきし古跡なりといふ。こゝは大久保村オホクボといふ村のうちなるよし。

すこしゆけば、みちの左に「おほくぼの田のもの蛙名のみしてねぎめせよとてなく声ぞうき」といふ歌をゑりたる石ありて、こは西行法師の歌なるよし、馬夫いへど、口つきもさは聞えぬものをや。こゝは水あなといふにゆくみちなりとぞ。又このとほからぬあたりに、はだか島といふありて、「大田尻ころもはなきかはだか島おきふく風の身にはしまぬか」といふうたのあるも、この法師のうたなるよしをかたる。これもうけられねど、このうたの口碑につたはれるよしは、『ひたち帯』にも見えたれば、はやくそのころより、いひならはせるものとおもはる。

このあたりよりして、のれる馬のあがき、しきりにはやくなれるを、「いかに」とへば、この馬は今ゆくさきの宿の馬なるよし、「家ちかづきしゆゑ也」といふ。かの和漢ともに、老馬にみちしるべさせしためし、胡馬の北風になゝくてふ、ふるごともおもひいでられて、あはれなるに、われも故郷のこひしきはおなじものを、とおもひあはされてなん。

森山より一里にて下孫宿シモマゴにいたり、池田屋なにかしといふものゝ家にやどりぬ。このあたりに鯨うちよりよし、その背につきたりし貝なり、とて見せたるが、いまだめなれぬものなりしかば、ひとつこひうけぬ。かず五つばかりありしを、主はのこらずあたへまほしきかほつきなりしは、すなほなる国風なり。

けふは日いまだくれぬほど、こゝにやどりしかば、いとつれづれにて、よひすぐるほどより炉辺によりて、こよひやどりはせたる陸奥磐城の商人、やどの主などゝ、火はほたるのごとくなるまでも、すゞるものがたりしつ。こよひの月かさきたるは、あすの天気いかに、といと心にかゝれり。この宿

は、ゆきとすくなき宿なれば、はしちかきあたりにいねたれど、いとしづかなりしを、をりく馬ひきすぐるおとの、ものにまぎれずして、なかく耳にさはれり。

しばくもすぐる鈴音すゞろにも耳にさはりてうまいしかねつ

油は魚のあぶらなれば、いぬればたちまちに灯きえて、ねざめがちなる枕のもと、いとむつかしくぞおぼえし。

八日。ひましらめるにをどろきて、主をよびおこさんとすれば、はやく水くみ、薪へしをるおとす。よべの雲、心にかよりしかば、まづふしながら天気のことをきけば、「よし」といふ。

この家には鶏をかひたれば、いとみかしましく、枕ちかくおとづるゝに、をりから又、雉子のとほく鳴けるに、

かけのねにいそがされつゝおきいづればきゞしもどよむさとの明がた

かの大物主の神の御うたもおもひいで奉られて、その実情は、そのさかひにいたり、その時にはねば、げにもしりがたきことゝおもへり。

諏訪村・油繩子村・成沢村などいふをすぎ、助川宿スケガハにいたれば、下孫より一里なり。この宿の左の山に、あらたにきづきたる城の見ゆるは、水戸家につかふる山部なにがしの城にて、ちかきころことなりしよし。さきにもいふごとく、今の殿は文武の両道をみがきたまへば、かくめづらしき例もあるなるべし。

宮田村・滑川村ナメカハなどいふをすぐるほど、このあたりに、かの初紫といふ花おほくさけり。田尻・小木津コキの両宿は宿つゞきにて、こゝまで助川より一里半なり。この小木津には稲峯寺トウホウといふ寺、右に

あり。小木津浜村・折笠村・川尻村などいふは海にちかし。この川尻にほどちかくさしいでたる岬は、九界浜といふあたりなるよし。けしきよし。こゝにて鶯のなくに、

よる波の声の中なる鶯もうちまぎれぬや春の海つら

小木津より一里半にて伊師町宿イシマチにいたる。この宿の左に大きな愛宕の御社おはしますがゆゑに、こゝをあたご宿ともいふ。安良川アラカハと高萩タカハギの両宿も宿つゞきにて、こゝまでいし町より一里なり。この高萩にて、ものなどくふ。この宿中に駒形明神・遥拝石あり。こは船人どものあふぐ神なりとぞ。高萩タカハギ戸村トといふには、中山何がしといふ人の城みゆ。赤浜村アカハマといふをすぐるに、椿の咲たるを、

よる波の花はしろくて色もなしたゞ椿のみ赤浜の里

それより矢指村ヤサシといふにいたる。

あづさゆみ春日うらゝに打かすむ矢さしのうらは波もさわがず

すこしゆきて左のかたに塩竈神社たかくたゝせたまひて、道のほとりにあけの鳥居もたてり。高萩より二里にて、足洗宿アシアラヒなり。

にぐるよによせぬこゝろもけがれけりわが足あらへ浦のしら波

このあたりまで、山といふべきばかりにはあらねど、けさよりして、坂いとおほく、みちいとあし。これを四十八坂といふよし。かならず、そのかずのごとくにもあるまじけれど、こはかずのおほきを、おほかたにいへるなるべし。

桜井村サクライといふをすぐれば、しばしが間、松原の木立をかしきあたりもあり。それより磯原の渡といふをわたる。

いそはらのいそがしげにはさをさゝでたゆたひがちにわたす川舟

川のむかひは磯原村なり。『常山文集』に「発磯原御詩」に「横路掲川流」とあるは、この川のことなるべし。

この村のほとり、右のかたに海にさしいでたる山のうへに、いとたかく、いらかことなる堂の見えて、ふもとに鳥居もたてるは、『桃源遺事』に見えたる天妃の堂にて、この神は皇国にはなき神なるを、この国のうち岩舟山といふあたりと、こゝとのふたところに、西山公の御時、まつらしめ給へるなり。里人も「天妃さま」となへて、船人は甚尊信すといふ。

もろこしにいつか来にけんやまとはしらぬ神こそこゝにましけれ

この山のたゞずまひ、たゞならぬに、平方・大津といふあたりの岬もとほくみゆれば、ことにながめあり。『常山文集』に、この海辺にて九月十三夜の月をみさせたまへる御詩見えたるをおもへば、月はさこそ、とおしはからる。

足洗より一里にて神岡宿カミツツカなり。仁町村ニマチといふをすぎ、栗野宿村アハノジユクといふにいたれば、その平方ヒラカタにいたるみちあり。そこには岩窟イハノツツなどありて、あやしきところときゝしかば、よらん、とおもへど、一里ばかりのまはりといふがうへ、空の雲あひも雨もよひなれば、ゆかずして、たゞに切通キリトホシといふにかゝる。こは名のごとく、岩山の中をほそくきりひらきたるみちにて、みあぐれば、岩もえかゝるがごとく、又くづれむとする勢ありて、今もかしらにおちぬべく見ゆ。「こゝを『なこそそのきりとほし』ともいひて、すなはち、むかしの関の跡也」ときと人はいへど、まことの関跡はこのちかきチカキにありて、こゝにあらざるよしなれど、今もその名のゝこれるにつきては、先、義家朝臣のうたおもひいでらる。

すてざりし詞の道の花たかく弓矢の外に名こそとゞまれ

みちもせにちりしきくらはむかしにて波の花こそかたみなりけれ

かの、はたぎくらのいひつたへをおもへば、義家ぬしは、そのむかしの関跡といふあたりをすぎたまへるなるべければ、奥州征伐の時は、この浜街道をかよひ給ひけん。されば、この街道も、ふるきみちなるべし。『ひたち帯』に、七人のひとゝともにこゝにあそびて、おほく歌よみつゝ、元禄十年九月廿六日、同遊八人と岩うちはらひて、かいつけしよしかけるも、はやく百卅四年のむかしとなれば、そのなごりもなきは、うつりゆく世のさま、あはれなるに、わがかくいふも、千年のゝちは又、かゝるたぐひならん、とあやしく袖をぬらしぬ。

このあたり海にちかく、かたへには小名浜コナハマの岬といふが、ながくさしいでゝ、ながめあるところなるに、をりあしく横雨しづき来たり。

ふりくるや雨をなこそその関ならばかく旅衣袖はぬれじを

そのかみのなこそその関はまつしまにゆくことしらぬ人やすゑけん

これにつけても、戸ツぎゝぬ御代こそありがたけれ。

こゝは常陸と陸奥の国キクダさかひにて、今ゆくさきは陸奥国菊多郡キクダなり、ときけば、うちつけにも、故郷とほくなれるこゝちして、はやくより、たゞとほきさかひとのみきける陸奥にもきたることよ、とそらをそろしきまでおぼゆ。

水戸よりこゝまでは、おほかた水戸家の御領なるが、他の国にはいまだみきかざることどもおほく、百姓どものすべてたゞしく、すなほにみゆるも、これ、はた義公の御余沢ならん、と感にたへたり。磯べづたひのみちとほく、関田宿セキダにいたれば、神岡より一里也。この宿の名も、なこそその関のなごりにや。

荒町村アラマチといふをすぎ、大島渡オホシマといふをわたり、大島村といふをすぎ植田宿ウエダにいたる。関田宿オカダより一

里なり。添野村といふをすぎ、真坂といふ坂にかゝるほど、日くれぬ。

をりあしく、風はげしくなりて、雨衣吹めくりなどするに、わびしともわびしく、かゝげたるはぎのさむさ、たとしへなく、この山は、けはしき坂こそなけれ、のぼりくだり一里なれば、たどくしさ、くるしくて、やうく渡辺新田といふにいたりぬ。植田より二里なり。

けふは、日くるとも、湯本までゆかんの心なりしかども、山路の雨風にて、身もこゝゆるばかりさむかりしかば、かく里にくだりては、にはかにものうくなりて、一步もすゝみがたければ、この宿の角屋なにがしといふものゝ家にやどらんとするに、このほど産婦ありとて、やどりをかさず。外にも二軒客舎あれど、それもさはりありとて、ゆるさず。さては、植田にかへらんには、かの山あり、湯本までは猶とほければ、せんかたなくて、村役人をたのみ、詞そへさせて、その角屋にやどりぬ。家居わびしけれど、すでに野宿もすべいきほひなりしかば、心おちゐて、はじめはうれしかりしも、後には心おごりせられて、夕げすゝむる膳部のそこなはれたるに、畳はくろくあかづきたるなど、いとほしくて、はつかひとよのことゝはおもへど、かゝるやどりは、たへがたく、あさましきまでにおぼゆ。すべてこのあたりの宿々は、あまりに錢をむさぼらず、かの『錢神論』にもかきもらしゝ人情なれば、かゝるふつゝかなることゝも、あるなりけり。このさまは、わが伊勢街道の人々にみせまほしきことにこそ。

山みちにて、はしたなく衣どものぬれしかば、炬辺によりて、ひとりあぶりほすにつけては、「春雨すらをまつかひにする」と口のうちにうちずんじられて、

花をまつ人はふるをもたのむべし旅にはわびし春雨のそら

さて、けふのみちにても、しばし馬にのりしが、はじめてのりしほどは心ゆるびはかりにもせざり

しかど、一日二日となるゝにつけては、おのづから心もなほざりになりけん、竹むらの中より犬のはしりいでたるに、馬のおどろきつゝ、とみにくるふまぎれに、ひたとおちたりしかば、とものをのがすこしおくれ来たるが、甚おどろき、顔の色も青ざめてはしりつき、「こゝちいかに」といひしが、何のつゝがもなく、すこしも身をそこなはず、神をいたましめざりしは、幸といふべし。諺にいふ「油断大敵」にて、まもりのなほざりなるより、かゝるあやまちもしけり、あなかしこ、とこよひおもひつゞけて、今さらをかしくもおぼゆるに、女郎花さけるあたりなりせば、うき名もたちぬべきものをや。おちたるもなにかしこまんあしなへて命またがる人もありしを

九日。猶、雨いさゝかふれど、雲の色あひよし。

昼野村ヒルノといふをすぎ、坂をこゆれば、白山御社、左のかたにおはします。この御社、守は非人なるよし、こゝろえぬことなり。この坂は、やへた坂といふ坂なるよし。このあたりに、菊多郡と磐前郡イハサキとの境の榜示あり。白鳥村といふには、松に桜のやどれるあり。湯長谷村ユナガヤといふにいたれば、内藤なにがしどのゝ館あり。

新田より一里十二丁にて舟尾宿フナオにいたり、こゝより十六丁にて湯本宿にいたる。こゝは名のごとく温泉ありて、三箱の湯といふ。宿の入口に湯神ユヅメの森といふがありて、鳥居たかく、御社も大きくみゆるは、『式』にみえたる「温泉神社〔磐城郡〕」なり。

宿をはなるれば、湯のたけといふが左にたかく見ゆ。その山には、薬師如来ましますよし。ちかくみゆる岩山には、観世音菩薩おはすとぞ。磐前郡と磐城郡イハキのさかひの榜示もあり。かみつゞら村といふをすぎ、みちのかたはらに、稲荷御社の大きながましませり。あたりの木立、のこらずやけたる

は、野火のためなるべし。しかるに御社鳥居つゝがなきは、御霊のいちじるきこと、たふとむべし。

このあたりに、左にたかく阿伽井が嶽といふ高山見えて、半腹よりうへに、しろくみゆる堂あるは、薬師堂なるよし。こは、くすしく、たへなる霊地にして、よごと海よりして、竜灯あがるよし。そを、がみにものするともがらは、いづこの国人にても、その寺に一宿をゆるすよしなり。われ奇をこのむ癖あらば必まうづべきに、奇はこのまざれば、こゝよりとほく御仏を、がみて、すぐ。その山には、湯本より三里、平より二里といふ。この竜灯のことは、長久保赤水が『東奥記行』にいみじくかきて、図をもいだせれば、めづらしき光なるべし。このあたりのさとびとは、ことに尊信して、罪障ふかき人は眼前に見ながらも、その光を、がむことかたきよしへど、他にてきけば、こはあらぬ光にて、月夜にはその光のまねなること、信じがたしといふ。されば、この光をむげにいひくだすは、造化のひろき工を、せばき人心にて、おしはかりきはむるの僻意といふべく、ひたもの信ずるは、奇をこのむと愚癡のふたつにおつべし。竜灯のためしは他国にもあれば、いひつたへをやぶらずして、竜灯といひて、信ずるにあらず、信ぜざるにあらざるこそ、おほやけにはあるべけれ。

御ミマヤ駅村といふをすぎ、尼アマノ子橋といふをわたる。このはしを長橋ともいふよし。長百間ありといふ。はしのたゞ中とおほしきあたりに、いとほそき小川あるのみにて、おほかたは田のうへにかけたるなり。こは出水の時は、その田にも水あふるゝによりて、かくはつくれるなるよし。よにめづらしきつくりぎまといふべし。

はしばかり先めにかゝる小川にてかとはみえぬわたりなりけり

そのはしをわたれば門あり。こは平宿ミトラの入口にて、安藤なにかしどのゝ城あり。よに磐城相馬といふ磐城は、この宿のことなり。宿中に、しようげん寺といふ寺ありて、ものさびたるに、糸ざくら咲

たり。この宿まで湯本より一里廿八丁なり。

こゝにてもものくはむ、とて茶屋に入たるに、飯はなきよしなれば、鮓あるをくひつゝ、炉辺にて茶をのむに、その炉中にて味噌をにるが甚あやしき香するを、「いかに」とへば、「こは、あんこのあぶらにて、ねりたるにて、味いとも美なり」とこたへたるも、あやしくて、あらぬさかひにきたらんこゝちす。

宿の出口にも門あり。すこしゆきて渡あるを鎌田渡カマダといふ。この渡に、かの尼子橋をかけたらましかば、似つかはしからむ、とをかし。川のむかひは鎌田村といふにて、このあたりより、天気よくなりぬ。

春雨のはれゆくそらを旅にてはかぞいろはともたのみけるかな

塩野村・中神谷村シホノなどいふをすぎ、下神谷村シモカベといふにいたれば、花園権現とまうすが、たゞせたまへり。中田村・はらごや村・こそや村などいふをすぎ、狐塚村キツネツツカといふにいたれば、稻荷社おはします。新田村ニヒタといふをすぎ、四倉宿ヨツクラにいたる。平より二里廿八丁といふ。すこし坂をのぼれば、磐城郡と檜葉郡ハとのさかひの榜示たてり。坂をくだれば田之繩村タノヅといふにて、又坂をのぼりてくだりたる村も、おなじむらなるよし。こゝに波立薬師ハツタツといふにゆくみちあり。これより磯づたひのみちにて、うしろをかへり見れば、その薬師堂ありといふ山は、海にさしいでたる山にて、すがたをかしき山なり。このうらづたひのみち、きのふすぎし、なこそそのあたりによく似たるが、けふは天気よければ、ことこゝろよくみわたさる。

一里にて久浜宿ヒサノハマにいたり、ものくふ。その家の主が「こゝよりさきは、『長すか』にて道あしければ、さきはひに、もどり馬もあり。かりたまへ」といふ。『長すか』といふは、何なるぞ」とへば、う

らづたひのみちを、このあたりにては「すか」といふよし、こたふ。ゆくさきの案内、たどくしき旅にては、そのところの人のいふにしたがふが、おほかたは、たよりよければ、その詞にしたがひ馬にのる。

金沢村カネガサハといふをすぎ、末続村スエツギといふをもすぎ、うしろ坂といふをこえて、かの長すかにいづ。この間一里十丁のうらづたひなるよし。げにも、はてなくみゆるすさきなるに、風いとさむく、空はくもりがちにて、日さへくれかゝれるに、一人もあふ人はなく、たゞ波の音をどろくしきばかりなるに、口とるをのこは、やうく十五ばかりなれど、高き山ともたのまるゝばかり、よくことになれつゝ、波のひまをうかゞひて、すさきをはしらせすぐるさま、大人もおよぶべからず、とおもはるゝほどなるに、をりには、馬のひづめぬらすこともあれど、それをもことゝもせぬさまにて、「久の浜にゆきたるかへさは、おほかた日ぐれがちにて、馬とわれと、いつもこの長すかをかよへど、すぐくもなし」とこともなげにかたりなす。げにも、よわたりは波風にもまさりてはげしきことよ、とおもひあはされつゝ、人の身はならはしものよ、ときへおもへば、あはれにて、かつは舌もまかれてなん。

長すかの末はをぐらくゝれそめて夕波すぐくあふ人もなし

あら波に駒のひづめを打ぬらす磯辺のみちのをそろしきかな

くれながら波のひかりをしるべにて火かげもなしに磯のへちゆく

折木村アキキといふに入て山にのぼる。いつもは、なほ浜辺をかよふよしなれど、「よべの雨にて、川水まさりたるあたりありて、こゝをかよふなり」といふ。あまりに風波はげしきをりは、うしろの山のうへをのみ、かよふみちもありとぞ。

坂をくだり、浅見川アサミといふをわたるに、はや日もくれはてゝ、なにとなくものがなしきには、

なみだにぞ袖もひぢけるあざみ川あさくおもはぬふるさとのそら

この川の末、水まさりて、ふかくなれるによりて、こゝにはまはりしなり。

あざみ村といふには、鹿島神社といふがまませり。こは『式』に「鹿島神社〔磐城郡〕」とみえ、『三代実録』に、鹿島大神苗裔神三十八社、陸奥国にましますよしみえたるうちの一社なるべし。されど檜葉郡は、『式』に見えず。こは、後に郡のふたつにわかれたるなり、とみる時は論なけれど、そのことたしかなる証なければ、式社ともあながちにいひがたかるべけれど、『三代実録』にみえたる一社には、うたがひなかるべし。

かくて、久浜より二里半四丁にて、広野宿にいたる。入口にすこし野ありしが、これより宿の名にはなれるなるか。この宿の間屋なにがしといふものゝ家にやどりぬ。家、甚大きく、次の間には例のいろりあれば、先それにて足をあたゝむるに、そのほとりに台子めきたる棚をかざりて、茶壺などおけるは、すべてこのあたりのならひにて、みやびたり。厨のかたには松明をたきて、男どもの、わらうづあみなどするは、かの「夜缸油尽点松明」といへるもおもひいでられて、中々にをかくおもはる。すぎこしみちに、田の中にいと大きな松たてたるがありしを、「いかなることぞ」とへば、正月に田の神をまつりて、このあたりにては、必たつるよし。こは、かくあるべきことにて、かた田舎に古風のゝこれるなるべし。

こよひ月朧なり。

ふるさとにへだてぬかげとながむれば涙もかすむ春の夜の月

へだてこし千さとの遠のおもかけをかすめてぞみる春の夜の月

君ならでしる人もなしおぼろげのあはれにあらぬ春の夜の月

江戸は、やゝとほくなり、仙台も又とほし。故郷よりはやく江戸に来たるをりくも十日ばかりの日数なれど、こは五日もすぐれば江戸ちかくなるが、さすがうれしく、心おちつくかたもあれど、仙台には何のゆかりもなければ、かく日々にとほくなりゆくが心ぼそければ、日にはいくたびとなく、故郷のことのおもひいでらるゝものから、さすが海山のながめにまぎるゝかたもあるを、よるはたゞひたもの、そのことのみおもひつゞけて、めもあはぬがちなり。

ゆくさきはおもふにあまる日かずにて夢路もまよふよるの床

あづさゆみやどにありてはいるがごとおもふ日かずもながき旅かな

たきすすぶ松のひかりも故郷をおもふこゝろのやみはてらさず

十日。日よし。宿をはなれて、又かぎりなきひろのなるに、かたぐ宿の名も、ことわりにおぼゆ。さはいへ、この街道はすべて、かゝるひろ野おほし。しばしゆけば、左のかたに八幡宮ましますに、さくらの並木ありて老木もみゆるは、花盛にあはまほし。又弁財天の御社といふもありて、これにもすこしさくらあり。右のかたに石にゑりたる観世音ぼさちもあり。木戸宿キドにいたれば、広野より一里なり。木戸川といふをわたり、北田村キタダ・井出村イデなどいふをすぐれば、風宮といふが左におほします。しげ岡の原といふをすぐるほど、きゞす鳴たり。

駒とめて草しげ岡にやすらへば道のべちかきゞすたつなり

雲雀のなくこゑも聞えて、をりにあへる春のさま、いひしらず。

カミ
上しげ村といふをすぎ、相生松といふめづらしき木あり。けいしんぼうといふあたりもあり。おほ
た村コホリヤマ・郡山村コホリヤマなどいふをすぎ、木戸より二里半トミツカにて富岡宿トミツカにいたる。手岡テウカ原といふあたりは海ちかき

よし。松の木立、よに似ずおもしろし。さかひ橋といふは、棚倉領と相馬領のさかひにて、わたれば相馬領なり。富岡より一里半にて熊川宿クマガにいたる。こゝを熊の町ともいふ。こゝにてものくふに、飯たらざるよしにて、いさゝかくひて、うゑをやしなふ。この宿をすぎ、又もながき広野をすぎ、山田村・前田村などいふをすぐ。

かの熊川より馬にのりしが、口とるをのこ、「なにがしのさとまでおくるなり」とて、よべよりここにやどり居し十三ばかりの少女をともしぬ。この少女、はないろ木綿の裾に、大きな模様をそめたるに、茜木綿のうらつけたるをはしをりて、そのをのこにかはりて口とりゆくさま、よくことなれて、をりくは馬をしかり行めり。女のさまのかゝるも、いとあはれなるに、その前田村に家ありとて、そこにいれば、老婆がまちえたるさまなるも、何となくうら山しきこゝちして、はた旅のおもひをそへたり。

熊川より二里にて大井宿にいたり、それより八丁にて長塚宿なり。こゝは大井と同宿のよしいふ。高草・高瀬カウノクサタカセなどいふ村をすぎ、高野宿カウヤにいたる。長塚より一里半也。こゝを波江町ナミエともいふよし。こゝは、すぎしとし、この宿に祝融のうれへありしより、よびかへたりとぞ。二百余年の御治世にて、所の名もおほかたにさだまりつゝ、千年のちまでうごくことなきやうになれど、かゝるためし猶ありて、古き名のかはりゆくは、かゝる名なきさとは、くるしからねど、もし名あるさとかゝるためしあらば、をかしからぬことならん、とおもふも、まことに益なき、なまものしりのこゝろなるべし。この宿にて又ものくふに、いそぐよしいひしかば、たちまち飯くはせつゝ、茶にはあらで湯をあたへぬ。「茶はなきか」ときけば、「いそぎたまふにより、茶をにるいとまなし」とこたへたるは、茶はこちたく煮るものなりとのみ、心えたるならん、といとをかし。

この宿をすぎ、赤松の大樹ばかりの並木ながくつゞきたるところありて、いとめざまし。この街道すべて並木おほきは、かくものさびたる街道に似ず、いやしくおもはれしが、この並木ばかりは、こよなくめにつけり。

白山ハクサンといふあたりにいたれば海見えて、ながくさしいでたる岬あり。そこは、うらぢといふあたりなりとぞ。またなにがしの観音薬師とかやにまうづる道しるべの石も、左のかたにたてり。

上浦カミウラ・岡田ヲカダなどいふ村をすぎ、高野宿より二里半にて小高宿ヲダカにいたり、江戸屋なにがしといふものゝ家をやどりぬ。こゝは、このほどの宿りには似ず、おなじくやどれる人おほくて、さはがしくうるさし。とにかく旅は心にまかせぬものなりけり。

高野宿すぐるほどより、いさゝか雨ふりしが、宿につくほどはやみしかど、そのなごり、空は猶くもれゝば、明日のこと心にかゝれり。きのふけふはいとさむくおぼゆれば、もしは天気ならんかと空だのみしつ。

十一日。よべはよくいねてしらざりしが、いたく雨ふりしよし、とものをのこがいへるもしるく、庭になごりをとどめたれど、空はなごりなくはれて、いと日よきは、旅には、あつらへつけたらんがごとし。

先この宿の妙見の御社にまうでん、とて宿りたる家のむかひなるほそみちにいり、すこしゆけば、左に貴布祢御社おはしまして、いとものふりたり。あたりに桜おほけれど、いまだけしきはみもせず。それよりはしをわたり、すこし坂をのぼりて、その御社にいたる。杉の木立いとものふかく、きのふのみちよりも、ものにまぎれず見えし一堆の岡山なれば、甚神さびたり。

御手洗といふも、この御社のかたはらにありて、水あせたれど、いさゝかくぼみたるあたりになごりあり。この水を紙にひたしおきて、馬のために身をそこなひし時、その紙をきよき水にうつして、そこなはれたるあたりをなづれば、かならずしるしありといふ。この神のことは、よに名だかくして、馬を御つかはしめといひ、五月中の申の日に御祭ありて、その日は野馬をこの社地におひせめ、そのうちひとつをこゝにてとらふるなるが、その馬どもは野馬にて、ことさらあらければ、その馬のために、あるは身をやぶられ、又は手足をそこなひ、ほとく心をうしなふにいたるもあれど、その人に、このみたらしの水をあむせば、たちまちもにかへるがふしぎにて、今はかくあせたるも、そのをりまでには、かならず水のいできたるも、又不思議なりといふ。

かゝせ男の神の光はいやたかく杉の木間にあらはれにけり

ともすればくるふ心の駒をしもまもれと神に猶やいのらむ

もとのみちをやどりにかへり、さて宿を出はなれて、つるかい村といふをすぎ、太田村といふにいたれば、又木ぶかき妙見の御社あり。この太田村の出はなれに門あるは、野馬いださせじとの門にて、これより甚ひろき原にいづ。中にひとすぢながき道あるをゆけば、野馬そこかしこにあそびて、色もさまざまなるが、鎌ヶ谷の原なるにかはりて、こゝなるはすこしも人をおそれず、たゞめのまへをすぐるもあるは、いとめづらし。さきにいへる、かの祭の時の馬は、この原の馬にして、神馬としもいひつたへ、かりにも人のとることをゆるさねば、かく人にもおそれぬなり。

そもその祭は、俗に野馬追ノマオヒといひ、祭の名をかりて、馬を敵とし、そをおひつゝ、いくさのまねびをなすにて、馬どもを御社地におひせめつゝ、さきにいへるがごとくにとらへ、そのあたひをいくらとさだめて、そをとらへたるものにあたへて、又その馬をこの野にはなつなり。こは治世に乱をわす

れぬ相馬家の政事、武道にては、いともたふとむべきことなれど、われらがごとくつよきをこのまず、よわきをたふとむ風流のかたには、あづからざるることなれば、そをめたしとほめたゝへむことは、なか／＼にはいかりあるべし。

この馬ども、冬は食物なきによりて、このあたりの村々より藁をおほく、この野に入るゝやうにおきてられ、病馬あれば、このあたりの村にていたわらせつゝ、まことにいたりふかく、領守よりさだめられたれど、馬の子を狼にとらるゝことは、いかにともしがたきよしにて、とし／＼狼にとらるゝ馬の子すくなからずといへど、おや馬はいと力づよく、狼も敵しがたしといふ。

かの鎌ヶ谷原なるは、とし／＼馬とりとて、公方様より馬をとる役人来りてとるよし。かしこをすぎしほど、かの宿にその役人やどり居て、ちかきにその馬とりあるよしなりしが、さては野馬てふ名のみにて、つひには人をのせ、あるは人におひつかはるゝ馬どもなるよしなれば、その境界安からぬかたもあるを、こゝなるはそのうれへなければ、いと安き境界なること、われらが身のうへによく似たりけり、とおもはるゝに、

つながれぬ心ひろ野にあそべるはわれにひとしき馬とこそみれ

この原の間廿四丁にて、名もしるき原町宿ハラノマチにいたれば、小高より二里半なり。小川橋・にひだ川橋などいふをわたる。このにひだ川には鮭おほきよし也。をのだ村・江垂村エタリなどいふをすぎ、又真野川マノといふ川のはしをわたる。真野萱原はこのあたりかとおもへば、そはことゝころなりとぞ。この川は鹿島宿カシマの入口にて、この宿まで原町より一里半なり。この宿に名もしるく、鹿島神社ましくゝて、左のかたの木ぶかきもりを、それなりといふ。

この相馬領にいりては、郡ざかひもさだかにしれる人なく、たゞ相馬郡と心えたるがおほきおもむ

きなれば、この宿にて老たる人たづねてとひたるに、「行方郡」^{ナメカタ}といへば、この御社『式』に見えたる「鹿島御子神社〔行方郡〕」なるべし。

よこて村といふをすぎ、並松の中をすぐるほど、

馬の耳も風をやしりしおどろきぬ松かさおつる並松のかげ

たちや村といふをすぎ、鹿島より三里にて中村宿^{ナカムラ}にいたる。

おとつひ・きのふ・けふは、さむきやうにおぼえしもことわりにて、このあたりはすべてさむきなるべし、梅などさかりにみゆ。きのふみちにてみし、さくらも、水戸あたりにてみしばかり、芽はふくらかならざりき。

この宿の入口に川ありて、こゝにも鮭おほきよし。秋になりて、おほくとれたる時は、価百五十文ばかりといふ。わたれば左に薬師堂ありて、ふるくみゆ。

いまだ日たかけれど、ゆくさは宿りよろしからず、よきあたりまではゆかるまじきよし、馬夫がいへば、かの新田宿のことにこりて、この宿の伊勢屋なにかしといふものゝ家にやどりぬ。こゝも例のいろりのかたはらに、台子めきたる棚、茶壺などを、ことにうつくしくかざりおきたり。

やどれるところは楼なるに、障子ばかりにて戸ざしなきを、「いかに」ときけば、「このさとは、おほかたかくのごとくにて、殿のまもりきびしきによりて、盗人はなし」といふ。戸ざゝぬためしとは、かやうのことをいふなるべし。よに警城相馬といふは、すなはちこのさとのことにて、このさとに相馬なにかし殿の城あり。されば相馬は苗字なれど、所の名の中村は、しる人すくなく、さきにもいふごとく、郡をも相馬とおもへり。この殿の政事は、もるゝかたなくよくゆきわたりたること、よにたぐひすくなきよし、かねてよりきけるが、この戸ざゝぬためしにて、げにとおもひしりぬ。され

ば、おのづからに民の心もしたがひ、なびくゆるゑにや、公へのうたへ文に「相馬国なにがし」とかきて、いかじなるよし御しかりをうけしことありしよし、きけることありしが、これらはみだりに国といふ字をかく、から学の人にきかせまほしきこと也。

「この家は、いかなることにて、伊勢屋といふぞ」ときけば、「先祖は伊勢の国白子の人にて、山田なる蓮華谷の開山となれる人」なるよし。「その時よりつたへたる御仏、今にありて、靈験いちじるし」といふ。「昔は武夫なりしも、このみて町人になれるなるよし、いひつたへたり」などかたるは、いとかしこき人なりけむ。

このさとのならひ、正月のはじめ三日の間は精進して、白きもちひをくはず、赤きをのみくふがためしにて、こは妙見尊、白きもちひくふことをきらひ給ひ、そをおかせば、かならずたゞりあるよし。こゝにてうまれし人は、他にゆきてもまもるよしなり。こよひ鰻をてうじいだせり。妙見尊信する人は、この魚をくふことをいむもあれど、このさとにて、かくてうじいだせるをおもひみれば、よりどころなきことゝおもはる。こはまたく、玄武の蛇のかたちに似たるをよりどころとして、えせ法師などやいひはじめけむ。世に「たちの」などいひて、「何はくはず」などいふは、おほくはこのたぐひなるべし。

十二日。日よし。宿りをいすこしゆきて、黒木宿クロキ又ははる町ともいふ宿にゆくみちと、たゞに駒峰宿コマガミネにゆくみちとあり。黒木宿のかたにかゝるが本街道なれど、そは駅馬とゝのふるためのみにして、それにまはれば半道とほしといへば、たゞに駒峰のかたに心ぎす。

かのちかみちかよふことは、このましからず、とさきの日おもへりしかど、さのみあやしきみちに

もあらず、ときけば、右にをれやゆきて、坂めきたるところをすぐれば、このあたりにては大海、入海となりて、いとちかくめのまへに見ゆ。

中むらの里たちいでけさくれば入海かすむ松のむらだち

石上村イシガミといふをすぎ、塚部村ツカベといふにいたり、本街道にいづ。この村を御境オサケイといひて、相馬領はこの村をかぎりにてはなるれば、すなはち仙台領也。

こゝより三丁ばかりもゆけば木戸めきたるところありて、鎗などをまへにたてたる、わらぶきの家あり。こは仙台領の入口の番所にて、いでいる人をあらたむるよし。「しかぐせよ」とよべの宿りのあるじがをしへしかば、名のらんとせしかども、障子とぎして人もみえねば、たゞにすぎつ。家つくりは木の丸殿めきて、よしめきたるに、なか／＼に名のりはせざりしも、をかし。こゝは駒峰宿コマガミネの入口にて、すなはち中村より一里半也。

こゝに寺ありて、糸桜一木たてれど、いさ／＼かけしきばみたるばかりなるにも、このあたりのさむさしられたり。

さかねどもなほひきとめてのる駒のみねはすぎうき糸ざくらかな

その馬はこの宿にてをり、又こゝにて馬をからんとするに、「銭でかるか、金でかるか」とたづねしがあやしくて、「そのゆゑいかに」ときけば、この国の銭は、たゞ領内ばかり通用の銭にて、べちに手形といふものさへありて、金をことの外によるこび、金にてかれば価甚安きなり。その銭は、かたちも文字もおなじことなれど、鉄にて、いといやしく、よに仙台銭といひて、角なるとはべちにて、よになべ銭といふにもことなり、九十六文にはあらで、百のかずにみてるを、百文とさだめたり。又この宿の制札には、そをつかさどる殿人の花押をも名の下にかけるは、よそにみざることなり。

小川村といふをすぎ、新地宿シンチにいたれば、こまが峰より一里なり。たてまへ村・高倉村タカクラなどいふをすぎ、しばしゆきたる山みち左のかたに、巨理郡ワタリと宇陀郡のさかひの榜示あり。上平村カミヒラといふをすぎ、しばしゆきて、みちの傍に木立いとをかしき松見えたり。きのふのみちにては、一里塚のしるしにもいと似げなきまで木立をかしき松見えしが、すべてこの街道は、をかしき松どもおほきやうにおほゆ。駒峰より二里にて坂本宿サカノなり。こゝより山みちがちにて、山下宿ヤマノへ一里半なり。大畑町といふにいたれば、家々の門に雁をかへるが、なく声かなしげなるは、かの「籠鳥の空をこふる」といへるもおもひいだされて、あはれに見ゆ。

横山町といふをすぎ、巨宿ワタリにいたれば、山下より二里なり。このあたりは村をも宿をも町とよなるにや、制札にいづれも町とかけり。

この宿の馬場ババやながしといふものゝ家にやどりぬ。家いときたなくむつかしげにて、壁のすきまより、もる風さむし。すべてものごとたらはず、食物の味よからず、夜のものゝきたなきなどをきらは、たゞ家にのみありて、旅せざるこそさるかたなれ、と常におもへば、旅にいでは、きたなきことも心にかけて、たゞたへしのぶことをむねとして、行李にをさむるものども、そのたび／＼におほくはなさず、すくなくなるやうにと心がけつゝ、はぶきがちになすばかり、旅には、なれたるものから、猶かゝるやどりはやすからず、諺に「かわいゝ子には旅させよ」といへるも、うべなり、とおもはる。

ことさらにふるさとこひし旅やかた一夜もちよのこゝちのみして

めもあはぬこよひのやどり故郷の夢のかよひぢなほやあれなむ

やれぶすまやどりわびしきひとりねの身にそふものはしらみなりけり

こよひ空くもれるは、例の心にかゝりて、

雲のいろ風の音なひめにかゝり耳にさはるもうき旅ぞかし

朝夕、とにかくおもはるゝは、天氣のことのみなり。

十三日。夜あくるほどめざめたるに、雨のおと聞えしかば、おきいでんもゝのうくて、又ねせんとしたるを、供のをのこにおどろかされて、しぶくおきいでたり。

けふの雨かこつはあやなこの日ごろ日和つゞきしなさけわすれて

とおもふものから、旅にて雨ふる朝けばかり、よにもものうくおもふものはあらねば、なぐさめかねたれど、さりとてせんかたなければ、駕籠からんにも心にまかせず、かちよりは馬のかた、すこしはまさりぬべし、と馬にのりていづるほど、空のけしき、たちまちかはりて、雨は雪となりぬ。春のことなれば、さばかりにはあらしを、とおもへど、猶やまず。

弓町・早川上町ユミヘヤカハカミノマチなどいふ村々をすぎ、あぶくま川の堤にかゝるほど、ますくふりまさりつゝ、

笠はおもくなり、足はわが身のものとおぼえぬばかりにさむけれど、さすがにあわ雪のしるしはみえて、木々にはおもふやうにもつもらねば、さむさをまぎらはすべきながめもなく、たゞくるしめるばかりなり。日ごろ、ことたらはぬにさへ、こうじたるに、けふは雪にさへあへるは、かの重荷にうは荷うつたぐひなるべし。けふの雪を、今一日のたがひにて、松島にてみましかば、あは雪なりとも猶をかしからむものを、とおもはるゝよ。かゝるをりは、たゞ机のうへにのみくらしして、雪月花の情、山水の趣を解し得ざる人こそ、なか／＼にかしこかりけれ、などもおもひめぐらされて、まげじだましひも、たへかねつ。すべて学をなすにも、さまざまの辛苦を経ずしては、事なりがたきもおなじこ

とわりにて、辛苦にあはでは、松島の佳境にもいたりたきなるべし。

松島の松にならばふる雪のふかきさむさもたゆべきものを

風流は益なきものゝやうなれど、その風流のために、かゝる辛苦をしのぎ、身をつむことのあるは、益ありといふべし。

ほどなく渡にいたり、船をまつほど、とみにいで来ず。むかひのきしは、かきくらしれば、船のいでくるもさだかならねば、ことにまちどほにて、雨衣は風に吹まくられなどす。歌によめる、あふくま川は、この川のことなれば、かの「佐野の渡の雪の夕ぐれ」てふうたのおもむきに、所はたがへど、さまはよくかなひたるを、歌によむ時こそ、雪もみやびたれ。かゝるなだかきあたりにてあひたるも、みやびたりとはいひなしがたく、たゞくるしきのみなれば、歌などよまん、とはかりにもおもはず。定家卿は虚よりして、实景をよみかなへ給ひ、われは实景をみて、虚なる歌も出来ず、巧拙のたがひははづかしくもあり。日光山には雪あらんか、とてこの街道をゆくさにせしも、猶雪をのがれぬこと、ふかき契なりけんかし、とかつはをかし。家にある時、雪の日に「わるいものふれり」と僕どものつぶやくをきゝては、さても不風流なることゝおもひしこともありしが、今おもへば、それのことわりはありけりとしりぬ。

やうくわたりはてゝ、むかひの岸なる茶屋にいり、地炉に足ふみのぼして、ぬれたる衣をあぶり、ほすほど、すこしく人ごゝちもつきぬ。この家は船人の家にして、船人がしろきものあたゝめてするを、「何ぞ」ときけば、「濁酒なり」といふ。

このたびは人やりならぬみちなればたれにかこたん雪のさむさも

時は今やよひの半ふる雪にあふくま川とおもひやはせじ

にぎりぎけたゞひとつぎのみかねて雪のさむさをえこそしのばね

かくよめるは、炉辺にてくるしさをわすれてのちのことなり。されば炉辺はなるゝはものうけれど、時うつるまでこゝにあるべくもあらねば、又馬にのりていづれば、

旅衣袖には雪のちりにけりふるさと今や花ざかりなる

ゆきなやむうさはしらねばけふの雪故郷人や花を見るらむ

などおもひやりて、かのあたりは、此ころこそ花ざかりならぬ、時候のたがへるものかな、とおもふほど、みちのほとりにて雲雀の鳴があるは、さすがにこればかり、春をしりけるものよ、とをかし。

なか／＼に空には雪やふらざらむ雲雀のこゑのたかく聞ゆる

されど、雪はます／＼ふりしきるを、からくして岩沼イハヌマの宿にいでぬ。亘より二里半なり。こゝは中街道と浜街道の追分にて、本街道なれば、こよなくにぎはし。

茶屋に入てものなどくへど、猶さむさはしのぎがたければ、旅衣のありのこと／＼きそひたれど、さらに馬上のさむさをおそれて、駕籠にのりぬ。この宿には、さすがに駕籠あれど、あやし／＼ふるびて、のるもこゝろよからねど、さむさをしのぐためにはいとよし。この茶屋の主にきけば、「三月になりて、かく雪ふかくふることは、このあたりにてもまれなることにて、十八年来見ざること也」といふ。

本郷村ホンゴウといふをすぎ、うゑ松村といふにいたれば、館越タテノコシ大明神とまうす神の御社おはしまして、こはいかなる神にましますにや、盗難をよくまもりたまふ、とてこのあたりの人々、遠近となく甚尊信すとぞ。

いの坂村といふは、花町ともいひて、桃の木おほけれど、花はまだしきほどなり。

もゝぞののうす紅はまだしくてたゞしろたへに雪の花さく

増田^{マシダ}宿にいたれば、岩沼より二里なり。ようでん村といふをすぎ、中田^{ナカタ}宿にいたれば、増田より一里なり。名取川をわたるとて、心におもふことあれば、

今こそあれつひにはたかき名取川身をうもれ木となしはてめやは

かくよめるを、かの昇^{ノボ}儼^{エン}橋^{ハシ}のはしらにおもふことかきつけしを、うらやみたるなり、とてあざみわらふ人もあるべし。

おほのだ・ぎるが・すわ町などいふをすぎ、広瀬川といふをわたり、長町宿にいたれば、中田より一里也。これより町つゞきにて、国分町へ一里なり。

この町の小畑屋なにがしといふものゝ家^{ウチ}にやどりぬ。こゝはげに名だかき仙台的城下のたゞ中なれば、さすがににぎはしけれど、おもひしよりは、よろしからぬ町づくり也。

こよひ故郷の文かきて、江戸までいだしぬ。

故郷にはやくかよふをおもふにはわがふみながらうらやまれつゝ

故郷のことやいかにとおもふかな日かずひさしくたよりきかねば

灯のもとにけぶりくゆらせつゝ、こしかたのこと、つくぐとおもひつゞけて、

ほどゝほくたちへだてゝは故郷も江戸もひとつにこひしかりけり

十四日。よべより空はれて、日いとよし。けふは日ごろ、たゞそのみをおもひし松島にいたる日なれば、いと心もすゝみぬ。

先、案内^{アンナイ}村といふにいたれば、名物の湯豆腐あり。びくに坂といふ坂をこえ、今市村といふにいたり、はしをわたれば左のかたに、青麻^{アヲマ}宮といふにまうづる道しるべの石たてり。こゝより三十九丁あるよ

し。こは中症をやむ人、願をかくれば、かならずしるしありといへり。『式』にみえたる「志波彦神社〔名神大宮城郡〕」もこのちかきあたり、左のかたにまし／＼て、赤の鳥居もめにたてれど、「名神大」とまうすばかりの御社ともみえず。

岩切村・南宮村などいふをすぎ、市川村といふにいたれば、入口に「つぼのいしぶみ」とゑりたる石のしるべありて、右のかたの山に、その碑の堂みゆ。このみちしるべは、南都の古梅園といふ商人のたてたる也とぞ。そこより二丁ばかりほそきみちを入、碑のもとにいたれば、碑はちひさき堂のうちにある。碑文はかねてすりたるをみしかども、真物を今みることに、甚めづらしければ、よく心とゞめてみるに、石のさま、祝融にかゝりしやうに見ゆ。あたりにちひさき寺あるが、この碑をまもれるよし。すべてこのあたり、昔の多賀城の跡にて、今もをり／＼古瓦をほりいだすことありとぞ。「つぼのいしぶみ、この碑のことにはあらず。こは多賀城の門の碑なり」といふ説あれど、そはなま学者の、おのが才をうらんがために「考」、あるは「論」などゝこと／＼しく名づけて、益なきことをしるすのたくひなれば、いづれにてもありぬべし、千載の遺物にうたがひなければ、珍重すべき碑なり。きのふの雪のまだらにきえのこりたるあたりのさまも、何となくよしあり。

しら雪のふりしむかしをしのぶかな千とせうもれぬ石ぶみのもと

たれもみな名をしたへどもみちとほみゝだりにみるはかたきいしぶみ

この碑はひとたび土中にうもれたりしを、仙台の城主、吉村の君の時、いたりふかき御みやび心よりにして、ほり得させ給ひて、ふたゝび世にはいでたる也。この君は御歌御画などよにすぐれ給へば、さることもありけん。いともたふとむべきことなり。

この市川村のうちに、奏社明神とまうすがましますに、まうづ。「塩竈明神にまうづる人は、まづ

この御社にまうでゝ後まうでねば、ねぎごとかなひがたし」とさと人いふ。御まへに糸桜あり。

この村をすぎ、並木の松の間より左に、白石が嶽・七つもりとて、山七つ見ゆ。白石が嶽は、きのふの雪にて、名のごとし。

仙台より五里にて、塩竈の御社にいたる。この道のりは、おもひの外ちかし。入口に下馬札たち、大きなる鳥居ありて、「正一位塩竈大明神」といふ額かゝり、石階甚たかし。そをのぼりて楼門を入、御前にいたるに、「左宮」「右宮」といふ額かゝり、別宮とまうすが、かたはらにたゝせたまふ。御社地は一堆の岡山にして、杉の木立ものふかく、よのつねならずみゆ。名だかき和泉三郎が灯笼といふは、石の台ばかりなごりをのこして、今は庫にをさめたりとぞ。鐘楼の鐘は「明応六年」とありて、ふるし。みまへにありし日時計ヒドケイといふものも、奇なるもの也。梅あるが、いまだひらかざるも、時候のおそきことしられたり。こゝにも大々神楽といふことあるよし、額のかゝれるは、いづこもおなじことゝなげかはし。

さてこのあたりまでのみちにて、手にうるはしきつくり花もてる女どもにあまたあへりしは、「いかに」ときゝしに、「こはこの御社に、すぎし十日に御祭ありて、その時もちひたるつくりばなゝりしを、この里にて、こひてかへりし也」といふ。その女どもは、おほかたは城下の人なるよし。さばかりまづしき人とみえぬも、つまはしおり、股引などはきたるは、さすがに鄙のさまをあらはせり、とけうとくぞ見えし。

かくて、このさとにて、ものなどくふ。このさとは遊女いとおほく、所にあはせては繁華ともいふべく、おもひの外にぎはゝし。城下には遊女なく、このさとにのみありて、城下の人々こゝにかよふには、馬にのりてかよふよし。かの「かちよりぞゆく君をおもへば」てふ、うたの意にもよくかなひ

て、中々にみやびたれど、今のよのさまにはうつらぬ鄙の風、わらふにたへたることゞもにて、女どの股引はけるも、さもこそとおもはるゝほどのことなれば、その遊女のさまもおもひやるべし。

かくて御釜オカマといふを拝するに、いがきの中に、かずは三つありて、いとふるくみゆるかまなるが、かたはらに御社もたてり。里人は「神代のものなり」といひて、さまざまのつたへをもいふ。

そこより、たゞに川のきしにいたり、松島にゆく船をかるに、船ちん五百文、島々の名をゝしゆる案内ちゃんは、べちに二百文なりといふ。先、姥がふところといふあたりをこぎいづるに、左に小黒崎オクロサキといふあたりあるは、むかし、みつの小島といひしところなるべし。

つとにせむ言の葉ぞなき人ならぬ島をいさともいはぬのみかは

籬が島は左のかたにありて、いと大きなり。こもいと名だかき島なれば、まづめとまる。このしまには鳥居たちて、としぐ七月六日に、明神の塩といふを、こゝにてくむといふ。

都までうつしゝ人もしほがまのあかぬけしきはしらずやありけむ

都にてはやくまがきの島はみきされどもかゝるけしきならじを

このまがきの島をはなるれば、海口うちひらけて、さまざまの島、見えそめたり。

船すぐるまがきのへだてうちはれてひとめにうかぶ千島もゝしま

又すこしゆけば、富山たゞむかひに見ゆ。こは、とみの観音といふがまします山にて、山のさまもたゞならず、いちじるくめにつけり。左のかたは岩きしをかしく、松のたゞずまひも、よに似ぬ崎どもさしいでゝ、ほとりには、かずぐの島ならびたちつゝ、右のかたにも崎どもさしいでたり。されば、このあたりの海は入海にして、いとあさし。あさきあたりは、おほかたは、きよからぬものなれど、おもひのほかきよく、あざやかにて、波はもとよりしづかなれば、かりにもあやふからず。

船のゆくにしたがひて、ひとつの島も、さまざまにすがたかはり、ひとつをすぐれば、又ひとついで来たりなどして、めうつりいとまなく、たゞ造化の大機関を見るがごとし。その島々におひたる松どもは、さばかりの老木も見えず、木立おほかた、おなじやうにおひそろひたるに、島のさまも猶おなじやうなる岩のさまにて、ちひさき島といへども、おほかたは松おひたるに、その松の枝ぶり尋常ならず。げに松島とよにみじくもてはやすも、うべなるかな。千島百島、みなわれをむかへて、わらふがごとくなれば、こなたよりもえみかたまけつゝ、ものもいはまほしくおぼゆ。

船人はみゝかしましくおもふまで、「これが何島、かれが何島」と島々の名をいへど、たゞみるめにいとまなくて、その名をもかきとめあへず、指もてかぞふれば、指たゆきまでにて、おびたゞしき島也けり。はやくより、この島のことはゆかしくて、さまざまの図をもみしかど、今おもへば、いづれも景色をあしくせるにて、絵にかきまさりするたぐひにあらず。この島を、清少納言にみせなば、かならず「さくら・なでしこの類」といふべし。されば、その図どもは、万が一ともいふべくはあらねば、わが筆にしるさば、そのたぐひならん、とはゞかりて、はぶきつ。

この島のうち、たゞひとつをだに、せめてはちかきあたりにうつして、みまほしくおもふのほか、ねがひもなし、と心のうちにおもひつゞけてゆくほど、はやくも福浦島フクラに船はてぬ。

島にのぼりてみるに、竹おほき島にして、この島の竹は、よにことなる竹なるよし、いと名だかし。洞水和尚といふがすめりし毒竜庵といふがあるよしきゝたれど、去年、祝融の災にかゝりしよし。そのなごりには、碑と「座禪石」とゑりたる石とばかりあり。この碑も汐風に文字はげて、よめがたし。

又も船にのりて、いさゝかこぎゆき、松島の里にいたり船をあがり、扇屋なにがしといふものゝ家にやどりぬ。しほがまより船路の間、三里なりとぞ。

(付箋)「堂は島の誤。」

このさとは家数おほからず、そのさま、塩がまにはこよなくかはり、甚寂莫たる地にして、俗気なし。よに名だかきところなれば、さぞ俗気あらん、とかねておもひしにたがひて、いと心にかなへるところなり。海辺ながら殺生禁断にて、魚肉にとほしきも、なか／＼にみやびたり。これぞ、ととりたていはん産物てふものもなく、たゞ松茸のみを名産なりといふ。このやどりたる家は楼づくりにて、その楼のまへは、やがて海なれば、みわたしいはんかたなければ、しばし欄干によりて、めをよろこばしむれど、さてのみにてもありがたければ、先、五大堂にいたりぬ。

この島にわたる橋ふたつあるが、よにめづらしきつくりざまにて、橋板の間をまばらにあげて、その間より橋下をのぞめば、みどりをたゞへたる海水あらは也。名のごとく五大尊を安置したる堂ありて、八幡宮もましませり。この堂のこと、橋のことともに、宗久が『都のつと』に見えたれば、ふるき堂なり。こゝより金華山もとほく見え、そのまへには、ふくら島・翁島などちかくみゆるに、まつよひの月、をりしもあらはれそめたる、たとへんものもなし。

この五大堂ちかき家に入て、ふくら島の竹のはしなどいふものをもとめん、とてこしうちかけたるほど、ふとみれば、いまだのぼりもはてぬ月の、かのはしの下よりみゆるさま、ことにをかし。

中々に島山ひきくうかみいで、橋の下よりのぼる月かけ

かくて宿りにかへり、ものなどくひ、又も欄干によりかゝりて月をみるに、又たゞにもありがたければ、又五大堂にいたりてあそぶに、よるのさまは、ことさらなれば、その堂の欄干にもよりかゝりて、傍なるびんつる尊者を友としつゝ、しづかにながめ居たるほど、金波いとしづかにて、いはんかたなきけしきなれば、やどりにかへり、船とゝのへさせて、御島⁺によせさせ、そのしまにあらがり、そこかしこみめぐるに、八房の梅といふ名ある木立、をりしもさかりにて、そこはかとなくほひつゝ、

甚よしあるよのさま也。

まつしまやをしまの月をしたひきておもはずたをる梅の一枝

見仏堂にこしうちかけて見れば、見月堂ともいはまほしく、ひるはわらふがごとく見えし島々も、今はねむるがごとくに見えて、いとしづかなるは、さるかたながら、かくばかり、をしとおもふよを、いたづらにねむれる島のうさよ、とわりなくうちかこたるゝかたもあり。

春の夜のならひ、かすむはつねなるに、こよひの月のいとさやかなるは、おもひまうけぬ幸にて、むかしより月の名あるのみかは、今里人の詞にも「松は、まがきがしま。月は、をしま」としもいへるこのしまにて、ほしひまゝにめをよろこばしむるは、うれしきちぎりなり。

おもひきやこよひの月を松島のをしまの松のもとにみるとは

花ざかりそはあらましのたがひきておもはぬしまの月をみるかな

春ながらかすまぬ月はこよひわがまつしまみるを空にしりけむ

うれしくも月あるところにめぐりきぬほどは雲の松がうらしま

^(音) 笹屋にはあらぬいほりもあれたるは月みんなためにせよとなるべし

とよめるは、松吟庵といふが、すめる僧もなく、いとあれて、戸ざしはしたなくあけたるまゝなるによりて也。

船人が「この島々の雪の景色は、おほかたくもりがちにて、さばかりならず。ことに、きのふの雪は春の雪なれば、松にかゝれるさま、見ぐるしかりしが、月こそ第一のけしきにはありけれ」とかたは、げにも、かの高き山ともたのまるゝ船人也けり、とおもはるゝよ。

又船にのりて、そこかしここぎめぐるほど、から国の賈島とかいへる人が、いつはりて梢人となりて、

『土佐日記』ニハ、コノ句ヲカナニテカケリ。コノ句、『詩人玉屑』卷十五ニアリ。「舡庄」トミエタレバ一字タガヘリ。

高麗人の詩の下句をつぎたり、ときこえし「さをはうがつ波のうへの月。ふねはおそふ海のうちのそら」てふ句をいひいでけん、『土佐日記』のむかしも、かくやありけん、とおもひいでらるゝよのさまにて、ふくるをもことゝはせねど、「汐ひくほどなれば、はやく汀につけずしては、たよりあし」と船人のいそぐに、せんかたなく汀に船をつけさせたれど、はやひがたがちになりて、船人はいとなやめり。楼にのぼり、なほそのなごりわすれがたくて、あかずも欄干によりて、夜ふくるまでも、み居たるを、供のをのこが「あなむやくし」といはぬばかりなるおもゝちなれば、さきへねさせて、ひとりおき居たり。

わすれめや月のみるめをかりとりて夜をさへかけし松島の波

十五日。日よし。よべより、そのころがまへして、あけぬまにおきいでん、とおもひしに、をりよく瑞巖寺の鐘におどろかされて、めざめたれば、先どもののこに戸やらせて、ふすまかつぎつゝ、ふしながらに見わたしたる曙のけしき、いはんもさらなれば、さむさわすれて、とみにおきいで、又欄干によりかゝり、煙くゆらせつゝ時をうつすほど、朝日はなやかにさしいでたるに、鶯はところゝに声聞ゆ。

まつしまやあかぬ千島の春しめてもゝよろこびの鶯のこゑ

よの歌人の景物とかいふことをいひて、例なき時は、よみあはすることをいめど、松島に鶯をよめる例なしとて、そのさまを見きゝながら、歌によまずはあらず。かゝる制をいふは、せばきことぞかし。朝いひくひ、又五大堂にゆく。きのふはたそがれ時にて、さだかならざりしを、けふ又見れば、堂のさまといひ、橋のさまといひ、甚みやびて、よくものふりたり。

それより天童庵といふを見、瑞巖寺にまうづるに、入口に杉の並木々ぶかく、法身窟といふをみて、本堂にいたる。堂のたてぎま、いとめでたし。庭に八房の梅と紅白の二木、よにめづらしきが、花さけり。本堂のふすまの画などのいとめでたきは、国守のゆゑよしある寺なればなるべし。こゝよりは松島のけしき、ひとめにみゆべくおもひしに、海はすこしも見えざるは、例のかねておもひしにたがへり。この寺のうちより右のかたにいで、をしまみちといふ石のしるしあるところより海辺にいで、すこしゆきて、よべみし、をしまにいたる。こゝにも橋ありて、そのはしうへよりのみわたし、島々みえて、いとけしきよし。

見仏堂・松吟庵・座禅堂などをみめぐり、頼賢碑をみる。こは寧一山の書にして草書なるが、手蹟すぐれて見ゆ。

よべは、さりともしらざりしが、けさみればこの島のうち、ところせきまで骨堂といふをはじめとして、墓碑、あるは俳人の碑などならびたり。五大堂のいりぐちにも、すこしはありしかども、かばかりかずおほくは見えざりしが、はなはだめにさはりて、にくむべし。俳人といふものは、風流の趣は、そのしなにくらべてはおもひの外よく解し得たるものなれども、みだりに碑文をたつるは、中々風景をうしなひて、よからぬことなり。いはゞ頼賢の碑も、このしまにはやうなきものなれど、こは古色もさすがになつかしければ、めにもさはらねば、たゞこの碑のみをのこして、外はとりすてまほし。さはいへ、『都のつと』に「誰となきわかれのかずを」といふうたみえて、此国の人の遺骨を、このしまにをさむる地となすよし見えたれば、そのころはやく、このしまはけがれけん。かゝる名だかき島にて、けしきさへ島々の中にすぐれたるあたりを、墓所としもなしはじめける古人も古人にて、あらたに墓碑などたつる今人も今人なりけり、とかへすくもなげかはし。

さて、この島に船をまはさせおきたれば、それにのりて富山のかたにゆくに、けふはすこしの風もなく、しかも空はれわたりに、いとこゝろよし。そのみちすがらも、猶これかれ島どもを見て、ばらさきといふに船をつけ、船人に案内させ、いとほそきみちを山にのぼりて、すこしくひろきみちにいづ。この山みちに、かたくりの花、いとほく咲みちたり。このあたりにては、この草の葉をもとりて、くふよし、船人いへり。

山をくだり、かまぢ村といふをすぎ、みうら村といふにいたれば、すなはち富山にのぼるみちあり。船路一里あまり、陸路一里あまりあり。

この富山は、たぐひなくよきところなれど、船をつくるには甚よろしからぬ山なるが、よにいふ玉に瑕にて、汐のみちひによりて、船のつけどころもかはるとぞ。

さて、その山の入口には、かぶき門ありて、「牛馬ひきのぼるべからず」てふ札をうち、すこしのぼれば、ことぐしき制札もみゆ。この山は、よそめにもしぐろき杉山なるが、坂路の左右は老樹の杉、ひるくらさばかりおひすごひて、その根あらはれたるが、たかくひくと足にさはりて、のぼりにくし。入口より五丁ばかりものぼれば寺あり。そのかたはらより、又すこし坂をのぼりたるところに二王門ありて、そのおくに観世音ぼさちのたゝせ給ふ堂ありて、いとものさびたるに、「護国宝殿」といふ額かゝりて、鐘は明暦の年号みゆ。一昨日の雪、そこかしこにきえのこり、糸ざくら一木あれど、いまだ冬木のまゝなるに、さむさおしはかられたり。

それより寺にくだり、「大仰寺」といふ額のかゝれる門をいり、「紫雲閣」といふ額のかゝれる小門より、書院の庭にいる。こゝより松島をのぞむさま、画にかくとも、筆もおよぶまじく、詞にもつくしがたく、天橋立を、はたちあはせたらんがごとし。このあたりにて、「松島の景はとみにあり」と

おしなべていふは、いかにも実によくかなひて、このことばを、げにもといふより外、この山の景は、いはんことばもなければ、土俗の俚諺よくつくしたり、といふべし。この山よりは、大洋もひとめに入海のあなたに見えて、景地いとひろく、めのおよぶかぎりは、たゞ海山と島とばかりにて、かくたかき所ながらも、田などのひとつもみえぬは、よにめづらしくおぼえて、かゝるけしきも又、世にはあればあるものか、とあきるゝばかりにて、身におはぬほどなる景色ともいふべし。絶景とよにいふ景の、俗にちかきたぐひにあらず、真の絶景とは、これらをやいふべき。歌よまんとすれば口つぐみ、たゞにやまんとすれば、かゝるあたりにきたるかひなきこゝちして、あふさきるさなり。

たゞ松島の景にこのかけたるは、幽邃の趣うすきばかりなれど、この山は幽邃にて、美景なれば十分といふべく、都とほき僻地の景は、おほかたすぐきびしきものなるに、いとをだやかに、花やかにして、都ちかき山のさまともいふべき趣あり。かく花やかなるによりて、幽邃僻地を愛する人は、「俗にちかし」といふもあるよしなれど、それはことをわきまへざるのかぎりにて、こゝはものすぐからぬをめぐべきことにて、俗臭おほきよの中の歌人にも、猶みせまほしきけしきなり。かの熊野の景の、するどにきびしきとは、げによき一對ともいふべけれど、くまのゝ景はきびしきにすぎて、からめきたるかたもあれば、貴人のめには中々につくまじきかたにもあるべけれど、こゝの景は、たとへていはゞ、檜もてつくれる舞台に金屏風たてつらねたらんやうにて、狩衣きたる人のたちておはすべきけしきなり。山にのぼりて海のみゆるを、たゞよきけしきとのみ、かたくなにおほかた人は心得たれど、こゝはまた世界異也とおもふべし。近江湖、あるは巨椋の入江を、から国にて、さしもいみじく聞えたる西湖によそへたるをおもへば、ひろきかの国にも、かばかりの景はなきものか。

さて、この山の景、坂路よりはすこしもみえずして、堂のほとりよりはじめて、いさゝか海を見、

書院の庭にいたりて、にはかに世界かはれるがごとく、うちひらけたるも、はた奇観なり。秋は富士山も見ゆるによりて、富山とも富春山ともいふよしをかたりて、住僧がもてなしがほに茶をすゝめなどしつゝ、「席料一人に十文なり」とてこふは、いと安し。二百余里のみちの苦をへてこゝにいたれるも、くちをしくはおもはぬものをや。

「むかひにとほくながきは相馬が崎、こなたにみゆるが大莉田山、出羽の国の最上山なり」などいひて、その外の島々をも「これは何、かれは何」と指さしをしふ。その出羽の最上山は雪いとしろし。かの国のことなどは、はやくより書のうへにてその国のことをみし時は、外国などのやうにとほきさかひとのみ、よそげにおもひ居しを、その国の山をしも、今日のまへにちかくみては、かぎりなくとほくも来にけることよ、と心ほそくおぼゆるかたもあり。

さても日本三景といふは、世の人のよくしるところなるが、われいまだ安芸の宮島をしらず。さきにいふごとく、天の橋立は去年見て、ことし又此松島をみるに、今いへりしやうに、その橋立を甘あはせたらんがやうなるを、こゝをいまだみざる人の、かの橋立とおなじつらにいひなして、さばかりのたがひなきやうにこゝろえたるは、遺恨なることなり。されど橋立・いつく島は、さばかりの辺鄙ならぬによりて、はたこのつらにかずまへられたるなるべく、容易の事なりせば、かく都にとほき辺鄙の景を、とりたて人のいふべしやは。さかひはかゝる辺鄙にありながら、三景の一といはれ、霊場などいふにもあらぬに、ふりはへたづね来る人どものおほきは、この島のめいぼくなるべし。

かのまつ島のさとは、いふもさら也。この寺も、俗塵にけがれず、清浄無垢の地なるは、もつとも愛すべき事にて、都ちかきあたりなりせば、いかに塵にけがさまじ。かゝる景を、かゝるあたりにしもつくりたる造化のしわざ、いとたくみなり。こは平地に人にみするをゝしむにもあるべし。熊野の

滝も、そのたぐひなりけり、とはじめてうたがひをはらせるも、心おそし。観世音ぼさちのこゝといひ、くまのといひ、はしだてといひ、よにまれなる雅地しめたまへるは、いつものことながら、げに妙智力といふべき御仏なりけり。

芭蕉が『奥の細道』てふ日記に、よく松島のことをかきしるしたれど、この富山のことのみえざるは、いといぶかし。こは、そのころは、この山をもてはやさざりしものなるか。

この山には、いつまで居たりともあきたるまじけれど、いかゞはせん、やゝ時もうつりしかば、たゞむとするに、われみすつれば、千島もゝしま、われをとゞむるがごとくに見え、かれにとゞむる心なしとみれば、こなたより見すてがたきを、かくはるゞきたる旅も、こゝをとほきかぎりにてくだれば、一步にても故郷にちかくなるかたのうれしきに、しひてまぎらして、本意なくも坂をくだりぬ。よにすぐれたる景色も、再遊せん、とまでおもふはすくなくけれど、この景しきは必、再遊せんのおもひあり。かくて、かへさは何のたのしみもなく、かの船とゞめしあたりにゆくほど、いとものうし。それより、たゞにしほがまのかたにゆくみちは、きのふの船路にたがひて、外どほりといふかた也。きのふのは内どほりといふよし。されば島々のさまも、きのふのさまにはことゞくかはりてみゆれば、さらにはじめてみるがごとし。塩がまよりくる時は、島を横に見、松島よりのかへさは、島を前にみる景となるよしなど、船人かたる。

かの殺生禁断なるゆゑ、魚鳥などのめのまへにうかぶもめづらしく、心をよろこばしめつゝ、けふは海無量寺といふに船をよせさす。こは磯辺より三丁あまり坂をのぼりたる山のうへにて、妙心寺派の寺なるが、本堂には「海無量禅寺福聚山」などいふがくかり、又すこしたかきところに、達摩堂と鐘楼とあり。こゝよりのみはらし、いとよく、島々はいふにおよばず、大洋までもみゆ。されど富

山にくらべては、百が一ともいふべきばかり。けしきせばけれど、島々甚ちかくして、海のかたち扇のごとくにみゆるが、ひとくさのながめ也。よりに俗に扇がたけとも、扇溪ともいふよし。富山みたる心おごりよりこそ、さばかりにもおもはね、なみにはあらぬけしきなれば、必のぼるべき山なり。「かへることをいそぎて、富山までゆかざる人は、この山にのぼりてみるがならひ也」ともいふ。

あふぎだにあふぎのぼりぬ松島の要ばかりのけしきならぬも

おもしろきけしきに又もあふぎ谷とやまのみとは何おもひけむ

しばしいこひて坂をくだるほど、谷水のおとの耳かしましきも、かゝる海辺にはめづらしきこゝちす。かくて又も船にのり、塩がまに船はてしかば、太田屋なにがしといふものゝ家にやどりぬ。いまだ日くれぬほどなれば、宿の妻にたのみて衣のほころびぬはせなどするに、「かたのまよひは」とうちずんじられて、故郷のことおもひいでらる。

さて、この国の金華山は、けふの船のうちよりもよくみえたりしが、その山にゆくには、かの富山より、たゞにゆくみちあるよしなり。その山は「すめろぎの御代さかえむと」と聞えし山にて、かねてよりゆきまほしくおもひしかども、その山にゆくみちは陸路は甚さがしく、船路は波あらきよし。ことに雪後は、かならず風ふく、としもいへば、一昨日の雪のなごり、かしこきのみならず、家に老たる祖母ある身にては、又二十里のみちを、ふりはへゆかんこと、さすがにすゝみかねて、こたびそのことおもひとゞまれるは、いと本意なかりき。

かく二百里余のみちをへだて来りては、くまのぢなどの旅はものゝかずにもあらず。みちの半に江戸のあることもさておかれて、故郷のこと明くれなつかしく、古稀にあまり給へるその人のこと心もとなくて、常にはいとすこやかにましますも、いかゞあらん、とあんじられて、さぞなわがおもふご

とく、わがことを心もとなくあんじ給ふらん、とおもひやり奉れば、重荷せおふよりも、みちすゝみがたきほだしにて、かの「とほくあそぶべからず」といふ聖語も、げにとしりぬ。かくいへば、賢人めかしてうへをつくりかざるやうに聞ゆれど、かりそめの旅にては、中々に妻子のなつかしきも、こたびのやうにとほくきたりては、妻子のうへはさてもありなん、とおもひすてがちにて、栄西禪師がもろこしにて、「もろこしの木末もさびし」とよみけんは、法師の身にてだにとおもへば、あはれにおもひあはされて、孝といふ文字の、おのづから身に具したるを、はじめてしれるも、心をそしや。旅にいでは、かく家のことをおもひ、家において旅せんことをおもふも、心にまかせぬ世なりけり。へだてゝは妻子のうへもさておきて老たる人のことのみぞおもふ

かの松島とならべいへる象潟の景も、ゆかしけれど、こはいにしとし、海溢のためにほろびて、今はひがたとされるよいいへば、こは金華山ばかり本意なくはあらず、桑田変海のならひ、はかりがたければ、名だかき海山は、一年もはやくさぐるべきことぞかし。

さて、こよひ月くもれるに、明日の天気いかならん、と心にかゝれど、よべならで幸也けり、とおもひなぐさめつ。

「かねて音にきける奥州浄瑠璃てふもの、今もありや」と主にきけば、「そは、今もありて、ちかどなりに、そをかたる盲法師すめるは幸也」とこたへつゝ、そをよびにやりしが、ほどなくきたりて、かたり聞するをきけば、今は三味線ひきながらかたるにて、琵琶はたえたるは、古風をうしなへるものから、文句といひ、節といひ、頗古雅にて、『奥の細道』にいへるがごとし。曲は「牛若奥州下」といふを二段かたりきかせたるが、いとよき文句どもありて、耳にとまれるに、こは牛若丸の旅することをつどりしなれば、客情しきりにうごきて、名手ならぬも、をりにふれては涙もこぼるゝばかり

(付箋)
「小野お通の作『十二段』
をかたりたるべし。」

なり。

からきよをわするゝ旅も家おもふ袖しほたれぬしほがまのうら

故郷は雲ゐのよそにへだてきて人だのめなるちがのしほがま

きのふけふの船ぢ、又は富山などにてよみすてたる歌ありしかども、こも又けしきをけがせるたくひなれば、そのまゝになしおきたれど、かゝるさかひに來たりて歌のなきも、よにすぐれたる人にては、なか／＼に心たかくも聞ゆめれど、かづにもあらぬわれらにては、ひたもの口つぐみしやうにおもはれんも、はたくちをしさに、こよひともし火のもとにて、おもひいづるまゝに、かいつけつ。

たれゆゑかはる／＼來たる旅衣あはれはかけよまつ島のまつ

ふるさとのこともしばしはわすられて立むかひたる松がうらしま

故郷にかへるをいそぐ心までうちまぎれたるまつしまの波

名もうれしわれまつ島が島々はわらふがごとくむかへがほなる

かねてより名を聞居りしこの島の松をやおしてしるひとにせむ

とし月をこひせし人にあたらしくあふこゝちする松がうらしま

今年まできてみざりけるおこたりをくゆるもおそき松がうらしま

うつしゑはさすがかたちの似るものを詞およばぬ松がうらしま

世にたかくひゞきわたるもさこそとはけふみてしりぬ松がうらしま

聞しにもまさるけしきはまれなるをよにめづらしき松がうらしま

けふきたる松がうらしまいくとせか夢のうちにはあそびなれけん

夢ならばさむなどぞおもふ年ごろのねがひかなひし松がうらしま

島ひとつすぐれば又も島ひとついでゝみるめのつきぬはしふね

はしふねのすぐるにつれてさまゞくにゑがきいでたる千しまもゝしま
かへるさをおもへばとほしいつしかとふるさと人やまつがうらしま

うかれみるけしきさぞなと家人もおもひおこせんまつがうらしま

まつしまよふるさとちかきものならばおもふことなきながめせましを

松島のけしきいかにと人とはゞふりはへゆきてみよとこたへむ

耳にきゝめにみぬ人はみちのおくにかゝるけしきのありとおもはじ

よの人のおもひたゝぬもことわりととほきにしりぬ松がうらしま

まつしまのながめしなくははるゞとみちのおくまでたれか来たらむ

一入の緑うらゝにうちかすみ霞色こきまつがうらしま

あさみどり松のはらゝにうきたちて霞をもるゝ千しまもゝしま

うらゝの春あでやかに松しまやちしまもゝしまかすみわたれり

さと人のいふもことわり松島のあかぬけしきはとみ山にあり

この山よから国ならばふもとはつりする人のあらましものを

もゝしまも千島もうかぶこの山の富はうかべる雲としもなし

もゝちしまゝばらにうかぶ入海のむかひにとほくみゆる大うみ

をのゝえもこゝにくたさんはたみぞとかぎらぬしまはあくごあらめや

まつしまのちしまもゝしまおしなべて矢立の筆にとりてかへらむ

十六日。日よし。このあたりの名所見む、とて案内者つれて、先、野田の玉川といふをみ、それよりトメガヤ富谷村といふにいたれば、おもはくのはし、紅葉山などいふありて、もみぢ山には、楓すこしなみたてり。

西行上人が「ふむをし」のうたを案内者がきかせたれど、さいふべき橋ともみえず。芳野の若清水をはじめ、そこかしこに、この上人のうたとて、人口に膾炙せるがよにおほく、かの大久保の田のもの、はだか島なども、そのたぐひなるが、こゝなるは、歌は『山家集』にあれど、橋は後人のつくりしと見ゆ。かゝるいひつたへのあるは、上人のため、心うきかたにもあれど、名所にかゝるつたへおほきは、風流の大徳ともいふべし。

やはた村といふにいたれば、末松山マツシヨウザンといふ寺ありて、うしろに小だかき岡山あるを末松山といひて、今は墓所となれり。松ばかりの山にもあらず、一木ふりたる赤松を、波こさじの松といふ。こゝよりは海へ半道もへだゝれるよし。桑田変海のならひ、はかるべからねど、さいふべき山にはあらず。

こゝにちかく、沖の井といふがありて、こゝは人家のうしろにあり。石はいかにも海中にありし石とみえて、このあたりには似げなき石なれど、沖の井としも、かならず名をさだめたるは、いかゞおぼゆ。

かへさは半よりみちをかへ、神の釜のうもれたる跡なり、とてちひさき鳥居のたてるほとりをすぎ、奥の細道といふにかゝり、町にいでたるところに、をだへのはしといふもありて、昔の街道なりといふ。今みめぐりし道は、一里あまりあれば、ゆきゝにては二里にあまれり。

この名所どもは、すべてうけがたく、とるにもたらず。末の松山・玉川などは、はるかおくにあるがまことなるよしにて、十府の菅菰も、このちかきにあるは、あらぬものなりともいふ。さはしりつゝ

も、例のくせにて見めぐりしは、われながらをかしくおぼゆ。おくの細道にて、

故郷のへだておもへばなにとなくおくのほそみち心ぼそしや

末の松山にて、

いつはりの名はたちながら波こゆるものともみえぬ末のまつ山

かくはよめれど、『都のつと』にしるしたる趣をおもへば、末のまつ山は今いふところとおもはる。さては、はるかおくにありといふ説は誤なるか。この名所どものことは、識者にたづねまほし。

このしほがまのさとより二里半ばかりもあるところに、松が浦島といふあたりあるよしいへど、松がうらしまといふは、まつしまのことにうたがひなければ、べちにうらしまといふあたり、あるべきやうなし。そこには老木の藤ありて、それも古歌によめる藤なりといふよしなれど、これらも、まつしまと、まつがうらしまと、こと所なりといふ証にはなりがたければ、後人のつくりまうけたる名所とおもはるれば、名はなつかしからねど、けしきよきあたりときけば、そのけしきはゆかしくおぼゆれど、さまでは、えたづねず。

かくて、けふも馬にのり、ゆくさにすぎしみちをすぐるほど、七つばかりにもみゆる童の、その母にみちびかれつゝ、あゆみくるをみて、

たゆけくも見ゆるわらしの足もとは小みちをいくらあゆみきぬらん

とよめるは、このあたりにては、小児を「わらし」といひ、「大道小道」といふことありて、よのつねにいふ三十六丁を「大道一里」といひ、六丁を「小みち」といふによりてなれば、今のよの陸奥歌とやいはまし。この大道小道のことは、俗説に、むかし六丁ごとに鐘をおきて駅鈴のかはりにせしことありといへど、そはおぼつかなし。されど六丁を一里といふは、古風なることにて、多賀城の碑文

の道法にもかなへるは、をかし。このあたりにきたりては、先この大小の道のことをわきまふべきことにて、ゆくさきのみちのことを、「今いかばかり」といふ時に、二里ばかりのところを「十里」などいふことたふるには、おもひたがへして、おどろくことあり。

かくて燕沢村なる善応寺といふに、さきによらざりしかば、立よる。こは案内村ちかきあたりにて、並木の松の左に木戸門ありて、又並木の松を一丁ばかりもすぎ、寺にいる。梅の木立おほく、花さかりなり。こゝのみならず、さきにもいふごとく、この国はこのころ梅の花さかりなり。われこの二月七日に、武蔵の杉田の梅見によりしが、はや盛はいさゝかすぎしほどなりしをおもへば、こよなきたがひ也けり。

この寺はいともさびて、よはなれたる寺なるが、こゝに燕沢の碑あるよし、かねてきゝたれば、そのことをたづぬるに、「この寺のうちにあらで、びくに坂のほとりにあり」といひて、をしへやうもさだかならず。あとに六十丁かへらでは、あらぬやうにいふ。かくをしへやうのさだかならざるは、この碑、今も「こんの碑」といふは、蒙古をあやまれるにて、この碑たてたるゆゑよしのきたなきによりて、人に見するをはじかるなりとぞ。さようにはじかるは、いとうべなることどもなれば、かりにもたづぬべからぬ碑なるを、好古の癖よりして、きたなきゆゑよしをわすれて、たづねむとせしは、われながらあやまてりと心づきて、おしてはたづねず。

大路にいで、原町といふあたりより、案内者つれて左に入て、宮城野にいたる。萩の古枝どもいとおほきは、名だかき萩なるべし。鈴虫もこの野なるは、声ことなるよしなり。野原はさばかりひろからねど、めのおよぶ田づらはいとひろければ、むかしはみな野なりけん。むかひに木立しげく見ゆるあたりにいたりて、木下薬師といふにまうづるに、こはこの国の国分寺なれば、堂のつくりざまも

のふるく、殊勝に見ゆ。この寺のほとりに老杉の並木ありて、甚ものふるくみゆれば、こはむかしの大路のなごりにて、木下露といひけんも、こゝのことなるべく、それよりして木下薬師としもいへるなるべく、かの原町てふ名も、宮ぎのゝ原といふより、いでたるなるべし。

日をおほふ木下道はなか／＼に笠ぬぎてゆくみやぎのゝ原

原町よりこゝまで十八丁にて、こゝより十丁ゆきて釈伽堂（題）といふにいたる。こゝは、むかしつゞじが岡といへるあたりなるよし。今は、つゞじはなけれど、糸桜・彼岸桜の大樹甚おほく、いづれもよにまれなる木立にて、並木ふたつらにながくつゞきて、かねてより釈伽堂（題）のさくら、とよに名だかく聞しにもまされるあたりなるを、たゞうらめしきは時候おそく、一花もいまださかず、中にいさゝかけしきばみたるが、すこしみゆるばかり也。さかりには、町のうちゆすりて、みる人おほきよし。寺はさばかり大寺ならず。名のごとき釈伽堂（題）ありて、そのほとりに木蓮花の大樹のめづらしきが、いとおもしろく咲たり。

まことにこのところは、春のころの遊どころには、うへもなきあたりにて、芝生のひろきもみえて、いとあでやかなる境なるも、なほ氣候たがひて、かく花のおそきをおもへば、げにも辺鄙なりけり、とおもふにつけても、はたとほくきにけるよ、と心ぼそく、ふるさとは、このころや花ざかりならんとおもひやれば、心あへる友どちと、去年みしことおもひいでられて、なつかしきに、この春も、その人どもはうちつれだちて、そこかしこの花みつゝ、わがことをもおもひいづらんなど、おもひつゞけて、なつかしむべき境はあらぬ故郷の花も、なほなつかしくおもふが、旅のならひなるべし。

それより、たゞに国分町の芭蕉が辻といふにいづ。その間、廿丁あまりあり。この辻には、俳人ばせをが名をかくのこしたるはあやしく、はた家のつくりざまも、よにことなり。

かくて、ゆくきにもやどりし小畑屋ながしといふものゝ家にやどりぬ。こよひ、このさとのますや何がしといふより、酒肴をおくりこしたり。こは、なりはひのことにつきて、すこしのゆかりある家なれば、けふとぶらひたるなるによりてなり。わが心には、かなはざるおくりものなれど、かくとほきさかひにきたりたるに、名をしれる人ありて、かゝるものめぐまれし情は、いとうれしくおぼゆ。さてこのさとは、大年寺ダイネンといふ黄檗宗の寺ありて、国守のゆゑよしあるによりて、莊嚴美々しいひ、その外にも、めでたきつくりざまなる寺社ありといへど、美々しくめでたきたぐひは、わがこのまぬところにて、おほかたはものさびたるを愛すれば、たづねむともせず。これらは俗人のよろこぶべきところにて、俗人のよろこぶあたりは必、吾輩の心にはかなはぬものぞかし。

陸奥日記卷中終

陸奥日記 卷下

十七日。日よし。国分町をたつに、ゆくきは松島ちかくなるをよろこびしが、今朝は又、故郷のかたちかくなるが、さすがよろこばし。そのみならず、年ひさしくこひねがひしかど、心やすからぬ旅にて、えはたさざりし松島の遊を、ことなくすませしうれしさへそひて、心もいさみつ。

つき／＼に町をすぎて、あら町といふにいたれば、左のかたに、ぶつげん寺といふ法華宗の寺ありて、この寺の中に遊女高雄の墓あり、といへり。こは、よの人のいふところにはたがへれど、この国の人、真葛といふ女のかける『奥州ばなし』といふ書のつたへにあへれば、こはまことのはかなるべし。

かくて又、名取川をわたりて、そのつゝみを右のかたにのぼるほどのけしき、山々ちかく見えて、をかし。いせきの波の音たかきには、「木の葉やいとゞよりてせくらん」とうちずんじらる。この堤にも、かの初紫の花おほくさけり。

やゝのぼりて、やなぎ村といふをすぎ、くまの堂村といふにいたる。このあたりの山に熊野権現ましますとぞ。たかだて村といふには那智権現もましますよしにて、鳥居たてり。やゝゆきて今熊野権現社といふもまませり。かく、くまのゝ御社どものこゝにましますも、ゆゑよしあることにや。去年くまのゆきしことをおもひいでゝ、

わすれては今年を去年とたどる哉くまのゝやしろめのまへにして

又すこしゆきて、みちの右に十一面観音堂ありて、鳥居のたてる杜あるもめづらし。名取川より一里あまりにて、塩村といふにいたれば、佐具叡社とまうすがましくて、彼岸桜・糸桜などの並木あり。御社はそのおくに、「佐具叡神社」といふ額かゝれり。こは『式』にも「佐具叡神社〔名取郡〕」と見えたり。

この御社のかたはらなる山に、いとほそきみちあるをのぼりたる所に、杉の木立どもおひめぐりて、その中に実方朝臣の墓あり。いさゝか小だかくつきあげたるが、すなはち墓じるしにて、かたはらに「中将

実方朝臣墓」とおもてにゑり、かたへには西行法師の歌をゑりたる碑たちて、ところのさまものさびしく、

あはれなり。こは中将の墓とたづぬれば、このあたりの人、あまねくしれり。そもこの中将のことは、行

成の冠を投すてけることよりして、この国にさすらひのこと『古事談』にみえたれど、花山天皇のたまは

せける御製をおもへば、うたがひなきにあらず。まして笠島の神のことは、たしかなる書に見えねば、後

人の附会なるべし。されど、この国にくだられしことは、その御製にてもしられたるに、西行法師が、く

ちもせぬその名ばかりをとどめおきて、「かれのゝすゝきあはれとぞみる」とこの墓にてよめるうたしも

あれば、墓もまことの墓なるべし。今の世まで、かくそのあとのゝこりたるは、せめてものことながら、

雲井まぢかくつかへし人の、かゝる野原の土となられしこと、かなしむにたへたり。

天さがるひなに千とせもすまんとはおもひいでし都ならじを

今は又すゝきも見えずうらさびてつちくれのみをかたみなりけり

あはれてふ言の葉ながらもその名をよゝにとどめけるかな

桜の並木のかたはらをみちにいで、むかひの山にのぼりて、塩薬師といふにまうづるに、「塩薬師」と

いふがくかゝりて、ものさびたり。こゝに、みたらしといふありて、今もしほのみちひあるよし。こは、

このあたり昔は、海なりしかば、笠島をはじめ、島と名つきたる村おほく、あたりの山には、かきからも

ありといふ。この山のしたのかたは平地にて、海につゞきたれば、さもありけんかし。

それよりほどかく笠島村にいたり、道祖神にまうづ。甚大社にて、ものさびつゝ、杉の木立もかう

ぐくし。前には彼岸桜の木立おほけれど、例のいまださかず。かくて、畑の中のみちを岩沼宿にいづ。

『新後拾遺』離別

実方朝臣ミチノクニヘ下
リ侍ケル時タマハセケ
ル、

花山院御製

ナニゴトモカタラヒテコ
ソスグシツレイカニセヨ
トテ人ノユクラン

さて「この道祖神にもうづるには、増田宿よりいるが本道なれど、そはいとほければ、名取川より入るがよし」と、けさ宿りの主がをしへしかば、そのをしへのごとくして、みちすがらも、とひもてこしかども、とはん人のみえぬあたりもあり、又はおもひくまなき人どもの、をしへやうのなほざりなる里人のわがかよひなれたるをのみ、ひたぶるちかきみち、とおもひたがへたるをしへやうなどにて、なか／＼にみちをまよひ、ことの外にとほくぞおぼえし。されば、かさ島村より、この宿までの間、村どもありしかど、その名をも聞あへず、たゞいそぎにいそぎしが、かの塩村よりは、二里あまりの道とぞおぼえし。みちまよはずは、今すこしはちか／＼らんを、とくちをし。ちかみちてふものは、かよふまじきもの、ともとより心得たれど、旅にては、とにかくながきにうみて、いさ／＼かにもちかきあたりより、とおもふ心より、猶こりずまに、かゝるふつゝかなることをもしけるなり。

この宿にて、ものなどくひ、さて竹駒稲荷神社とまうすが右のかたにおはしますにまうづ。こは十四日にまうづべかりしを、雪にてけふになせるなる。神社はちかきころ、回祿の災ありて、かりの社なり。

この御社のうしろのかたに、武隈の松といふがあれど、さばかりとしへたる木ともみえず。こは能因法師・西行法師などの歌に、たえたるよしをよみたれば、むかしたえたることうたがひなきを、そのうち、又もうゑつぎしは、たれしの人のしわざならん。松は、そのかみにはあらずとも、竹駒は武隈をよこなまれるなり、とおもはるれば、さすがにその名のなつかしからぬにはあらず。

武隈の松はこのたびさかえけり千とせへぬまにわれやきぬらむ

この宿をはなれ、しばしゆきて左のかたの山ぎはに、東平王墓トウベイといふがありて、墓づくりいと古きよのものを見ゆるに、墳じるしの松、三本ありて、その枝さし、西のかたにのみかたむく、といふ。この墓のことを『都のつと』には、『とうへいわう』といふ唐人の墓なり」として、「つかのま

コノ松ノコト、『袖中抄』
ニモクハシクミエタリ。

『本朝文粹』卷三。

松竹策

東平王之思旧里墳上之風

靡西

『經国集』卷十四。

五言奉試得東平樹

東平靈感木傾影志非空

への草木もみな西へかたむく」といひならはせるよしをもしるしたれば、ふるくより、かくはいひつ

たへけむ。されど東平樹のことは、から国のふるごとなるよし、『本朝文粹』『經国集』などに、その名はやくみえたれば、さる人のほか、こゝにあるべくもなし。こは、そのことのおのづから似かよひたる何がしの墓なりしを、つひにかくいひつたへたるなるべし。

「ゆきゝの人の詩歌など、あまたかきつれたり」と、かの『都のつと』にみえたれば、われもふところがみとうで、墨斗の筆かみしめして、一首をしるしてあたりの木にむすびつく。

つかのうへの木の枝なびけり故郷をおもふ心や千とせかはらぬ

このほとりに千貫松といふもあり。

さて、このあたりのみちは並木つゞきにて、左には、あふくま川ながれてながめあり。この川は、いと大川にて、九十九滝おちあふよし。最上川・北上川などは百滝おちあふゆゑに、上の字をつけたれど、この川には、かみの字なきゆゑ、この川をわたる時は、よその大川のうわさすることをいむとかや。

岩沼より二里にて、槻木宿ツキマキにいたる。こは、宿はづれに大きな槻の老木あるによりて、かくいふとぞ。又、熊野神社おはしまして、いと木ぶかきもみゆ。この槻木より一里十一丁にて、舟廻宿フナバサマにいたる。朝寝村アサネといふを右にみるは古城跡にて、こゝは正月元日に朝寝せずしては、たゞりあるよしにて、かくはいふとぞ。

舟廻より一里十五丁にて、大川原宿オホカガハラにいたり、高山屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。この宿のあたり、彼岸桜のさかりにさきたるは、すこし時候のかはれるものなるべし。

さて『都のつと』には、あふくま川をわたるやうにかけれど、けふはわたらざりき。こはむかしの街道と今の街道とは、すこしたがへるなるべし。

(付箋)

「どくろを馬の足にかけたり。辺鄙のさまおもふべし。」

十八日。日よし。浜街道にては、朝げの用意とみにとゝのひがたく、あけはなれてのみたちしを、この街道にては、たよりよく、はじめてよふかく朝げくふに、門のかたさはがしく、馬ひきすぐる、すゞの声など聞ゆるも、浜街道になきおもむきなり。

馬にのりて宿りをはなるゝほど、有明の月さやかなるは、「馬上続残夢」てふ、からうたおもひいでらるゝに、それを翻案して、芭蕉の「残夢月しろし^(ママ)」といへるは、口かしくこそありけれ。歌人は俳人を、かすならぬものゝやうに、むげにいやしむれど、さはいはれまじきものを、などいたづらごとおもひつゞけてゆくも、をかし。あやふくはあれども、馬にのらざりせば、かゝる景情はしらじものをや。

おきて来し駒のたつかみ霜みえてさえのこりたる有明の月

袖しろくきらめく霜の色さむしめにはみえぬをいつふりにけむ

いまだあけはなれぬに、鶯・雉子をはじめ、ひばりの声、とりぐ聞ゆ。

明そめて山の端ちかき月よりもうへにあがりてなくひばりかな

はじかりの関の跡を馬夫にきけば、「そは街道より、すこしへだゝれり」といふ。このあたりの馬夫は、おほかたはよく名所などをしりて、普通の文字は解したりとみゆ。「輝井高直^(題)といふ人の墓も、かしこなり」と右のかたをゝしへ、そのあたりの山に、遊女何がしの墓もありといふ。

大川原より一里にて、金瀬宿^{カサガセ}にいたれば、宿中に大高宮といふにまうづるみちしるべの石あり。いまださかざれども、桜の並木などあるあたりをすぎ、猶ゆきて、まつ川といふをわたり、荻田宮宿^{カツタミヤ}にいたれば、金瀬より一里十二丁なり。

この宿は、宮とのみいへど、まことは刈田宮といふよしにて、白鳥神社といふがおはしまし、きのふは

祭なりしよしなるが、「こは用明天皇の皇子の、しかぐのゆゑよしありし跡なり」といへど、うけられず。されど、白鳥はおほくむるゝことありて、神のみつかはしめ也、とこのあたりにて、うやまふよし也。『式』に「菟田嶺神社〔名神大菟田郡〕とみえたるは、かの大高宮なるよし。菟田山といふは、富山よりもみえし山なるが、このあたりよりは、いとちかく、雪しろし。』その山に神社ありや」ときけば、「なし」といへど、嶺とあれば、むかしは山上にありけんを、後にふもとにうつせしなるべし。そのためし、よにおほければ也。菟田宮と宿の名にあるをおもへば、式社はこの白鳥宮なるか、ともおもへど、大高宮もその山に遠からねば、里人のつたへにしたがふべし。

この宿をすぎ、かまさきの湯といふにゆく道のしるべ左にありて、子すて川といふ川あり。これも白鳥宮につきたるいひつたへあれど、うけられず。

このあたりをすぎ、おもしろき松どもつゞきたるあたりあるに、木間より菟田みねの雪、しろくめにかゝれる、いとよしあるながめなり。

よそにのみおもひし山をけふばかりたゞまぢかくもみてすぐるかな

白石川シロイシをわたり、白石宿シロイシにいたれば、菟田宮より一里廿三丁なり。こゝには、このあたりしる片倉何がし殿の城あり。

馬士こゝにて、わが家に入てものくふ、とてわがのりたる馬は門につなぎおきたるに、ばくる馬、とておほくつなぎあはせてうりにいづるが、門ちかく引きたるをみて、はしもそのまゝにうちすてゝ、はしりいでつゝ口とりて、その馬どものさきにすゝむを、「いかに」ときけば、「この馬、まけじだましひある馬にて、おくるれば、たけびくるふによりてなり」といふは、そのみちぐにて、よく心をもちひたるものなり。

やゝゆきて、並木の松の中に、ふたところ石をたかくつみたるところあるは、昔何がしの宮居ありし鳥

居のあとにて、そのなごりのとどまれるのみ。その宮の名もしる人なしとぞ。

白石より一里十五丁にて齋川宿サイガハにいたる。あたりにさい川といふ川ながれて、孫太郎虫といふ虫、その川にすむよし。こは、このところの名産にて、をさな子の病にはよき薬なること、よの人のよくしるところなり。

この宿をはなれ、坂の入口左のかたに鳥居たてるは、故将堂コシヨウといひて、甲冑堂也。この堂のうちに、嗣信・忠信兄弟の妻がよろひかぶときたる像をおきたり。

ならびたつよろひのすがたあはれなりかへらぬ人をおもかげにして

この坂を長坂とも、あぶみずりともいひて、その名のごとく、馬のあぶみするまで、大岩ども左右よりさしいでたり。

あぶみかけわれはのらねばはたご馬くらすり坂といふべかりけり

こは、はつかの間の坂なれども、馬のなやむことは、その毛色もとみにかはりぬべくおもはる。

五賀村ゴカといふをすぎ、齋川より一里半にて越河宿コスガにいたる。

こゝにて、まつだや何がしといふものゝ家に入て、ものなどくふに、この家の老婆百一歳なるが、いとすこやかなるは、めづらしくもうらやましくもおぼえて、家なる祖母もあへたまへ、と心にねんじらる。

この宿はづれに駒峰のごとき番所ありて、こは仙台領の人を他にいださせじ、とあらたむるよし。両刀を帯すれば、馬にのりてかよふもくるしからず、といへど、他の国に入ては、その国の守のおきてにしたがふがよかむめり、と馬よりおりてとほるに、駒が峰のごとく障子なければ、守人あらはなれど、いこがめぬは、両刀をよこたへたれば也。われ両刀はもとより、一刀をだも横たふることは、商人におはぬことゝおもふから、凶器といみきらひて、常には身につけざれど、旅にては、人めおどしに横たへずしては、甚

たよりあしければ、いつも腰おもく、はてはいたくなるをものびて帯すなるが、けふははれをしけるもをかし。

この宿をはなれ、仙台と伊達との領境の榜示あるあたりをすぎ、左のかたに、下ひもの関の古跡といふがありて、松しげき小山也。里人は、「下ひぼの関」といひて、用明天皇の、下ひぼをおとしたまへるから、かく名づけたるなるよしいふは、『風土記』のつたへめきたれど、白石といひ、このところといひ、用明天皇の御事をいひつたへたるは、いぶかしくて、いとうけがたし。

越河より廿六丁にて貝田宿カイダにいたる。この宿の氏神祭なりとて、あたりのさと人、われはがほに、きそひかざりたる袖の色あひの心々なるが、うち見はいとふつゝかなるを、ほこらしくわれはがほなるが、中々あはれに見ゆ。

世に名だかき伊達の大木戸といふは、まる山といふ山の下をいふにて、木戸はなし。されども、こゝよりは銀山ギンザンあるは、小富士などいふ山みえて、みはらしいとよく、大国の景情をよくそなへたり。国見神社とまうすも、ほどちかくたゝせたまひ、義経腰掛松といふが、やけたるあと、弁慶が硯の水といふも右のかたにあり。柳川といふあたりは左に見え、相馬の山々も、とほく左のかたに見ゆ。

半田村ハンダといふをすぐれば、かの銀山ちかくみえて、その山の半腹に家居もみゆ。この山は名のごとく銀ほりいだし山なるよし。「金花さく」としもよめりし国なれば、銀ものあるも、いとよりのことなるべし。この村に益子神社と申もおはしませり。

貝田より一里七丁にて藤田宿フジタにいたり、その藤田より又一里七丁にて桑折宿コザリにいたる。この宿の名もそらごとならず、このあたりは、こがひする家おほきにやあらん、すぎこしみち桑田いとおほかりき。この宿より、行李は福島のかたにたゞにやり、案内者つれて佐場野の古跡をたづねんとす。「けふはみ

ちとほくして、そこにまいらば日もくれなん」と案内者がいへど、又の時のことゝなほざりになすことは、古跡たづぬることをこのむ吾輩のきらふことなれば、よしや日はくるとも、とこの宿より左のかたの細みちに入、しばしゆけば、木立一むらしげき中に、いがきつくりめぐらして、塚じるしの木はかれたる古墳あり。こは政宗の公の御墓なるよし。むかしこの君、このあたりに御城をかまへられし時、こゝには、はぶりしにて、今も仙台の城主、こゝをすぎ給ふ時は、かならずこの御墓に立よりたまふとぞ。

成田村といふをすぎ、松原村といふにいたれば、葛の松原の古跡ありて、覚英僧都の墓、またうたをゑれるいしぶみもあり。

うへかざる花のうき世をのがれずは人にいはれじ葛のまつばら

と、かの僧都の身のうへうら山しくて、くずとだにも人にいはれぬ身を、なげくのほかなし。

このちかきに寺ありて、それにはこの僧都の自筆の色紙をもちつたへたり、といへれど、心えがたければ、よりても見ず。

湯村といふには名もしるく、温泉ありて客舎もおほし。この村より綱わたしの渡船をわたり、むかひにいたれば飯坂村といふにて、こゝにも温泉ありて、よきさと也。

その村をはなれ、なか野村といふをすぎて、又川あるをわたり、かの佐場野村にいたり、すこし坂をのぼりたる岡山のうへに、医王寺あり。杉の木立ものふかく、すぎこしみちよりも、めにたちし山なり。門には下馬札たちて、いとものふりたる寺なるが、瑠璃光山ともいひて、本堂は薬師仏にて、庭にはいとぎくらあり。

その本堂の左のかたはらなる門より、杉の並木、ひるくらきばかりものふりたる中を、一丁ばかりゆけば、又薬王堂といふがありて、そのおくに正面に、佐藤庄司勝信夫婦の墓ありて、文字もみゆるやうなれ

ど、星霜こゝらをへたる、げにやさだかならず。右のかたに、ふたつならびたるは、嗣信・忠信兄弟の墓なり。石のおもてしろくなるまでけづりとりたる痕のみゆるは、この墓石の粉をわらはやみする輩にいたゞかすれば、たちまちおつるよしにて、そのためかくはなれる也とぞ。威霊いちじるきは、さることなれど、六百年余の古蹟を、かくそこなふこと、なげかはし。威霊てふものは、ことわりもて、はかりがたきものなりけり。

この外にも古代の墓石おほくならべるは、一門のはかじるしにや。八島・よしのゝ戦にさしも名をかゞやかせし勇士も、かく寂寞たる仏場の土にのみたゞなごりをとゞめたるは、ものあはれなり。

うづもれぬ名はよにとほくのこりきて石とくちせぬますらをのとも

かりそめの石になごりをとゞめずはたゞ杉村となりやはてなむ

寺にかへりて、宝物みんことをこへば、おくまりたるところにともなひ、水にて手をそゝがせ、その宝物いだせるをみれば、弁慶が笈といふが、中にも古色なつかしくみえて、よに弁慶くくとみだりにいふつらにはあらず。甲・鏃などもふるくみゆれど、その外はさのみめにとまるものもなし。松平定信の君の白川しり給へる時、この墓たづねさせ給へる時の御歌のうつしなどをも見せたるが、こは『飯坂道記』とてみづからしるさせ給へる御道の記にて、かねて見しりたる御うた也けり。

さて、この村の名を、『おくの細道』に「鯖野」とかきしは、そのころは、さやうにかきけるものか、ともおもへど、こは風流めかしてかけるにはあらざるか。今は榜示にするごとくにしるしたり。こゝのみにあらず、おほかたは、その所々にて、今かく文字をきゝて村名をしるしたれど、仮字にてかけるは、とみにしる人なかりし也。地名は字面の雅俗にかゝはらず、ありのまゝにかくべきことにて、みだりに字をかきかゆるは、心すべきことぞかし。

この村より平田村・いりえの村・河沢村などいふをすぎて、川をわたる。こゝまでのみち、しれやすきよし、寺にていひしかども、そはつねにかよふよりのことゝみえて、たまゝきたるものには、しれがたきみちなり。案内者はよくしれり、とおもひしを、桑折よりのみちこそあれ、福島へのみちはしらざるよしを、寺にきたりて後いひしかば、今さらせんかたなく、心ほそくて、日さへくれちかければ、ひたはしりにはしりて、こゝまできたるなり。

この川のむかひは泉村といふにて、そのむらをすぎ、権現のまします山のすそをめぐり、福島宿にいでぬ。

かの川のほとりにて、ふくしまにかへる人と道づれとなりしかば、甚たよりとなりしが、かの行李を先につかはしゝ宿りより、むかひの人さへきたりて、ことにうれしくぞおぼえし。川までの間にて、さと人にゆくさきの里数をきけば、おもひくゝにて、あるはとほくなり、あるはちかくなりしつゝ、おぼつかなきに、ちまたをきけば、をしへやうのなほざりなるは、旅せしことなき人にて、おもひくまなきなるべし。おのれよくしりたるみちなりとして、はじめてゆくものゝしるべきにあらねば、ねもごろにをしゆべきことなるものを、とはらだゝしかりしが、その道すがら、たゞ日あしのみまもられしも、火影なくして、この宿にいでたるは幸なりき。

桑折より佐場野へ二里、佐場野よりこの宿まで三里ばかりもあり。瀬上宿にかゝりて、この宿へくるは三里あまりといへば、おほよそ二里ばかりのまはりなり。

忍摺シノヅリの石の古跡といふは、その間のみちより南にあたるよし。佐場野は西にあたれば、方角たがひて、いづれかたぐは、みることなりがたきよし、かねてきゝしが、その文字摺石は、たしかなる古跡とおもはれねば、佐場のゝかたにまはりしなり。

さて、富沢やながしといふものゝ家にやどりぬ。家はひろらかなれど、遊女甚おほく、いとなめげに
出きたりて、かたはらに居ならび、^(c)いたもの一夜のちぎりをすゝむれど、みめかたちうつくしきは、ひと
りもみえぬを、はぢらふけはひもなく、まほにいひしらふ心のうちのいやしきは、にくむべく、かたはら
いたくて、あはれはすこしもかゝらねば、後にははらだゝしくなりて、「けふはいとつかれたり、はやく
ねまほし」とてかたはらにつみたる、よるのものを、供のをのこに、しかさんとせしかば、「そは君にか
すにはあらじ」とて、すげなくもてさりしかば、主よびいで、そのことうながすに、やゝしばしありて、
もとありしよりはこよなくけがれたるをもてきつゝ、いとほらだゝしげに、音するばかりたゝみにうちつ
けつゝ、そのあそびはさりぬ。よるのものゝきたなきも、そひねの遊女の心になはぬには、はるかにま
さりて、こよひばかりは、ひとりねもやすく、うれしきこゝちしつ。こは、このさとのみならず、この街
道の宿のならひなるよしなれば、心すべきことにこそ。

女郎花みだりにさける草枕あだなたてめやひとり寝にして

十九日。暁ふかく、とりの声にめざめたるに、いまだあるじはおきたりともみえぬおもむきなれば、あ
はたゞしくよびおこして、朝げのことうながしつ。「よあけぬほどにかならず」と、よべかたくいひおき
しかど、遊女をもとめざりしいきどほりによりて、かくなほざりになせしなり。

たのみあれやあるじは心なきしきりいそがしたつる鶏のこゑぐゝ

宿りをいづるほど、よはあけはなれたるに、今まではくもりしかど、日よくなりぬ。この宿はさのみあ
しからぬ宿にて、板倉何がし殿の城もあり。宿を出はなれ川をわたれば、きのふみし小富士てふ山、左の
かたにまちかく、雪さへつもりたるに、こゝよりはかたちさへ、いとよく似たり。

郷野目村・だいとうじ村・伏拝村などいふをすぎ、ふしをがみ坂をこゆれば、伊達と信夫との郡境の榜示たてり。清水町宿にいたれば、福島より一里廿五丁なり。朝田新町宿といふは清水町宿とおなじ宿にて、こゝに若宮八幡宮おはしますがゆゑに、若宮宿ともいふ。すこしゆきて右に、いと大きな岩ありて、神の御社おはします。清水町より一里八丁にて八丁目宿にいたる。この宿をすぎ、ふとあたりに田を見れば、うちかへしたる水口に齋串をたてたり。これらも、ひなに古風のゝこれるなり。八丁目より一里にて二本柳宿にいたれば、左のかたに「安達太郎寺」といふ額のかゝれる寺ありて、庭に糸ぎくら、おもしろく咲たり。

あだゝらのあたらしかりの糸桜立よりて見る人だにもなし

五本に三本たらざる二本の柳のさとはなに人がすむ

(付箋)
「なち山にこの鬼退治せし劍ありといふ説もあり。ますくうたがはし。」

『拾遺集』雑下。

『大和物語』。

油井町といふも二本柳とおなじ宿にて、福岡村といふにいたれば、初瀬観音といふがあり。この村をすぎ、左のかたの山に安達原の勧善寺といふ寺ありといふ。そのあたりに黒塚の古跡もありといひて、鬼のことをいひつたへたるよしなれど、謡曲にこそ、鬼のことをもつくりたれ、兼盛の歌に鬼とよめるは、重之がいもうとのことをいへるにて、黒塚といふも所の名とおぼしければ、いとうけがたき古跡也。

二本柳より一里にて二本松宿にいたり、ものなどくふ。この一里はいとちかくおもひしが、宿に入て甚町ながし。こゝには丹羽何がし殿の城ありて、城もあたらしく、町の家々も甚うつくしく、彼岸ぎくらなどもとところくに見えて、この日ごろ見ざる繁華の地也。されど繁華は、よにいふ三ヶ津にしくはなければ、かゝるあたりの繁華めきたるは、なにのせんなし。たゞ山水の清き趣こそ、あらまほしけれ。

二本松が嶽といふ山、きのふよりみゆる山なるが、こゝよりはことにちかし。しようぼじ村といふをす

ぎ、松山をすぐるに、その中にひがん桜さきたるは、かゝる山には似つかはしからぬやうにおもへど、こ

のあたりは此木おほきにや、きのふのみちにては、松と連理になれるをもみたりき。このあたりも、かたくりおほく花さけり。

二本松より一里十丁にて杉田宿スギタにいたれば、薬師堂といふがあたりの山にありて、この山は温石名産なりといふのみならず、いとけしきよきところなるよし。このあたりにて、うたふうたに「いなかなれども杉田の薬師、花のもとみや目のしたに」といふがありとぞ。その薬師如来にゆゑよしある清水なり、とて道の左にありて、あたりに茶屋あるに、しばし馬をとどめ、渴をやめん、とて茶をすべれば、けふはいとあつし、とて馬夫が水かへるも、趣ありてをかし。

杉田より一里半にて本宮宿モトミヤにいたり、宿の中をながるゝ川のほとりなる望嶽楼といふに入て、もちひをくふに、「この家は、かけづくりにて、みはらしよく、二本松がたけは、たゞこゝもとにみゆれば、かくは名づけたるならん」と主にいへば、「いかにも、さなれど、かの山は、俗に二本松がたけといへど、まことは、あだゝらが嶽といふ」よし、こたへたるは、心きゝたるあるじにて、あやしき名所の、とはずがたりして、もてなしがほする茶屋の主のつらにはあらず。されば「みちのくのあだゝら真弓」とむかしよみけるも、この山のあたりのことなるべく、それを又よこなまりて、安達とのちにいはるなるべきか。

すぎしみちより左に、いととほく、すがたことなる山の見えしを、「いかなる山ぞ」といへば、「うづしが嶽といひて、岩城のかたなる山なり」とこたふ。

さて、この家のあたりの川は、家のうしろにて大川にながれり、その大川には、わたし船あり。そのわたしをわたるは、岩城平のかたにゆくみちにて、こゝより二十里ありとぞ。この宿をはなれて、会津道

の石のしるしありて、こゝより十三里といふ。

やゝゆきて右のかたに、ひたいとりといふ山みゆるが、たかき山にて、雪もかゝれり。こは、むかしの朝香山にして、山の井は、そのふもとに今もありて、采女塚といふもあるよし。本宮より三里ばかりにて片平カタヒラといふよき村ふもとにありて、そこをさしてゆくなるが、そこより山の井にちかしとぞ。今すこし、みちゝかかりせば、ゆかまほしきものなるに、

あさか山あさしとわれをおもふなよいそぐによらぬ山の井の水

みちのほとりに、「ちなし」とも「づなし」ともいふ花さけるが、かの常陸にて「しどみ」といへる花也。「こは、ぼけとは、べちのものなりや」と馬夫にきけば、ぼけは雄にて実なく、この花はぼけの雌にて実なるよしをこたへて、「この花は、馬のきらひて、くはぎる木也」といへれば、馬酔木を、この木とさだめけんも、ことわりなきにあらず。「つゝじが岡にあせみ花さく」といへるも、さることぞかし。

にいた村といふをすぎ、高倉宿にいたれば、本宮より一里十一丁也。横森ヨコモリ新田村といふをすぎ、左のかたに、ちひさき山あるを、あさか山としもいへど、馬夫も「まことのあさか山は、ひたいとり山にて、こはうつしなり」といふ。名所に、うつしといふことわりあるべくもあらず、こは似て非なるのたぐひ、こぼちすてまほし。

かげとだにいはれぬやまをあさか山あさくしくもたが名つけゝむ

高倉より一里にて日和田ヒワタ宿にいたる。この宿の入口に寺ありて、糸ぎくら咲たり。又東昭寺といふ寺ありて、こゝには松浦佐用姫堂といふがありて、さと人あやしきつたへをいひ、そのゆゑよしにて、このあたりの八ヶ村の人どもは、近江の竹生島にまうづれば、たゞりあり、とてまゐらざるよしをいふ。浅香沼は、この寺のうしろにて、今はなごりばかり也とかや。この寺にも又、糸ぎくら咲たり。

しばしとも駒ひきとめぬ糸ぎくら春の日和田もくれかゝるそら

ながくへし日数うたがふ糸ぎくらいまださかりのすぎぬおもへば

とよめるは、鹿島にて糸桜をみそめしかども、時候のたがひによりて、このあたりなるは、それとおなじやうにほころびたれば也。

牛池村ウシノイケといふにいたれば、名もしるく大きな池あり。日和田より廿三丁にて福原宿にいたり、久保田村ホタタといふをすぎ、川をわたり郡山宿コホリヤマの入口にいたれば、三春ミハルといふにゆくみちありて、こゝより三里なるよし。今はたそがれころゆゑに、さだかならねど、ひるはその三春の城もこゝよりみゆとぞ。この郡山宿まで福原より廿五丁なり。

こよひは、この宿にやどらんとするに、いつも日ぐれがたとなりては、こよひのやどりは、いかなる家ならん。ねがはくは、きよき家に、と心もとなきにつけては、故郷こひしきものなるが、柏屋何がしといふものゝ家にやどりたるに、家づくりいときよく、遊女なければことによし。たゞ、くりやに松明をたきたるばかりぞ、ひなめきたる。

さて、けふしものりし馬の、鞍おかぬ馬に行あへば、かならずいなゝきくるふやうにふと心づきしかば、馬夫にとひこゝろみしに、「そは、かならずあることにて、その馬の重荷おはぬを、ねたみてのことなり。そのみならず、春は馬の心いさみがちに、ゆきあふ馬といなゝきあふものなり」とこたへしは、けものにも、はたゝましひはありけり、とあはれにおぼえしが、その馬夫が「伯楽ハクラク」といひしことあるを、「なにぞ」ときけば、「馬医のこと也」とこたへたるは、めづらし。馬身まかれば、穢人にあたへず、野原にうづみて、あつくはぶるよし。人情おもひやられて、あつきに感をおこせり。さて、この宿より、かの朝香山へのみちをきけば、二里半あるよし。会津へは十四里ありといふ。

廿日。朝とくおきたるに、雨ふる。

今ぞしるきのふのくれの日のかさはけさふる雨のまうけなりしを

とよめるは、きのう申の刻すぐるほど、暈ありしをおもひてなり。

十五丁ゆきて小原田宿ヲハラダにいたり、それより八丁にて日出山宿ヒデノヤマにいたる。

空にしもなほ偽のあるよとてけさは雨ふる日出山の里

十八丁ゆきて笹川宿サガハにいたるに、この宿中に糸桜をかくし咲たれど、

よりてみむことももうくて糸ざくら雨の糸すぢくるしかりけり

くるしくも身にふりかゝる雨の糸桜なりせばかこたじものを

よりかくるこなたかなたの糸桜日ごとにみつゝいくかへぬらむ

じつこうじ村・滑川村ナメカハ・下宿シモユクなどいふをすぎ、中宿ナカジユクといふにいたれば、右のかたに木ぶかき森あり

て、「大職冠鎌足大明神」といふ額のかゝれるは、いかなるゆるよしにて、こゝにしもまつりたるならん、といぶかし。川をわたりて須加川宿スカガハにいたれば笹川より一里半なり。こゝにてものなどくふ。

この街道は炉の口をかたへひらきて、そこよりわらうづ、ふみいるゝやうにかまへたるがおほければ、かく雨にて、あゆひぬれたるをあぶるには、たよりよし。自在の竹をのばして、めのまへにて豆腐てうじいだせるは、きよからぬかたもあれど、かつはみやびて見ゆ。

この宿をはなれ鏡沼村カミヌマといふにいたるほど、

かぢみぬまかゝなべてゆびをりみればあまた日数はうつりけるかな

須加川より一里半にて笠石宿カサイシにいたり、それより十三丁にて久来石宿キウライシにいたる。それより廿三丁に

て矢吹宿ヤフキにいたり、それより十二丁にて矢吹新田宿にいたる。その宿をはなれたるところの右のかたに、よにめづらしき、ひがん桜の大樹あり。

あづきゆみ矢吹のさとにたれもみな心やひかんさくらさく陰

この国は、すべて山ざくらの木立、いとすくなく、日ごろめにつきしは、いづれも糸ざくら・ひがんざくら也。名だかき仙台の釈伽堂釋迦堂も、かみにしるせるがごとし。はるかおくの、なにがしのさとは、大桜とて枝にのぼりて花を見、うろには雨やどりをなすばかりに、としふりたる糸ざくらもありとかや。

この矢吹新田のほとりより棚倉にゆく道ありて、こゝより六里あるよし。こは、さきにしるせるごとく、太田よりくるみちにて、こゝより水戸へは廿七里といふ。

この宿より十三丁にて大和久宿オホワケにいたり、五本松とて五股の松あるあたりをすぎ、踏瀬宿フムゼにいたれば、大和久より廿三丁也。右のかたに石仏の大きなるを見、踏瀬より廿丁にて大田川宿オホタカにいたる。この宿の入口、右のかたに池ありて、中に小社あるところあり。この宿より十三丁にて小田川宿オダガにいたり、それより廿六丁にて根田宿ネダにいたる。この宿にゝぎはしき家のみゆるは、公方様へ盛岡より献上の馬ひき来れる人のやどれるなりといふ。この宿々の間の、いとまちかきは、このあたりは順番とて、十日めにかはりて、上りはそこにて駄馬ネダをつぎ、くだりはこゝにてつぐといふさためあるに
よりて也とぞ。

この宿にて馬をかり、やゝゆけば道のかたへの山に、辛夷おほくさかりなるがみゆ。未さがりとなりけるゆゑにや、風すこし吹そひたるに、鞍上はことにはげしくおもはるれば、笠をかたぶけつゝゆくに、くびたゆく、鞍壺アサにつかみつく手ひやゝかにて、甚安からねど、泥ふみなづみて、草鞋やぶれがちなるには、すこしまさりぬべし。このあたりの馬はおほかた雌馬がちにて、それをひくも女なるが、はぎあらはにはし

をりて、帯に煙管をさせるは、見にくきものから、風流にもあり。かくて、みちにてゆきあへる馬の、これも雌馬なるべし、いとちひさき馬の子のおひすがりて、乳ぶさふくみゆくがあるは、めづらしくおもはるれば、「その子はいつどころか、うみたるならん」とへば、「こは、この二月ごろ、うみたるなるべし」といふ。人なりせば、おもきつゝしみともいふべき日数のうちなるを、いかにものいはざるものなりとて、重荷をおほせ、しかりつかふこと、心づよく、ものゝあはれもわきまへぬしわざなり、とあさましくおぼゆ。「かく、子馬をともなはでは、おや馬あんじわづらひて足もすゝまず、子はまた親をしたひ、むづがるによりて、道さまたげとはなるものから、いづる時には、かならずともなひつるゝなり」などいふをきけば、心なきけものゝうへにも、猶うきよのならひはのがれがたきものか、とすゞろにもあはれにて、重荷のなやみをしのぎながら、かく乳をのませゆく心のうち、ことにいたましくおもはる。

子をおもふ心のやみにますくもおもきおも荷やうちそはるらむ

ゆきなやむ親の心をこはしらでちぶさにするさまあはれなり

やゝゆきて、右のかたに会津にわかるゝみちの追分ありて、石標もたてるが、こゝより十七里あるよし。飯土用宿イヒドヨウといふにかゝりてゆく也といふ。

そこよりすこしゆきて、川をわたるを、あふくま川といひて、かのおぶくま川に末はおちあふよしいふ。この川、白川宿の入口にて、根田より一里なり。けふのみちは、山といふべきほどのこともあらねど、小坂甚おほく、あしきみちなり。

このさとは阿部なにかし殿の城ありて、よきさにて、町ながく、もと町といふには客舎おほくならびたち、例の遊女おほく、れちかき空をまちえがほに、よそほひかざりて、はしちかく旅人をひくさま、髪カミのゆひぶり、衣の色あひも日ごろにかはりて、江戸の風にちかし。

(付箋)

「白川神社ハ別ニアルヨ
シ或書ニミユ。考ベシ。」

コノ歌ハ『氏郷記行』ニ
ミエタリ。

されどその遊女ある家はうるさければ、中町といふにいたり、あふぎや何がしといふものゝ家にやどりぬ。家居きよからねど、遊女あるにはまされり。主よびいで、このさとの氏神のことをきけば、「鹿島明神なり」といふは、『式』にみえたる「白河神社〔白河郡〕」なるが、関跡といふをきけば、「関山といひて観音堂あるが、そのあとにて、こゝより二里ばかりあり」といふ。

よゝの歌人の名だかきうたは、いふもさらなり、蒲生氏郷ぬしが、この関をこゆとて「みちのくも宮古もおなじ名どころの白川の関今ぞこえゆく」とよまれしをもおもひいで、その跡よ、とおもへば、そのるにたづねまほし。さるは、このぬしは、わが松坂のさとをひらかれしぬしなれば、ことになつかしくて也。又このさとに松平定信の君のおはし、時、かきしるされたる『関の秋風』とかいふふみに、「かしの山の紅葉」といふを、いみじくもいはせ給へれば、そのことをもきくに、「こは、六里ばかりあるところにて、そこに温泉もありて、あふくま川の川上なり」といふ。落葉のをりなりせば、み山がくれの一葉をだにみましを、とのこりおほし。そこは紅葉のみならず、躑躅おほしといふ。

さて、那須温泉のことをきけば、「こゝより六里にて、ゆくさきの大田原へも七里なれば、二里ばかりのまはりなれど、山路にて、みちあしきがうへ、かのあたり甚さむきところにて、いまだ雪おほく、客舎には雪がこひといふものをなしたれば、家の中甚くらくして、やどりとなすにたよりあしければ、ゆあみにゆく人は、今すこしあたゝかになるをまちてゆけば、こたひはおもひとまりたまへ」とすむ。そこには、『式』に見えたる「温泉神社〔下野国那須郡〕」ましくて、八幡宮とまうして与市宗高の遺物もあるよし。『平家物語』に「温泉大明神」とあるも、この神の御ことなりとかねてきけば、ゆかむとおもひしを、いとくちをし。あらましよりおほくはめぐりがたく、のこるところの必いでくるが、旅のならひなり。かくはなさじ、とすまふものから、みちのついで、又は雨ふる時、気候などにて心にまかせぬがちなり。

こよひ、いとさむきを、「いかに」ときけば、このあたりにては、こゝと日光とを「さむきところ」といふよし。十三日の雪も、一尺ばかりつもりしよしへば、おくのかたよりは、寒つよきなるべし。岩沼あたりも、さばかりはふらざりし。

はや、このさとは梅さかりなるが、ひるまめにつきしもその氣にやあらん。

こゝも又梅さかりにてなかくくにとほくはみえぬ白川の関

こゝをしも、かの古歌には、いとほく、ことなるさかひのごとくよめるに、はるかおくまでもゆきしをおもへば、今さらそらおそろし。こゝより棚倉へ六里、水戸へ廿六里、日光へ廿三里、江戸へ四十八里なり。

かく江戸もちかくなれるににつきて、こよひしも、すぎこし街道のことをつらくおもふに、この中街道は東海道のごとく、浜街道は中山道のごとし。

先、浜街道のことをいはず、俗に米国といふあたりなれば、飯はことかくべくもあらねど、昼飯くはむとてよる茶屋には、さきにいふごとく、飯のとぼしきもあり、「はた一足のたがひにて、先によれる旅人はくへれど、そのこりなし」といへる家もありて、ほどよくあるは、氷のごとくにひやかかなり。かく米国とはいへど、すぎし荒年にて、家などたふれたるが、そのまゝにくちのこれる柱などのみえたるは、あまたなり。

人心は甚ゆたかにて、かりにもものをいそぐことなれば、朝も「はやく」といひても、はやくはたせず。馬をからむとすれども、とみにはとゝのはず。旅舎は宿々に、おほきは五六軒、すくなきは一二軒あるばかり也。詞づかひは、水戸はなかく聞とりにくきも、仙台までの間はきとりやすし。雪隠には手あらふ水盤なく、炉中に唾をはきなどす。肴は価安けれど、よき魚をみず。よるのものゝ木綿にとぼし

ければ、丈みじかくてあかじみたるがち也。山はなけれど坂おほくして道あしく、冬は風あたゝかなりといへど、春は風さむし。一里あまりもつゞける野原に家なきあたりおほく、げにもいまだことひらけぬ地の風あり。

されば人心はゆたかなるのみならず、甚たゞしく、馬士にいたるまでも、真卒（卒）にて軽薄にあらざ。まづ宿りにつけば、主うやうやしくいで、茶をあたらしく煮てすゝめ、供のをのこに足なき膳をすゑ、われには足たかきをすゑたる家もあり。茶代てふ錢をあたへても、とみにはとらず。とりても、さばかりよろこばしきかほばせもみえず。これらのことは、甚賞すべきことにて、わが国などの、旅人の錢をむさぼるは、いとほづべきことぞかし。かくものごとたらはぬがちなれば、俗人などはかの街道をいかにおもふらん。したは軽薄にて、うへをつくろひ、たゞ酒食の美をこのむがよのつねなるには、こよなくたがへる国也けり。名主を検断（ケンダン）といひ、みちすがら馬頭観音、廿三夜、道祖神の石おほし。中街道よりは道法六里ばかりもとほしといへど、こはおほよそにいへるにて、一里の道法すべてさだまらず。中には甚とほきがあり。くはしくみちのりをつもりなば、こよなきたがひとなるべし。

仙台にいではさすがにものごとたらひたるも、なほ荒年のなごり、あれにあって手形通用といふになれり。こは手形といふものありて、そを金いくらとさだめたれど、こは国守ばかりのさだめにて、下にてそのさだめをもちひず、その価いやし。このことはさきにもいへるがごとし。されば囊中より金をいだせば、蠅の血をみるがごとくによるこべども、金銀は、あるは五年見ず、あるは七年手にとらず、かるがゆゑにみわすれたれば、真偽みさだめがたきよしにて「これもあし」とて、容易にはをさめず。「世上の通用には、われらはかゝはらず。おのがめになへるならでは、とり奉らず」などいふ。この手形は、他国にては米札といひ、銀札といふものとおなじたぐひ也。仙台のやうにこそあらね、今は他にもこのた

ぐひ、いとおほきを、かくなりゆきては、国守の勢おのづからにうせて、徳をそこなふのもとひともなるべきことぞかし。

木綿は、ことにとほしきあたりなれば、俗に「仙台ぼろ」といふがごとく、身におはぬつゞれをきたる人おほし。かゝる国の風を見ては、常にはさおもはず、なほざりにのみ心もつかねど、ものごとくみたらひたる、わが国などにすめるは、いとありがたきことぞかし。

その浜街道も相馬領をはなれて仙台領にいれば、人心さかしらだちたるも、仙台北下は、ことさらに心すなほにあらず。それよりして中街道にいでもおなじことにて、すべてこれまでの宿々銭をむさぼるの悪心、ほにあらはれたり。もとよりこの街道は、東海道に似たれば、寝食のうれへはすくなけれど、中々に本街道めかして、遊女どもおほく、かのみだりに客人にすゝむるは、にくましきのみかは、ものごと東海道にはおよびもなし。

かくさまざまにそのさまのうつりかはれるも、福島よりこなたは、きはだちて宿々もめやすかりしが、又この白川にいたりて、けぢめたがひつゝ、はじめて辺鄙をはなれたることちして、さとの家居、人々のさまゝでも、にはかにかはり、遊女のことほさきにいへるごとくなれば、さかひかはれるやう也。

浜街道は駕籠はかりにもなく、中街道はかならずなきにあらねど、おほかた馬にのる人ばかり也。

ふたつの街道、さばかりなりけれど、小坂こそあれ、山といふべきほどの山なきは、この街道の第一のとりどころなるべし。

松島の風景は、山水このむ人には、かならずふりはへてもとすゝめまほしけれど、みちすがらの艱難をとはれては、かくのごとくのことなれば、とみにこたへむ詞はなかるべし。すべて国風、東夷のなごりありて、人にかたるとも、その境をみずしては、まことゝすまじきことどもおほし。熊野路をゝそろしきさ

かひといふ人おほけれど、山こそさがしきがおほけれ、宿りくも浜街道にはこよなくまさりて、みちすがら海山のながめもありて、夷国の風はかりにもなし。ふたつの街道ともに、みちすがらは、ながめおほからぬ街道になむ。

さて、みちすがら銭は百の数にみてるを百文といひしも、このさにてはじめて九十六文を百文といへり。

廿二日。猶小雨ふる。あけはなれて宿りをいづ。里の出はなれ右のかたに、那須湯にゆくみちの石のしるべ有。皮籠村といふにいたれば、右に金売吉次の宮といふ小社あり。こは、たしかなる書にも見えざる人なるに、神にしもいはれたるは、その人の幸にて、必神にいはひまつらるべき人の、さはなきもよにおほかるを、偶不偶はことわりもてはかりがたきものなり。

白川より二里にて白坂宿にいたり、八丁ゆけば境明神とまうすが右におはします。こは陸奥と下野との国ざかひにて、両国に両社ましますなるが、陸奥のかたは祝融の災ありて、今はかり宮なり。こゝにさかひ桜といふ大樹のさくらあるよしを聞しが、今はみえず。このまへに、名物なり、とてさゝやかなるもちひをうる茶屋あるによりて、そをくふに、よに名物といふものゝ必うまからぬたぐひにあらで、味いとよし。こゝにいこふほど天気よくなりぬ。

はるけしななこそその関をこえしよりみちのおくにていく日へぬらむ

今ゆくさきは下野国那須郡にして、陸奥の地をはなるゝとおもへば、にはかに江戸のかたちかくなれるこゝちして、心もたしかになりぬ。

やゝゆけば、みちのほとりに石仏ありて、下はおのづからの大岩なるに、石階をきざめるはめづらし。寄居・高瀬・蟹沢・板屋などいふ村々をすぎて、右のかたなる山に山桜五本ばかり咲たり。すぎ

こしかたは、すべて糸ざくら・ひがんざくらのみにて、山桜はこれがはじめなれば、目とまりぬ。「こは、いかなる所ぞ」ときけば、「峰岸ミネケンといふあたりにて、ちかくみゆるが、その村也」といふ。

めづらしやことしやよひの末までも初花しらすですぐしけるかな

山ざくら春くれがたにみそむるもことしの春を初花にして

初ざくら今までみねば峰岸の山にしはしと杖とゞめつゝ

その峰岸村をすぎ、むかひのかたの山に、又一木ざくらみえたり。

さくら花さくやいづことこゝへばいまゆくさきときくがうれしさ

かくよめるは、その山は芦野宿アシノのあたりの山なり、といへばなり。その宿の入口に遊行柳道といふ石のしるし右のかたにたちて、そこより一丁ばかりへだゝれるところに、木ぶかき神の御社あり。

その鳥居のかたはらに垣ゆひめぐらしたる中に、くちのこりたる柳のみえたるを、遊行柳といひ、西行法師の「清水ながるゝ」とよまれしも、この柳のこといへど、そはうけがたきものから、この法師のこといへばいとなつかしきに、この柳のことは、蒲生氏郷ぬしの記行にもその名みえたれば、そのころはやく、かくはいひつたへけむ、とおもふまゝに、

みちのべの清水はとほくながれきてのこる柳にかぶおもかげ

その芦野宿に入つものなどくふ。こゝに、このあたりしる芦野何がしどのゝ館ありて、白坂より三里也。宿をはなるれば、かたへに岩山ありて桜も咲たり。はや日光山もとほくみえそめたるは先うれしく、女夫石メヲトといふあたりにいたれば、左のかたに二つ大石あるを、かくいへるにて、それには注連をはれり。このあたりにさくら咲り。

ひとりのみ見る花さびし石だにもふたつならびて猶たてりけり

蛇沢村といふにいたれば桜の大樹あり。けさよりして、かばかりの大樹をみざれば、ことにめとまりぬ。

石田坂村・寺子村などいふをすぎて、筑波山もとほく見えそめたるは、しばしあはざりし人にあへるこゝちして、かのみねにのぼりしことをおもへば、とほくもめぐり来にけることよ、とおもはるゝにつけては、「にひばりつくばをすぎて」とうちずんじらるれど、こたふる人もなければ、みづから指をりてかぞふるに、夜は十あまり六夜、日は十あまり七日になりぬ。

杉渡土村といふをすぎ、越堀宿にいたれば、芦野より三里なり。この宿のすこしまへより高原山といふをのぞめば、まへに一帶の松原ありて、なすのゝ原のいとひろくとみわたさるゝに、那須山もその山につゞきたれば、けしきいとよく、両山ともに雪はいとしろし。

おほかりしゆくてのさくらめうつしに雪も花かともえまがひつゝ

この越堀より六丁にて鍋掛宿にいたり、樋沢村といふをすぎ、黒羽にゆくみちのちまたあり。野間村・練貫村・一沢村・堀米村・岸下村などいふをすぎ、又棚倉にゆくみちのちまたありて、こゝより水戸へもゆくとぞ。棚倉はさきにいへるごとくなるに、この街道よりみちすぢおほく、道法もちかきは、又おもふにたがひて、地理のことばかりは、その地をふまずしては、さだめがたきものになん。

上深田村といふをすぎ川をわたるに、この川のきしにも桜さきたり。この川に、かじかおほくすみて、そをとりにくふよしいふは、蛙のかたちに似たるにはあらで、魚のかたちせるなるべし。この川のみかひは太田川宿にて、鍋掛より三里也といへど、とほし。この宿には太田原ながしどのゝ城有かくてこの宿の小もく、こやながしといふものゝ家にやどりぬ。この家に遊女あれども、すゝめずしてよし。

さて、那須碑のことをあるじにとへば、「こは笠石とよなへて、湯津上村ユツカミといふにありて、こより二里あまりへだゝれり」といふ。かの八景ありて、よのつねならぬ境なるよし。かねてきける雲岩寺のことをとへば、こは「うがんじ」とよなへて、こより五里あるよし。そは黒羽へかゝりてゆくが順路にて、黒羽まで二里、それよりその寺へ三里也といふ。江戸より来るには、喜連川キツレガハよりまはれば八里にて、雲岩寺より白川へたゞにいづるみちもありて、喜連川より雲岩寺までのあひだに、かの那須碑ある湯津上村をすぐるよし也。その雲岩寺は、「田舎にはめづらしき寺なれば、まはりたまへ」とすゝむれど、例の、さまではえたづねず。

さて、その雲岩寺は、むかしよりのさだめにて、住職となる僧十六年より長くはすまず、その年限きたればかならず職をしりぞくとぞ。

廿二日。くもれり。朝いひくふほど、ふとおもへば、けふは家なるむすめの生辰なり。去年くまのゆきし時は、あねなる娘の生辰なりしが、けふはいもうとなる娘の生辰にあへるも、故郷なつかしくて「女兒生日是今朝」てふ、から人の句もおもひいでられてなん。

さて、「日光のかたにゆくには宇都宮にいで、それより今市にゆくが大路にて、街道もよしといへど、さては一日のまはりとなれば、この宿はづれより日光にゆく道あるにかゝるかたよけれど、そは野原がちなるみちなれば、明はなれて後ならでは、よろしからず」と宿の主が、よべいひし詞にしたがひ、朝まだきに宿をいで、「日光道」といふ石のしるしのたてるあたりより右にをれて、たゞに野原にいづるは那須野の原にて、きのふよりのつゞきなる、そのひろさ、げになすとなだかきもことわり也。ゆく／＼百鳥の声ども耳にみち、雲雀のまぢかくまひあがるに、葦・蒲公英のさかりをあらそふもとり／＼にて、をり

にあひたる春のさま、ゆく／＼めをよろこばしむ。

空くもるなすのゝ原の朝がすみ末とほからぬこゝちこそすれ

いたづらになすのゝすみれこゝにきてねざりしことのくやしかりけり

紫のゆかりの色にあらねどもふぢなの花もなつかしきかな

ゆけど／＼はてなく、宿の主がいさめしはことわりにて、行あふ人は甚まれに、ものさびしきみち也。

太田原より二里にて薄葉村といふにいたる。

日の光うすばのさとの朝ぐもり雨になるなどそらだのめしつ

川をわたりて沢村といふをすぎ、山の尾のうへをつたひて矢板宿にいたる。薄葉より一里半なり。

それより半道にて高内宿にいたる。この宿をすぎ、左のかたに枝ぶりをかしき一樹の松ありて、枝に

ひまなく紙をむすびつけたるは、ゑんむすびの松といふよし。木本に「熊野山」とゑりたる石と男根

のかたしたる石とたてり。この男根のかたしたる石を道祖神、又は金勢大明神ともいひて、このあた

りにおほぎよしいふ。溝口に男茎形さしたる故事をおもへば、これもゆゑあることなるべし。このあ

たりは馬もて田をすぎかへせるもめづらし。

倉掛宿といふをすぎ、又も山にかゝるに、そこかしこにさくら咲たり。

たかき枝もまちかくみつゝ馬の背にのるくらかけの山ざくら花

川をわたり玉生宿にいたれば矢板より二里半なり。かねて用意し来れるわりごを、こゝにてひらく。

この街道は食物もとのひがたからん、とかくはなせるを、おもひの外、旅舎・茶屋は宿々にありて、

ことかゞざれば、おもひすごしつゝ、ふやうのことしけり、とおもふものから、用意なくて腹むなし

くなれるには、はるかにまさりぬべきか。宿りの主がおぼめきて割籠あたへしは、またく錢をむさぼ

るの心なりけむ、と今さらにくましくおぼゆ。

この宿に梨の花咲たり。

美婦人によそふるなしの花の枝はなみだの露も玉にふの里

外に又しる人なしの花なれば花のすがたのなつかしきかな

かくよめるは、われ梨花を甚このみて、としぐの春かならずそのさかりには瓶にさすなるが、ことしも家にあらば必、などおもひつゞけて也。

この宿のそこかしこの家の門に、竹もて柱を四本たて二段に棚をかざり、そのうへにあかき紙にてはれるあんどうおけるを、「いかに」とへば、「家にもがさやむ子あるにて、もがさの神をまつれるなり」といふ。かく門にもがさの神をまつれるは、ことわりありてこそおほゆれ。

さて、馬をかれるに夫婦出来たりて、夫は荷をつけ、婦はまぐさかひつゝ口とるは、なか／＼にうらやむべき身のうへとやいはん。その婦はいまださだすぎざるに、例の男のごとくにはしをりて、小歌おもしろげに口ずさみゆくめり。

はぎたかくつまはしをりて女とも見えぬそのさまものあはれなる

すこしゆきて右のかたに小社おはします。ほとりに老木のさくらの咲みだれたるあり。こはきのふみし老木よりも、ひときはまさりたる大樹なれば、駒とめさせてしばし見あぐるほど、二ひら三ひら袖のうへにちりかゝりたる、いとよしあり。

きのふこそ初花みしがちる花にけふあふことのめづらしきかな

いとどしく盛みじかしきのふけふ初花もみつちる花もみつ

ほどなく芦場村といふにいたる。この村の家々は門におほかた蜂の巣の大きなるがみゆるは、蜜

をとるなるべし。又麦畑の中に芋をうゝるがあるもめづらし。船生宿フニウといふをすぎ、鬼怒川キヌを船にてわたらんとするに、わたし守はいづかたのもおなじならひにて、とみにいでこず、まちどほ也。この川に、はしあれど、いつそんじけむ、半こぼれたり。「馬は、わたしがたし」といへば、岸にてをりぬ。この川すぢに籠石カゴといふめづらしき石ありて、日光の御門主、をりくそこにあそびたまふよし、かねてきければ、たゞならぬあたりなるべし。ちかゝらばゆかまほしけれど、一里あまりまはりときて、えゆかず。

船、むかひのきしにつくほど、川鹿の声おもしろく聞えたり。

きぬ川のきよき川せになくかはづたゞわれのみやあはれとおもはむ

船人にとへば、「こゝなるは、かたち蛙のごとし」とこたふ。

そのきしより五丁ばかりゆきて大渡宿オホワタリにいたれば、玉生より三里なり。けさよりの空、あるははれ、あるはくもりて、心もとなき空なりしが、この宿にいこふほどよりして、雷すこしなりそめたり。轟トドロク村といふにいたりて、

なる神のど。ろくおともよそにみてさものどかなる花の色かな

かくよめるは、このあたりみちすがら老木のさくらどもおほくみゆれば也。

芹沢村セリサハといふにいたるほど、垣ねの山吹、いとおもしろく咲たるあり。

金なす花よそにしてうへなしとしづはおもはん芹沢の里

この村いとながき村なるが、そのむらのうちにて、にはかに空をどろくしくなりつゝ、夕立めきたる雨降いでたれば、とみに雨衣とうでゝまとひたれど、風のはげしきにふきまぐられて、いとくるしけれど、雷はなりやみたり。

この村をすぎつゝして川原にいつれば、むかひに老杉の並樹ながく一帯につゞきて、にはかにみわたしうちひらけつゝ、さかひことなるやうにおぼゆるは、則宇都宮より日光にかよふ街道のみゆる也。その川をわたり、今市宿にいつれば本街道にて、こよなくみちひろし。こゝまで大渡より二里八丁也。

この宿はづれに滝尾権現の御社といふがましく、老杉しげれり。それより杉の並木どもいとものふりたる中をすぎ、瀬川村・和泉村・野口村などいふをすぎ、七里村といふにいたれば、生岡大日といふにまうづる道しるべの石あり。この村に、日光にまうづる人の国所をたゞしてかきしるす番所あり。今市より一里にて鉢石町ハツイシにいたり、和泉屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。今市よりこゝまでは、よにいふ、つまさきあがりの道にして、村々の間はすべて、杉の並木ものさびたり。このやどりたる家、おもひの外きよらかにて、もてなしはよし。こゝは魚肉にとぼしといひて、山菜こゝろよくてうじいさせるは、魚肉にとぼしきを、おして調べて味かはれるを、ほこりにいですがならひなる客舎に、はるかにまされり。

くれすぐるほど雨いみじくふる。けふはこのあたりもかみなりしが、「初雷なれば、これをめせ」とて節分の豆をいませり。かゝるあたりにて、この豆をくふもめづらしきことなり。『地震・かみなり・火事・親父』といふ、そのふたつに、こたびあひぬるも、をかし」と供のをのこがいひてわらふをきけば、そのひとつなる父には、はやくもわかれけることのおやしきおもひいでられて、こよひの雨は袖のものとなりぬ。

廿三日。よあけがた雨ふる音にめぎめて、又ねはせじとおもふほど、いみじくふりまさりて又雷なるが、さばかりなる音にもあらざりしを、一声頭のうへにおちかゝるやうに聞えしにをどろかれて、後は雨も聞えず、かみも聞えずなれど、猶おぼつかなければ、むくとおきて朝戸やるに、空はなごりなくはれわた

りて天気よく、よはあけはなれたり。

「御神廟にまうづるには、雨ふりてもさはりとならねど、中禅寺にゆくには、天気よき時ならでは山みちのわづらひおほく、ながめもすくなければ、けふは先、中禅寺のかたに」と主のいふにしたがひて、案内者つれて杖を手にし、町をはなるれば、左に下乗石ありて神橋といふ橋かゝれり。こは朱ぬりにて、山菅の橋とも、蛇橋ともいふは、ふるきゆゑよしあることぞ。橋のさまよのつねならず、下をながるゝ川を大谷川といふ。

さにぬりの大橋たかくかゞやきて杉の木立も神さびにけり

このはしは、人わたさじ、とかきつくりめぐらしたれば、かたへなる仮橋といふをわたるに、そのはしのもとに懸樋などのあるも、めづらしくみゆ。

むかひのきしに深沙王の社といふがたゝせ給ふ。御神廟のかたは、右のかたにみて、四軒町といふをすぎ、原町といふにいたり、妙道院といふにいれば、庭に八重桜さきたり。釈伽堂といふがありて、そのほとりに殉死の墓石ならびたり。そのころは、いまだ戦国のなごりにて、かゝるためしもあるけんを、さるためしのたえはてにたる御代こそ、ありがたけれ。

蓮華石町といふにいたれば、名もしるく、れんげ石といふ石、左のかたにあり。それより大日堂といふにまうづるに、庭の池は泉にして水わきいで、底のさゞれもみえすきつゝ、きよきことたとしへなく、あたりには大谷川さへたぎちながれて、よしある所なり。こゝは茶を煮てあそばんによきところなるべし。

この寺をとほりぬけて茶屋あるにいこふ。この茶屋より、男体山・女体山まぢかくむかひに見え、雪まだらにしろし。その間に大まなこ・小まなこといふも、たかくみゆ。こゝよりしばしゆきて左のかたの細

(付箋)

「ジンシヤ大王」トニゴ
ルガヨシ、トアル僧イへ
リ。考ベシ。」

道に入て、うらみの滝にゆかんとするに、みちすがら蕨薇ひまなくみゆ。

をりもせでよそに見すぐすわらび哉つとになるべき旅にしあらねば

やゝいれば、かたへに谷川ながれていきぎよし。行者堂といふあたりは行人のこもる堂なるよし。今はとぎしたり。こゝにちかく、岩のうへに松おひたるがあるは、「種しあれば」とうちずんじらる。

この堂のうしろのかたより、ほそき坂路にかゝるに、いとけはしく小石がちなるみちなるに、栗のいがひまなくおちつもりたれば、やうせすは足をそこなはん、といとなやめり。

しばしのぼりてすこしくだれば、すなはち、うらみの滝にて、鉢石町より一里半なりといふ。

この滝のさまは、詞にもべがたけれど、そのおほよそをいはんに、落口の岩は、おほひかゝれるがごとくさしいでたる大岩にして、そはみちに高さ一丈あまりもあるべきが、そのそばみちに丸木ばしをわたしたるところより、名のごとく滝のうら、くまなくみえて、朝日の光すきとほるさま、玉のすだれのごとく、きらめきたり。その末は千尋の岩をつたひおつるさま、けおそろしく、めをもとどめがたし。滝壺をうかゞへば、日の光、虹のごとくにかゞやけり。かくて岩のうへに水のながるゝ中をつたひて、滝壺のもとにくだり、みあぐるさまは、よのつねの滝のさまにて、もつとも長く大きなり。

この滝にとりて、今ひとつ滝あり。又二丁ばかりもまへにも滝ありて、そはいくすぢにもわかれておつる滝なりしが、「このふたつは、名もなき滝なり」と案内者がいふ。かゝるあたりならずは、名もあるべき滝なるに、花のかたはらの深山木のごとくなるは、その滝のため心ぐるし。

又丸木橋のうへにかへり、しばしたゝずむに、うへなる岩より雨のごとくに雫のふりかゝるも、きよらかにめづらしければ、墨斗の墨をうるほしなす。こゝに石の不動尊もまませり。そこより、もとのみちのかたにいさゝかかへりて、みおろすさまももしろし。このかたへの山にも、もえかゝるがごとき岩

どもありて、それよりも雫ひまなくおちたり。そのみならず、このあたりの山は、おほかた岩のたゞまひたじならず、つゝじの花はなべて咲たり。このつゝじは、やしほといふつゝじなるよしにて、木立いづれもよのつねのつゝじよりは大樹にて、うす紅の色あひいとうるはしく、あたかも桃の花のごとし。よにつゝじの木の柱などのあるを、あやしとおもひしが、このやしほをみて、うたがひをはらせり。この滝のことは、さばかりともかねてきかざりしに、おもひの外の佳境なるに、日数ながきこたびのみちすがらも、かゝる幽邃の境なれば、ことにめとまりて、かくうらをみる滝は、よにたくひすくなかるべし。造化のしわざばかり人心もてはかりがたきものはあらず、などおもひつゞけらる。

心あらん人にみせぬをうらみにて詞およばぬ滝のさまかな

たちぬはぬ衣にはあらでこの滝はうらもありける布とこそみれ

よとゝもに何をうらみの滝なればくだけて玉のちりみだるらむ

たえまなく岩もる水に袖ぬれてそばみちつたふ滝のもとかな

声きよくかけわたしたる玉すだれ朝日のかげをすかす岩がね

日はさゝぬ岩陰ながら菅笠をぬがでうらみの滝のしぶきか

このあたりの山の岩には、「なにの国のなにがし何月何の日きたる」といふことを、ひまなくかきしるしたるを見て、供のをのこがおなじくしるすを、やうなきことゝしかりて、「さらでも、所せきまでかきしるしたるが、うるさきを」といふものから、よくおもひ見れば、つたなき詩歌など題せしよりは、なか／＼にめやすかるべし。

さて、行者堂までかへり、そこよりみちをかへ、柴橋をわたりて、すぐる山路に、よにから松といふ松どもいとおほきもめづらし。ひろきみちにいでたるは中禅寺みちにて、水沢ミツサハといふ山里なるが畑

などもあり。こゝより坂をのぼり、金剛童子堂といふが左にありて、たゞかさ木ばかりなる鳥居たるは、かたちめづらし。

それより谷川を左にみるあたりにいづるに、その山川のさま、帯ひきはへたらんがごとく、あるは青く、あるは白く、一すぢにとほくみやらるるは、世はなれたるさまなるに、川むかひの山には、とがの木しぐろきまでしげりたる中に、かのやしほつゝじのひまなく見ゆるは、いひしらぬながめ也。すぎこしみちより左のかたなる山には、この花のすべておほかるが、このあたりは又ひとしほのながめにて、かのから人の「溪水清漣樹老蒼。行穿溪樹踏春陽。溪深樹蜜世人処。惟有幽花渡水香」と天童山にてつくりしさまもめのまへなり。

この谷川の上に一むらみゆる山ぎとは、馬^{ウマ}婦^{ガヘリ}といふところにて、やうくそこにいたれば、茶屋あり。ものなどくひ、蓬のもちひをもくふは、山里めきてをかし。この茶屋の庭に、わざとつくりまうけたるにあらで、ほそき滝のおつるは、おのづからなれば、なかくによしありてみゆ。鉢石町よりこゝまで二里といへど、うらみの滝にまはりて三里にちかしといふ。

この村はづれに男体権現の鳥居あるを入て、右に妙見大童社といふがたゞせ給ふ。柴橋を二度三度わたり、谷川を右になし左になしてゆくほど、みちのかたへは大石かざかぎりもなくおきならべたるやうに見ゆ。このあたりを、みさはといひて、左の山に深^{ミサハ}沢の滝といふも見ゆ。こゝよりは、かの大まなこ・小まなこ山のうらをのぞみて、その山の岩のたゞまみもおもしろきに、男体山はたゞむかひなり。この山を黒髪山ともいふよしきゝて、

峰たかき黒かみ山をめてかけてしばくわたる谷のしばし

いたゞきにしろくも雪のつもりけり黒かみ山は老にけらしな

鳥居より八丁の間平地にて、制札たてるあたりより石階をのぼり、地藏堂、あるは女人堂ともいひて、女人結界なり。

やゝのぼりて、尾のうへに橋のごとく欄干めきたるものをつくりたるところありて、こゝより方等・般若トウベンニヤといふたすぢの滝右に見えて、般若滝はいと大きな滝なり。その欄干めきたるものにしりうちかけて、いこひがてら目をよるこぼしむ。

立よらでたゞこゝながらみすつるはうとうや滝のわれをおもはむ

音なくばさらせる布とおもはん。。にやまどよもしておつる滝つ瀬。。

又すこしのぼりて左のかたに、ほそき滝見ゆれど、こは名もなき滝なりといふ。

かの地藏堂より十二丁にて中の茶屋といふありて、まへに宝篋印塔たてり。これより十二丁又ものぼりて不動堂あり。

こゝまでの坂路、甚けはしく、汗しとどにあへて、はだぎひたとぬれたるが、こゝにいこふほど、山風さとふきいでつゝ、はだへにとほるは、いとこゝろよし。あたりの山に、そこかしこ雪もみゆれど、すこしもさむさはおぼえず、さぞ山上はさむからん、とおもひて、衣ども用意し来れるは、いたづらごとゝなりて、供のをのこのかたをなやましつ。

この不動堂は、いとたかき所なれば、すぎこしみちよりは、足尾山・かば山などみえしあたりもありしが、かたくりの花は、ひまなくさけり。こゝより男体山、右にたかくそびえて見るが間に、雲のかゝりなどするさま、めづらし。

こゝよりは又平地にて、左右の木どもにひまなくかゝれるものゝ名を案内者にとへば、「さるがせ、といふもの世」といふは、日かげのかづらのことなるを、今禁中にて御神事の時もちひさせ給ふ日かげのか

づらとはことなり。

この平地の間十二丁にて中禪寺村にいたるに、かたへに湖いとひろきは芦の海のたぐひにて、かゝる山の上にかゝる湖のあることあやしきまでにおぼゆ。湖のほとりは高山どもそびえ、うたの浜といふは、むかひのかたなるよし。こは『廻国雜記』に、はやく「うたの浜」とその名いでたり。又むかひのかたに島ありて、そこには薬師堂たてるよし。その島は岸につきたるやうなれど、八丁岸よりへだゝれるよし。むかひのきしもこゝより、はたはひわたるほどにちかくみゆれど、一里なるよし。水路はすべてそのほどよりちかくみゆるが常なれど、さはみえざるをや。「この湖には、木葉一うかまず、魚一すまざるが、ふしぎ也」と案内者いふ。こは、ふるきいひつたへなるべし。そのことを『続古事談』に、はやくみえたり。

みづうみのふかき心をならへかきよきにすぎて魚すまずとも

おもしろくなく驚の歌の浜たゞいたづらにわれはみてのみ

行屋ギョウヤといふが立ならびたる中をすぎて湖のほとりにいたり、手水・鶴飼して、からかねの鳥居を入、護摩堂・観音堂などを、がみ、日荒権現の御前にぬかづく。こは俗に日光の奥の院といへり。みまへにうづたかくかきあつめたる雪ありて、いまだきえざるを、案内者、手にとりて、一口なめよとあたへたり。

御まへにし横山のごとたかなすは初穂にあらぬ雪のしろたへ

おもひきやみちのおくにてわかれたる雪をふたゝび手にふれんとは

この御社にとなりて鎖かたくしたる門ありて鳥居もたてるは、男体山にのぼる入口なるよしにて、こはとしごとの七月七日に一度のぼるがさだめにて、そは行といふをせずしては、のぼりがたきによりて、その行する人々のために行屋はたてる也とぞ。こゝに、としぐのぼりし人々のかずをしるしたる塔婆たて

るが、一昨年のは四千余人としるしたれば、行屋おほきもことわり也。「昔は、はつか三人四人なりしよしなれど、今は、かくこよなく人数おほし」と案内者のいふをきけば、今のよの人は、すべて、はらきたなく、分にすぎたる栄をもとめ、たゞ欲心ふかきより、神仏にこびてかゝる苦行をもなすならん、とあさましくおぼゆ。

勝道上人の碑といふもたちて、こは『性霊集』に見えたる空海の文をゑりたり。大塔といふを見、別所ベツショといふまへをすぐるに、ねぢ棒のいとかめしきをかざりたるがあやしくて、案内者にとへば、こはかねてその名をきける「日光ぜめ」の道具なるよしいふ。この「日光ぜめ」といふは、強飯たかくもりて、「くらへく」とすゝむる行事あること、人のよくしるところ也。食物をしぶることはあるまじきことにて、われいたくにくむことなれど、かゝるためしきへあるをおもへば、猶しぶるかたがよろしきか、心得ぬことどもなり。

こゝにても、かのかさ木なき鳥居をくゞり、牛石といふを見、もとのみちをしぼしかへり、御巫石ミコイシといふがあるほよりほそみちを入、華嚴の滝にいたる。この滝は、湖の水あふるゝが谷川にいで、その末滝となれるなれば、去年よりして湖の水すくなきによりて滝はおちず、としぐゞ四月よりして八月までは、おほかたおつるならひなるを、去年は一年の間おちざりしよし也。「この滝は、かくをりぐゞ水のためあることあるが、あかぬところにて、そのことだになくは、よにもすぐれたる滝なり」といふも、げにさることにて、岩むらのさまげをそろしく、かしこよりおつといふ水口のさまも、よのつねならず。濁水にて見ざる人おほきよしは、たゞよそののみきゝたりしが、われもそのをりに来あひて、いとこのこりおほし。

立よりしかひもなければわがためはこれをうらみの滝といはまし

そめがみの名にながれたる滝もあり法の声する鳥ばかりかは

とよめるは、この山に慈悲心鳥といふがすむよしきよてなり。

(付箋)

「アゴンハ裏見滝ノ一名
トモイフ。考ベシ。」

又あごんの滝といふもあれど、そこには心やすくゆきがたしとぞ。

さて、この岩むらの下のかたに、ほそき滝のおつるは、滝の水、地中をくぐりて、かくはおつるなりとぞ。滝壺といふべきあたりは見えがたく、たゞなゝめにみおろして、かたへにさしいでたるあたりよりのぞむ滝にて、見あぐることはなりがたければ、水ねのたゆる外に、これをもあかぬところといふべき滝なるべし。こゝによるは五丁のまはりにて、かけぬけにいでたるところより不動堂にちかし。

おなじ坂を馬帰にくだるに、くだり坂はなかくにわがえざるところなれば、例のことになやめり。

かくてかの水沢より、こたびはたゞにゆきて清滝村キヨタケといふにいたる。清滝の観音といふがありて、堂のいらかも、ものふりたり。村の出はなれに清滝権現とまうすもたゞせ給ひて、杉の木立ものふり、滝もあり。

それよりすこし坂をのぼり、又くだりしほしゆきて右の細みちに入、大谷川の川上のはしをわたり、みちもさだかならぬ山にいるほど、鶯鳴たり。

花もなきあたりをしくきよなしつうばらの中の鶯の声

すこし山にのぼり又くだりて、川にそひゆくほど、岩波たぎちながれて、こゝも白く青くきよらかにみゆ。やゝゆけば、けさみし大日堂川のむかひにみゆ。そこよりほどなく杉の村立ある中にいれ(前)ば憾カンマン捨といふところにて、林道春先生の文をゑりたる碑たてり。又梵字をゑりたる碑もみゆ。石仏のいとおほくならびたてるあたりをすぎ、かんまんが淵といふにいたるに、川中にさしいでたる大きな岩を弘法大師硯石といふは、俗なる名なれど、岩のさまはおもしろし。靈庇閣レイヒといふもそのほとり

にて、このむかひのきしに石の不動尊たち、その下なる岩に憾捨の梵字ゑれるがみゆるは、弘法大師の筆なりといへど、かゝるたぐひをすべて弘法といふがつねなれば、もとよりうけがたし。こゝはその外にも奇石怪巖いとおほくそばだち、川のながれはすこしせまりて淵となり、あるは滝のごとく水勢いといさぎよく、甚佳境なるに、あやしき石仏あまりにおほく、かの道春先生の碑たてるは骨塔なれば、かたぐゝあたら風景をうしなへり。「死在岩根骨又清」といへる人にみせなば、よろこびもすべけれど、かゝる塔はなくもがな。されど碑文は仏氏にへつらふところなくかゝれたるは、さすがなりけり。

たにきよくたゝへし水に心をもすゝかんまんの淵の岩むら

底ふかくみどりたゝへし岩淵の岸にもおなじ杉のむらだち

ゑりつけしあよきの文字は滝川のながれてとほく名こそ聞ゆれ

こゝより赤棚山アカナギといふ高山もとほくみゆ。慈雲寺といふ寺もこゝにつゞきて、こゝをなほ哈満カンマンといふ。杉の並木の中をすぎ、橋をわたり白川原町といふにいづ。たゞにすれば橋をわたることなくして、みち六丁ちかしといふ。されば、はつかのまはりなれば、かんまんには、かならずまはるべし。

板挽町イタヒキ・下河原などいふあたりをすぎ、かたへは岩にて、棧道めきたるあたりあるを切通しといふ。かくて、ゆくさにわたりし仮橋をわたり、宿りにかへれるは申の刻するほどなるが、ほどなく小雨ふりいでたり。山にありしほどより空くもりしかば、ひたもの道をいそぎしかば、みちにてこの雨にはあはざりしこそ幸なれ。中禅寺まで三里といへど、ちかくはあらぬに、まはり所もありしかば、けふのみちゆきゝにて八里もあるべし。宵すぎて雨やみたれど、空猶くもりて暖也。さればかねてきけるがごとく、こゝをさむき所ともおもはざれど、かの十三日の雪は一尺ばかりつもれるときくに、寒おしはからる。

廿四日。日よし。朝とく案内者つれて御神廟にまうづ。入口の鳥居は黒田長政主の寄附にて、そのふとく大きなること目をおどろかせり。こは船にて南海をめぐらして、こゝにおくられたるよし、銘をゑりつれたり。阿蘭陀国・朝鮮国・琉球国などより奉れる灯台のつくりざま、よにめづらしく、朝鮮のかたには葵の御紋を鑄つけたるも、神徳のいちじるきをあふぐひとくさ也。

東照神の光は西までもとほくかゞやくともし火のかげ

二王門より入て陽明門といふを入、御まへちかく拝し奉るは、おほけなきこゝちしていとかしこし。

久能よりうつりきましてふたら山ふたゝびよそに神はうつらじ

かしこしなをさまれるよはふたら山二百年にあまりけるかな

かずならぬ御民われらも手むだきてくらすは神のめぐみなりけり

世に「日光をみずは、結構といふな」といへるものしく、宮殿すべてもることなく、善つくし、美つくして、いたりふかく、月もかゞやくばかりなるは、いはんもさらなれど、つらくおもへば、応仁以来、さしもみだれて、武備のみにてはをさまりがたかりしを、御徳をもてしづめ給ひて、式百余年が間、弓は袋にいり、太刀はさやにをさまれる、四海太平の基をさだめたまへる御功にくらべては、めでたしといはんは、なか／＼なるべし。すべての御さま、いやしき筆にかきけがさんは憚あれば、しるしつけねど、西山公の駒籠林中に遊びてつくらせたまへる御詩の句中に「遥拜上野東照廟。歎息両部習合神。爰以麴食換肉食」とあるをおもひいづれば、いはまほしきことなきにあらず。

さて、御廟の山に桜の咲たるを、

ふく風もをさまるもとの神垣をかしこくしめてさくらなりけり

はじめみのこし朝鮮国よりたてまつれる鐘といふをみるに、李植といへる人の銘にて、手蹟すぐれてみゆ。

それより相輪塔といふにいたるに、めもかゞやくばかりなり。日光権現の御社といふも、めでたきつくりざまにて、地主の神どもまうすといへば、『式』にみえたる「二荒神社〔名神大河内郡〕」なるべし。大猷院殿の御霊屋をも拝するに、御前に又、朝鮮国より奉れる灯笼ありて、こゝなるは、かたち、よのつね也。それより御本坊の御殿を拝見するに、御ふすまの画、御張附の画どもめでたくみゆ。御庭は池ひろく、松の木立もゆゑひよしあるに、黒かみ山をつき山のごとくみるやうにつくりなしたるが、ことにおもしろし。本宮とまうすにもまうづるに、これも地主の神とまうして、新宮・本宮・滝尾の三社をおなじつらにいへど、今日光権現とまうすをおもへば、さきにもしるすごとく、『式』にみえたるは新宮の御ことなるべし。もとのかりはしをわたり宿にかへるに、みちのほどはさばかりとほからざりしも、かたぐゝにて時うつりて、午時となりぬ。すべてのさまも、かのはどかりて、くはしくしるさねど、この町は、たゞ参詣の人々をみちびくを、なりはひのかたはしとすれば、宿りの主、よくそのことに心きゝたり。こゝに来らん人は、宿りの主にまかせて御神廟・御石の間、大猷院殿の御霊屋・御本坊などもめぐるべし。かくてひるいひくひて、霧降滝見にもせんとす。御神廟・中禅寺などは、この町より西にあたり、この滝は北よりすこし東にあたりて方角たがへれば、ふりはへてゆくになむ。案内者さきにたて、宿りのかたはらなる細道を入、川をわたり、たかゝらぬ山を、あるはのぼり、あるはくだりて、又川をわたり、又も山をのぼりくだりす。さばかりけはしき坂はなけれど、小石がちなるみちにて、あゆむにくるし。さて、松一木あるあたりより小だかき山にのぼれば、その滝はたゞむかひの山の間よりおちて、おもひしより大きな滝にて、上のかたは一筋なれど、二段となれる下は、いくすぢにもおつるさま、いはんか

たなく、あたりの山には、かのやしほつゝじひまなくさけるも、甚風情をそへ、岩のたゞまひも画にかけらんやうなり。

こゝにて先、汗をぬぐひ、けぶりをふくに、鉢石町の人もにて、案内者のしる人なるよし。わりごひらきつゝ、酒のまんとすめるは、滝のみならず、こゝはよものみわたしもよければ、かたゞこゝに来たれるなるべし。かゝるあたりにちかくすみて、わりごひらきに来たれる人のうらやましきよ、と心のうちにおもふほど、その人ども、その酒あたゝめんとて、落葉ひろひあつめて火たかんとするに、つけ木わずれ来にたり。「いかゞはせん」といふを、かたはらにてきくも心ぐるしきに、われ旅にては、いつも頭陀ぶくろめきたるものを首にかけ、その中につけ木を用意すれば、そをとうでゝあたへたれば、ことの外によろこびつゝ、とみに酒あたゝめつゝ、そのむくひなりとて、盃をさしたり。もとより酒はいみきらへど、「林間に酒をあたゝめて」とうちうめかれて、いと趣あれば、しひても辞せず。一盃をかたむけたるに、わらび・山うどなどの塩からき煮染を「御肴に何よけん」とて、はさみたるも、美肴にまさりて風流なり。うちとけてみだりがはしきは酒の弊なれど、かくしらざる人のたちまちうちとくるは、^(は)た酒の徳とやいはまし。かくて、そこより、いとほそきみちをくだりて滝のもとにいたらんとするに、石たかく、栗のいがおほく、なやましきに、落葉さへひまなくちりつもりたるがあたりて、足のふみどころさだめがたく、からくして滝のもとにいたるに、その間六七丁あり。鉢石よりこの滝まで一里半といへど、すこしとほし。

滝のもととは滝壺なく、ひろき谷川にて、ところづくに大石あれば、そをとびこえて、こゝやよきみどころならん、とおもふ石にしりうちかけつゝ見あぐれば、こゝよりは半よりうへはみえねど、半より下のさまは、かのうへなる山よりみしさまにまさりて、きよくうるはし。岩はたとへていはゞ、尾さきながくさしいでたる山のごときかたちして、そのうへよりなゝめにおつる水のまま、滝壺におつる滝のさまにかは

りて、はげしからず、なだらか也。その水、いくすぢもみだれつゝ、うすものゝごとくみゆるによりて霧降とはいふ也ともいひ、又水けぶりを霧によそへたる也ともいふ。

落たぎつけぶりは空のかすみよりちへまさりけるぎりふりの滝

つゝじ花さかずは秋のこゝちして春日わすれむきりふりの滝

春の日にみにこしわれは霧降も霞の滝といふべかりけり

から国の桃の源おもほえてつゝじ花さく滝の岩がね

くれなるの八しほの花のたえまより色もはえたる滝のしろたへ

滝のうへなる岩に不動尊ゑりつけたるもみゆ。こゝにあるほどは何ごともおぼえず、たゞ滝のかたのみあふぎ居たるを、「春の日ながらも、又ゆくさきあり」と、とものをのこにうながされて、もとの坂路をのぼるに、けはしきになづむと、たきのかたみかへりがちなるに、いくたびも杖をとどめて、やうくうへなる山にのぼり、それよりもとこしみちを宿りにかへるほどは、みちもめづらしからねば、にはかにつかれをおぼえぬ。宿にかへれば未の刻すぐるほど也といふ。

この所のうち、おほかたはみつくしたれど、寂光滝と滝尾権現とに、ついであしくて、えゆかざりしと、華巖滝みざるがのこりおほし。

かくて鉢石をたちて、今市ちかくなれる杉の並木のほとりにて、

ちる花の雪あやしやとみあぐれば並木がくれにたてるひとと

足もとにさくらちらずはいたづらに杉の並木とみてやゆかまし

その今市宿の岸や何がしといふものゝ家にやどりぬ。

廿五日。夜ふかく目ざめぬ。又寝しておそくならんことをいとへば、宿の主よびおこして、朝げのことをうながしつゝ、先、戸をやりて空のさまをうかゞふに、星の光ひとつも見えざるは、とくおきたる勢くぢけて、心もくぢけがち也。

朝げしたゝめて宿りをいで、宿をはなるれば、みちのちまたありて、いづれも杉の並木のふりたるひろきみちにて、中に石の道しるべと地藏尊とあり。右のかたは例幣使街道といひて中山道につゞけるみち、左のかたは江戸への本街道なり。われは、鹿沼にかゝり室の八島みん、の心あれば、右のかたにわかれて、室瀬村ムロセといふにいたる。このあたりは杉の並木、ことさらにおひすごひたれば、つねに日影もさゝぬなるべし。一昨日のなごり、みちいとあし。

くだかけのうたふしらべにうちそひて蛙もなくか里のあかつき

けさは、おもひの外よふかくて、みちすがらあふ人もなし。たゞ五人ばかり一むれなる旅人にあへるを、馬夫が「かれは奥州人なり」といふに、「何ゆゑその国のしれたるぞ」とへば、「かの旅人どもは、おもてをつゝみたり。これ奥州人のしるしなり」とこたへたるは、そのみちくゝにてよく考たるもの也。

かくて、夜のほどに二里をすぎ、板橋宿にいたるに、ほのくゝのころなれば、いこふべき家もなきを、やうくゝに火かげみゆる家をつつけていこひ、地炉の火に手をあぶりつゝ、かたへなる松明の光に茶をすゝるほど、夜はあけはなれぬ。

この宿より一里にて文挾宿フキサキにいたるに、名は何とかやみやびたるやうなれど、あしき宿なり。この宿をはなれ、大谷オホヤの観音といふにまうでん、とて石の道しるべあるところより、ちまたを左にわかれ、岩崎村イハサキといふにいたるほど、雨ふりいでたり。

このさとに山吹のさきたるを、

みのかさはかせといはぬを岩崎のさとにあやなくさける山吹

古賀志村といふをすぎ、右に栃久保、左に田野といふ村を見るほど、雨ますくふりまさりたるに、風さへそひて、いとさむし。

おもくなる笠かたむけてふる雨の雫をおとす駒のたつかみ

風はげしくふくたびには、笠もたまりがたければ、手にてさへてゆくに、その手に雫のつたふも、いとうるさく、いぶせし。

文挾より三里にて大谷村にいたる。入口に奥院観音といふ堂あり。このあたりの山、すべてよにめづらしき大岩どもありて、その大岩に石階をゑりて、そのうへに小社のますが、こゝにもあり。すこしゆきて門をいり、その観音にまうづるに、いともく大きな岩の山のごとくなるうへに、をかしき枝ぶりなる松などもおひたる、そのかげに堂をたてたり。その堂にのぼりて開帳さするに、御像は丈六にて千手観音なり。住僧は「弘法大師の作」といへど、かゝる仏像、又はあやしきことなどを、なべて「弘法く」といふ例のならひならん、とうけがたけれど、いとふるき御像にてよく心とどめてみれば、こはかの大岩のもとにたゞにゑりつけたるにて、そを本尊として、この堂はたてかけたる也けり。その堂の横にも堂ありて廻廊つき、そこにいたれば、そこにも仏像をゑりつけたるが、いづれもふるく見ゆ。又堂の右に、岩屋とも、さかぐらともいふ洞穴もありて、すべてよにめづらしきあたりなれば、かならずまはるべきところなり。されば、日光御門主も、をりくこゝにあそび給ふよし。御茶屋などもあり。

めづらしき大石おほき大谷寺おぼろげにやはみてすぐすべき

前なる茶屋にてものなづくひ、地炉にあたれば、主が「あまりにきたなし」といふに、よしやきたなくとも、

雨さむき日は、なによりも火こそめでたけれ、とてぬれたる衣かわかしつゝ、自在の茶を手づからくむも、中々にをかし。かく雨にあへる日ばかり、旅にてもものうきことはあらねば、家こそきたなけれ、雨のうさしらずがほなる主は、うらやまれてなん。

すぎしみちの間に注連を張、それに草履・蓑などをむすびつけ、藁の人形をむすびつけたるがありしが、いぶかしきを、主にきけば「疫神除なり」といふ。

さて、五丁ばかりも、もとのみちをかへり、石のみちしるべたてるあたりより左にわかれて、栃久保・古賀志村などをすぐ。こは、ひろき村にして、さきはその名をしるせしあたりとは、ことゝころ也。武子村タケシといふをすぎ、街道にいづれば、やがて川ありて、そをわたり鹿沼宿カヌマにいたる。こゝまで大谷より二里もあり。さればこの大谷観音は、本街道とこの街道の真中にて、徳次郎宿トクヂラよりまはるもおなじことにて、およそ二里あまりのまはりなりとぞ。

この鹿沼宿の入口に八重ざくら十本ばかりもたてるが、さかりにみゆ。

八重ざくら花うるほひてさとかをるかぬまのさとの春雨のそら

上殿村カミドといふにいたれば、光明寺といふ寺あり。榎山村エノヤマといふにいたれば、出流観音イツルといふにゆく道しるべの石あり。これも、いとあやしき岩あるところ、とかねてきゝしかど、みちとほければ、さまではえたづねず。

鹿沼より一里八丁にて那佐原宿ナサハラにいたる。この間、除地などありて、みちとほし。十丁にて榎木宿エノキにいたれば、雷電宮といふが左にませり。この宿は、のぼりの宿、那佐原はくだりをつぐ宿なり。このあたりにては、方角にかゝはらず日光のかたを上といふ也。

この榎木の宿はづれに壬生のかたにゆく追分あり。日光街道の、かくところぐに追分おほきは、御社

参の時のために、かくいくすぢもみちあるなり、とてこゝより江戸にいづるは、日光より三十四里にて、宇都宮のかたにゆくより二里ちかしといふ。栃木へまはれば一里のまはりにて三十五里なりとぞ。

そのちまたを右にわかれ、磯村・亀和田村などいふをすぐるに、このあたりは時候もはやきなるべし、麦穂はやいで、菜花は盛すぎたるほど也。そのほひの雨に打しめりて、そこはかとなく、かをれるのみ、雨もなか／＼風情あり。

春雨に麦の穂波もうちしめり菜花かをる畑の中みち

をぐら川といふを船にてわたり、金崎宿にいたれば、楡木より一里八丁なり。輪久井村・金井村などいふをすぎ、家中村といふより左に入、室八島にゆかんとす。

案内がてら金崎にて馬をやとひしかば、口とりをしるべとしてゆくに、近みちなるよし、畑の中のかよぢぢばかりなる細道をすぐるに、馬は麦をあさがちに、口とりもあつかひかねたるに、いまだ日たかゝらんとおもひしも、雨の日のならひ、はやくもをぐらくなれば、たゞ馬をいそがしつゝ、ゆけどく／＼はてなくして、そこかしこに村どもとあれど、村の名もとひあへず。やう／＼ひろきみちにいづれば、惣社村也。こゝまで金崎より一里半あまりもあり。

この村はづれに大神神社といふ石のしるしあるところより、右に一丁あまりゆき鳥居を入ば、森の木立、甚木ぶかし。こゝは、うらのかたにて、みやしろのうしろなるが、半丁あまりも森の中に入て御前にいたるに、「正一位惣社大明神」といふ額かゝりて大社なり。

この御前のかたはらに水あせたる池ありて、中に島めきたるもの八あるに、ちひさきはしをかけて、そを室の八島なりといふ。こゝは、よゝの歌人のいひふるせしのみならず、源経兼がこの国の守なりし時、あるものゝ使書持てこしが、かへるをよびとどめて、この島のけぶりをみせて、「都にてかたれ」といひ

しほどの煙なりしに、今はそのなごりばかりも見えず。さいひしむかしも、まことのけぶりにはあらで、清水のいづる水気のけぶりに似たるをいへるなりとかや。

名のみたつ室のやしまを来てみればたえけるものは煙なりけり

こゝにきて見ればけぶりはあともなし故郷人になにとかたらむ

恋をする人はなにゝかよそふらん室のやしまにけぶりをたゝねば

はかなしやこゝにもけぶりがぬよにおもひの家をいでかぬるひと

雨の日に来てみざりせば水けぶりいとゞあとなくなりやはてなむ

かくはよめれど、むかし室の八島といひしは、こゝにはあらで、すべてこのちかきあたりに卒島村・

萩島村・高島村・沖島村・曲島村などいふをはじめ、そのほかにも島といふ名の村ありて、それを「む

かしのなごり也」と里人いへり。八島は八つの事にはあらで、数おほきをいへるにうたがひなければ、

このつたへ、まことにて、むかし八島といひしはひろがりけんを、煙などもたえて、後この御社地に

かゝるかたちをつくりしなるべし。このやしまにおふるさゝ葉のことにつきて、なにとかやあやしき

ことあるよし、案内者がいひしかど、耳にもとまらぬことなれば、わすれにたり。

さて、この御社の御ことを、大神々社とまうして額もかゝれゝば、『式』にみえたる「大神社〔都

賀郡〕」なるべし。こたびは、この惣社村よりして、ひろきみちをたゞに栃木のかたにゆく。「このみ

ちのひろきは、いかに」ときけば、「こは、壬生より栃木にかよふ大路なり」といふ。あめふる日は、

あゆむもくるしく、はた馬上もやすからぬに、日さへはやくれかゝりたれば、村の名どもゝきゝあへ

ず。よきさとにやうくいでたるは、古宿といふ村にて、それより栃木にいづれば、例幣使街道なり。

惣社村より一里あまりあり。されば、この室の八島にまはるは、半みちあまりのまはりなりとぞ。

(付箋)

「とち木宿のならひ、馬をひきいれて蔵前につなぐやうにせり。これ荷物出しの便よきため也。この家のさまも分かり、馬士はしる人のよし。この家によどれり。」

この栃木トチキはよき里にて、こゝに釜屋新助といふものゝ家にやどりぬ。こは、ゆゑありて、われと主従のちぎりあれば、家にかへりたらんがごとくにおぼえて、心もうちとけがちなり。かねてより、こたびのかへさには、かならず立よらん、といひやりおきしかば、まちまうけたるあるじぶり、いとあつくして、わがさけきらふことをよくしりたれば、心になうやうに、よくこゝろをもちひたり。

こよひ河内屋ながし・釜屋ながしなどいふをとぶらひぬ。こは、なりはひのことにつきてしたしき家にして、かねてしる人なれば、「一日は、せめてとどまりたまへ。大平権現オホヒラの御山には、さくらあれば、それをみせまほしくこそ」などいひいでつゝ、おのがすむあたりの名所を人にほこるは、田舎人の常なれば、その詞にしたがひたるこそよかんめれ、とおもふものから、かへさをいそぐよしいひて、しひて辞しぬ。

この大平権現とまうすは、この宿の氏神にて、鰻をこのませたまひ、氏子は一生むなぎをくはず。くへば、たちまちたゞりあるよし。この宿中の溝川には、むなぎおほくすめれど、そをとる人なく、人にもをそれずといふ。「この神はもし『式』に見えたる「大前神社〔都賀郡〕」にはあらざるか」とへば、「大前村オホサキといふが、このちかきあたりに、べちにあり」といへば、その神は、その村にこそおはすらめ。文字のすこし似たると、よび声のちかきよりして、かれはこれなるべし、とおしあての説をいふが、古学者といふものゝ常なれど、そのさかいにいたらざして、文字とよび声のうへのみにて、さだむることのおほやけならぬは、この一事にてもしられたり。

十三日の雪のことをきけば、このあたりはふらざるよし。日光にてもふれりといふに、はつか十里のたがひにて氣候のたがふも、あやしきものぞかし。伊吹山のことをきけば、「こは室の八島とほからぬあたりにて、しめじが原は、宇都宮宿ちかきあたりにあり」といへり。

さて、この国の足穂の庚申山は、奇石怪巖おほく、石橋などもあり。又裏見滝などいふもありて、甚、奇境なるを、ちかきころまでよにしる人なかりしを、ちかきころ八島何がしといふ人の『猿著聞集』、滝沢解が『里見八犬伝』などに、その山のことをつまびらかにしるし、又『北斎漫画』『日光山志』などには図をあらはしてより、好事の輩の、まれにゆくところとはなりぬ。この山かねてゆかしくおもひしかど、こたびはさまでは、とえゆかねど、そのことをこゝにてたづぬれば、みな人よくしり居て、この宿より十里ばかりありて、みちはあしきよし。近来は、ゆく人もをりくありといふ。

廿六日。雨猶ふりしが、やどりをいづるほど、雨やみたり。あるじ、よべより心がまへして、野木宿まで駕籠にておくらするは日ごろ馬にのりしにかはりて、いぶせきかたもあれど、あやふげなければ、心もおだやかにて、かつはめづらしくさへおぼゆ。

さて、日ごろ馬にのりしは、われもとより、さのみ足よわからねど、もしふみたがへなどして足をいためなば、楽うすからんことをとそれて、足つかれぬにも、をりくは馬にのりしなるが、こはさきにもしるせるごとく、駕籠なき街道なれば、かくはなせしものから、このましきことにはあらざるを、日ごろのりなれては、はじめのることのふつゝかなりしも、いさゝかそのわざをえたるは、をかしくおぼゆ。その馬の数は、さはなりしが、いとさまぐにて、勢あり力あるもあり、よわきもあり、中にはわがのれるをさきにたて、そのあとに二疋も三疋もつなもてつなきて、馬夫ひとりして口とりゆくは、むげによわき也。その勢あり力あるは、あゆむことすみやかなれど、くせありておそれなきにあらず。勢あれど坂をのぼる時は、いとしづかにあゆむは、巧者なるたぐひ也。よわきは害なきのみにて、あゆむこともをそし。人のうへにも似たるものかな、と今さらおもひあはさる。

この宿は、よべいへるごとく、いとよきさにて、にぎはしく、宿の中に溝ありて、それにむなぎおほし、とよべきけれど、いまだ泥にひそみ居るにや、見えず。この宿のみならず、かく宿中に溝川あるは、奥州街道のならひにて、中街道・浜街道ともに、おほかた宿々はかくのごとくに、溝川なきはすくなし。かくて沼和田村といふをすぐれば、筑波山、雲のたえまに見えたり。

青麦の穂波の末に又青くめにつくばねぞ雲のうへなる

日光山もかへりみられて、くろかみ山は、なか／＼にたかくなれるやうにおもはる。かの大平権現のいますといふ山も、左にちかくみゆ。牛久村といふをすぎ、横堀村といふにいたれば、岩船山といふがみえて、尾上に並松あり。こもあやしき岩ある山なるよし。出流・岩船とてよに名だかければ、ひとつところにて、さのみその間へだゝらじ、とかねておもひ居しに、おもひの外その間のとほきは、これも地理のことの、そのところに来らずしては、しれがたきたぐひ也。

それより高島村といふにいたれば、かの八島のうちのひとつ也。小林村・本沢村・伊岡村などいふをすぎ、鏡村といふにいたる。

老せぬといざ見てゆかむ鏡村旅のやつれにあかつきぬやと

中里村といふをすぐれば、かの岩船山、ことによくみゆ。寒川村といふは、かない村ともいふよし。この村のうち、道の右のかたはらに「胸形神社」といふ額かゝれる御社おはしますは、『式』にみえたる「胸形神社〔寒川郡〕」なるべし。新波村といふにいたるほど、みちのかたへに藤の花咲たり。

藤の花見てぞしりぬる春もはやのこりすくなくなる日かずを

旅にてはしらですぎしをゆく春とうちおどろかす藤波のはな

白鳥村・生江村などいふをすぎ、船わたしあるを、生江のわたしといふ。

なま江川なま船人のとる棹にむかひのきしはとほくもあるかな

そのわたしより、ほどちかく野木宿にいづれば、江戸より日光にかよふ本街道也。こゝまで栃木より五里といへど、^(と)ほし。この宿にて高機といふをおる家、これかれみゆるは、ちかきころよりはじまれることとぞ。

こゝにてものなどくひ、宿を出はなれ、並木の松の左のかたに又一すぢの並木長くつゞきて、木ぶかき神の御社おはしまし、「正一位大明神」といふがくのかゝれる鳥居、みちのかたはらにたちて、野木大明神といふ。この御社は祭神の説、さまざまあれど、さもやとおぼしきことをきかず。もとより『式』に見えぬ御社なれど、鳥居・並木のさま大社と見えたり。『式』に見えたる神の今はあとなきもあるに、式外の神の大社なるがよにおほく聞ゆるも、ことわりばかりかたきもの也けり。又この野木宿に、源三位頼政ぬしをまつりし御社もありといへり。

すこしゆきて下野国都賀郡と下総国葛飾郡との境をしるしたる榜示たちて、今ゆくさきは下総国なり。野木より廿五丁にて古河宿なり。「まくらがのこがのわたり」とよめりしは、このところのことなるべく、後に成氏の居城とせしも、このところなり。今は土井何がしどのゝ館あり。

大堤村・^{オホツ、ミ}茶屋新田村などいふをすぎ、^{ナカタ}中田宿にいたり、この宿より利根川を船にてわたる。船人は、いづこのよりもことさらに、にくさげにて、とみに船をいささず時うつさんとするを、べちに錢をあたへてこぎいさするに、川巾いとひろし。渡場よりすこし下のかたにて、流二すぢにわかれ、ひとすぢは江戸のかたにながれ、一すぢは銚子のかたにいづといへり。

刀根川のさゝはわけねど旅衣袖やるゝまで日をかさねけり

この川は下総と武蔵の国境にて、一日のうちに三国の地をふむも、をかしき旅のならひぞかし。

『万葉』。

その船のうちより又雨ふりいでたり。むかひのきしに栗橋御番所といふが左にありて、鎗・さすまたなどいふものをいかめしくかまへられたるは、よそめもかしこし。こは女ばかりをあらためらるゝ番所にて、ゆきゝの人は名のらですぐる也。御番所つゞき、やがて栗橋宿にて古河より一里廿丁なり。こゝは月のはじめ人馬をつぎ、中田は月の末に人馬をつぐといふ。

小右衛門村・外国府間村・高須賀村・内国府間村などいふ村をすぎ、幸手宿にいたれば、栗橋より一里也。上高野村といふにいたれば又追分ありて、右は日光への御成街道、左は江戸への街道也。上にもいへるごとく、かくのごとくに、ちまたおほくして、日光街道は甚まぎらはしくおぼゆ。

茨島村といふをすぐれば、左右に柳の並木あるは、松の並木の俗なるには、はるかにまさりて、いと見どころあり。

立よれどあやめわかれず雨そひて日もくれかゝる青柳の糸

しばしとて立よるかげに青柳のいとくるしかる雨もわすれて

すぎゝつる杉の並木のそれよりも又めづらしき青柳のかげ

日くれはてゝ、杉戸の宿にいたれば、幸手より一里半なり。この宿の大塚屋なにがしといふものゝ家やどりぬ。

旅やかたこよひ一よとなりにけりあまたのさとをすぎとほりきて

旅まくらうかりしかずをおもふにも一よとなれることのもれしき

廿七日。雨ふる。あけはなれて宿りをいで、清地村・堤根村・本郷村・小渕村・八丁目村などいふをすぎ、粕壁宿にいたれば、杉戸より一里半三丁なり。

備後・大畑・大枝などいふ村をすぎ、上間久里村といふにいたり、秋田屋といふ家に入てむなぎをくふ。この家は家づくりもきよく、庭のさまもよしめきて、牡丹・藤など咲みだれたり。この家のむなぎは、そのあたひいとたかけれど、味はさのみ美にあらず。しかるを、味はさておき、佃のたかきが名物也とて、いと名だかきは、ことわり聞えがたきことにて、名をうりえたるは、かゝる幸ありて、かの偶不偶はわたくしあるよの中なり。

さて、この鰻てふ魚は、魚の中にも、ことさら味を人のよろこぶものなれど、生たるをさながらさきて、口腹のためにいともむぎんのことをなすは、たへぬことにて、むさぼるべきものにはあらざれど、こをくはずといはど、身にあづからぬ殺生戒をたもつに似て、かつは仁者めかして、うへをつくらふにも似たれば、われもとよりくふことをいませれど、ことさらに、こをむさぼるも、はた本意にはあらず。さはいへど、夏ちかしやせぬためにとあらかじめおもひはかりてむなぎくふかな

この家をいづるほど、雨ますくふりそひて、道もいとあしくなれり。

雨衣もとほるばかりにふりくるはまくり手にしてゆけとなるべし

下間久里村・大里村・大林村・大房村などいふ村をすぎ、大沢町といふに入、橋をわたれば越谷宿にて、粕壁より二里三十丁なり。西方・登戸・蒲生などいふ村々をすぎ、草加宿にいたれば、越谷より一里廿八丁也。瀬崎・保木間などいふ村々をすぎ、竹塚村といふにいたる。このあたり、苗代小田のやゝ青みたるがあり。

きてみれば春はやくも竹の塚苗代小田はうすみどりにて

六月村・島根村・梅田村などいふをすぎ、千住宿にいたる。草加より二里八丁なり。

きのふ栃木より関宿のかたにゆきて、夜船にのりて江戸にゆく人のたよりに文つかはしゝかば、江

戸よりして、むかひの人々この宿まできたり居て、まちまうけつゝ、時めきがほなるも、いとうれし。

日光をすぎしよりは、氣候もさすがに常のごとくなれば、江戸あたりの花は、はやく盛すぎぬらん、とかねておもへるものから、猶ゆかしくて、その人々にとへば、「はやくさかりはすぎて、十五日あたりさかりなりき」といふ。江戸にはさしてみるべき花もなきこと、もとよりにて、わがしる人なる谷文晁は、江戸の花をきらひて、すみだ川の花などの、ことさらにぎはしきをにくみ、としぐかならずみざるよしかたりしを、うべなり、とはやくおもひしかど、わがふるさとの花には、さすがにまさりたれば、花盛にあはざりしは、のこりおほし。ことしは二月の末より三月の末をかけし旅なれば、ところぐの花ざかりにあふべきことわりなるに、辺鄙は氣候たがひて、かみにいへりしごとく、これととりたていふべきほどの花をみざりしこと、かつはめづらしともいふべし。

ことしのみ花をもめず松島の松に心をうつしけるかな

陸奥をめぐりこしまに時すぎて東の花はちりにけるかな

千住の大橋といふをわたりて真土山のまへをすぐ。

うちつけになつかしくしもおもふかなわれをまつちの山にあらねど

この山の名は、いほさきのすみだ川てふ名のにたるよりして、こゝにしもつくりまうけたるなるべけれど、『廻国雑記』にその名すでにあらはれたるを、歌によまじといふは、かたくな心ならん、とおもひてよめるなり。

又も東橋といふをわたり、くれすぐるほど深川にかへりつきぬ。

つゝがなくけふかへりしも家ならばなほいかばかりうれしからまし

さはいへ、故郷より文どもおほく来たれるがありて、つゝがなきことをいひこせるは、いとうれし。陸

奥よりかへれるたよりの、ひたすらきかまほしくまちわぶるよし、したゝめたるは、うべなり、とおもはれて、はやくかへりごとせまほしく、つかれをもおほえず、あまたのふみをよみつ。

まことや、みちのおくといへる名のごとく、ほどほきあたりなれば、あらぬさかひのごとく、よの常の人のおそろゝもことわりにて、浜街道すぐるほどは、もしこゝちそこなふこともあらば、いかにして、かくわびしきあたりに一日もとまらん、さては駕籠なくて馬ばかりなれば、みちゆくことは、なほかたからん、などおもひつゞけて心ぼそかりしを、すこしのつゝがもなかりしは、幸なり。

さて、路費のたくはへなき人は、さがりがたきかたもあれど、路費とゝのふ人は、わがごとくゆかば、ゆるかるまじきにあらねど、半は身をおこたりて、からきをきらひ、半はその身すこやかならでは、うきをしのかぬるによりて、ふりはへゆく人のまれなるなり。われ大丈夫といふべき身にあらねど、身に病なく、おごりをはぶくを心とすれば、うきもからきもよくしのびて、二百余里へだゝれるあたりをめぐり来しこと、うれしくて、ふとおもへば、去年のきのふは、熊野より天橋立かけて旅だちし日なりけり。一年たゝぬまに、天下第一の瀑布、海内三景の、その二景をみしこと、かみにもいへるごとく、たぐひすくなかるべき身の清福にて、そらおそろしきまでおほゆ。かくつゝがなくかへりておもへば、道すがらのくるしみは、ながく笑のたねとなり、名所古跡をさぐりしは、一生の徳となり、苦おほく楽すくなかりしも、苦はわすれて楽はわすれがたし。ゆびかゝなふれば、江戸をいでしより三十一日になれるをおもひて、

三十あまり一のかずをへし日記も歌といふべきことの葉ぞなき

さはいへ、歌はありのまゝに、ところぐゝにてよみすてつゝ、ふかくもかうがへざるなれば、なか／＼に実景にたがへるはなきが、とりどころなるべし。しるせることどもは、およぶばかりは心して、たがへざるやうにせれど、ながき日数のうちには、うみつかれてなほざりにせまほしくおもひしをりもあるを、

灯のもとにて、よごとにつかれをしのび、あるはきたなき宿りにて筆とるも、ものうきをりなどもありしを、しひてしるせしなれば、前後のたがへるもあらん。

はた陸奥は、詞づかひもきゝとりがたければ、いひたがへ、きゝたがへにて、村名などのしるしたがへ、文字のたがひなどもあるべし。心ある人をかたきとせず、むげに心なき人々の詞をもとゝして、名所古跡にもさのみ足をとゞめがたく、道ゆきぶりにしるすが日記のつねなるこそ、よにも心ゆかぬことにはあれ、後にひきなほさば、すこしは聞よくもなりぬべけれど、さては実をうしなはむことをおそれて、いとくだくしきも、そのまゝになしおきたれば、すべての文もつたなきはもとよりにて、いやしくみやびやかならぬ詞がちなるは、今のさまをしるすに、ふるき詞にのみなづみては、そのさまをしるしがたく、昔ありて今なく、今ありて昔なきことどもおほければ、詞をかざればいやしきも、たかく聞ゆるをいとへばなり。記行は雅文・漢文のめでたきよりは、俗にちかきがみちしるべとなすには、たよりよく、貝原翁が『諸州めぐり』(巡覽記)のたぐひを、記行の第一といふべし。されど、その書も、みちすがらのつゞきを、きれぐのやうにしるせるがあかぬやうにわれはおもへば、きれぐにならぬやうにしるせれば、ことにくだくしくなりぬ。体をつくり、ことをはぶきて、詞をかざれる世の歌人の日記は、うちみこそよけれ、みちしるべにはなりがたし。人の謗をおそれては、かりそめにも筆はとりがたければ、わが文の巧拙を論ずる人は、われをしれる人にあらず。名所古跡のたがひ、方角のたがひは、はつか一字にても人をあやまれば、そをたゞさん人こそ、わが知音にはあれ。とるもすつるも、みる人の心にあるべし。歌よみ文かく人の、かゞみにはなすべき意にあらず。われとおなじおろか人あらば、みちのおくかけて、おもひたゝせんためのみちしるべ、と半はこたび苦行してへめぐりたる、ところぐのことを人にとはれむ時、こたへをせんにわすれじ、とての筆すさみ也。

みちすがらわが腰折をたすけしは矢たての筆と杖となりけり

天保十一年といふとしのやよひ末の七日

小津久足

われ、をさなきよりして、歌道にこゝろざしふかく、むげに心なき言葉どもいひちらしたるが、つひに種となりて、たゞ腰折にのみ月日をいたづらにくらしも、廿あまりのほどは、かたはら古学にも志ふかりしかども、ふとうたがひおこりて、古学といふことは、むかしより聞えぬことなるを、近來つくりまうけたるみちなり、とおもひあきらめしより、「やまとだましひ」「まごころ」「からごころ」などいふ、おほやけならぬ名目の、かたはらいたくなりて、私のみおほきその古学の道は、ふつにおもひをたちて、その後は、としひさしく、たゞ歌よむことと、風流のみ、むねとたのしめり。

かの古学にこゝろざしふかゝりしほどは、つねに心は不平にて、身にあづからざる世のさまを、うらみかこちなどして、樂てふことはかりにもしらず、明くれはらだしくのみくらせしも、今はそのなごりもなく、雪月花、山水のさかひにくらせば、心不平ならず、樂いとおほくて、俗臭ふかき本居門には、まれ人なり、とわれからほこらしきまでにて、もし今までも古学をまもりなば、としぐ山水の勝をさぐらず、たゞ机の上のみにみるしみて、井蛙のたぐひとなりぬべきを、幸にして、よしのゝ花、すま・あかし・さらしなの月はいふにおよばず、かの、くまの・はし立をもみめぐりしかど、なほあきたらで、ことしは松島をも、みつくしつ。

そもその松島は、さかひはるかなればなるべし、むかしよりここにてよめる歌すくなく、清少納言が『松島日記』は偽書なれば、いふにたらず。古く能因法師は、きさがたの歌あれば、まつしまをも見けんが、

西行モドリノ名、『廻国雑記』ニハヤク出タリ。

此外ニ富春叟^(註)ガ『東海漫遊稿』アリ。又、宗祇庵香風ガ『東行日記笠ヤドリ』アリ。

(付箋)

「此外『東山志』トイフ記行ニ奥州ノコトミユ考ベシ。」

『奥細道普菰抄』トイフ書アリテ、ミチノタヨリトナレルコトオホシ。

そはしらず。円位上人のみやび心ひろくて、奥州行脚の時、まつしまにてよまれしうたはみえねど、こゝをみられしにはうたがひなかるべく、俗ながらも「西行もどり」の名を、松島の陸路にとどめたり。

そのうち歌人にては、宗久が『都のつと』を、まつしまの記行のはじめとすべし。そのうちは、はるかにくだりて、道興准后の『廻国雑記』あり。ちかきよにては、僧似雲が『窓の明ほの』、古谷辰^(註)が『東遊雑記』、岩倉何がしが『奥羽道の記』、吉田桃樹が『槃遊余録』などあり。

文人にては、橘南谿が『東遊記』、長久保玄珠が『東奥記行』、紀徳民が『松島記行』、半井通が『松島記行』、沢元愷が『漫遊文章』の中なる「奥羽曆」、僧無禪^(註)が『湯殿記行』、僧古梁が『塩松記行』、山口珪が『東奥記行』などあり。

俳人は宗因が『東記行』、芭蕉が『奥の細道』の名文さへあり。その細道の跡をしたひてゆける人も多きよしなれど、記行はすくなくして、北華が『続奥の細道 蝶の遊』、寿鶴斎が『東国旅行談』、玉屑が『東貝』などあり。

なほ、この外にも記行ありや。浅学なるわがめにふれたるは、かくのごとくなれど、いづれも道のほどのしるしやうあらければ、これかれを合せとらでは、しるべともなりがたし。貝原の翁すら、猶かの島の遊びはかきたり。松平樂翁の君が、みやび心も、よにすぐれ給へるゆゑにや、松島にあそびて、よみ給へる御歌『名香の薫』に見えたり。

かの島のことは『松島図』『松島図誌』などいふ書にくはしくしるしたれば、それにてことたれど、かの地にてうるところの図どもは、なか／＼にあらくて、とりどころなし。かの島は、さしもよに名だかきにあはせては、記行なども、かくおもひの外にすくなし。

ことに近來、歌人のゆけるをきかず。こは、むかしの人は受領などのたよりとはいひながら、国々へめ

ぐりて、みやびもおほかたならねど、近来の歌人は、みやびうすく、たゞ机のうへにて、口さがなく古今の歌を、好憎のせばき私心もて、あげつらふことをむねとして、実にかなはぬつくり歌のみをよみ、あは口にのりすることをむねとして、人をあざむき、飽食にふけるから、旅衣かけてもおもひたゝぬなるべし。江戸人には、さすが風流めかしたるもあれど、こもうへばかりをかざれるにて、松島にさばかりとほからぬに、日光山をかぎりとして、そのおくをしらぬ人ばかりなり。「歌人は居ながら名所をしる」といふよのことわざにて、おもひゆるしたる人もおほかるべけれど、かの「千聞は一見にしかず」といふこともあれば、歌人の俗臭おほく、旅をこのまぎるは、はづかしきことにて、仏にこぶる輩が西国三十三所・四国八十八ヶ所・二十四輩などいひて、国々へめぐる志のあつきには、おとれることどもなり。

われは、かの雪月花、山水の趣を愛して、景にむかひては古歌・古ごとをおもひ、歌よまんとては景をおもふことをむねと心がけたれば、世のうた人のかずにこそあらね、みやび心は人なみにすぐれたり。風流をみづからほこる人も、松島までゆきしはおほかたすくなければ、このよしかたらば、はなじろむべきことにて、かの造化のをしむといふ詞もことわりなきにあらねど、半は苦をしのばぬにもよるべし。すべて世人のもてはやす景にも品あるものにて、よしのゝ花はゆく人もおほく、すま・あかし・さらしなの月は、みる人もすくなし。こを位にたとへていはゞ、つきぐゝありて、中にも松島は、ことにいたりたき位にして、大政大臣(オヤ)の位にも比すべきことゝおもへば、旅衣の袖はゆるしの色になれるこゝちしられて、青雲に心をかけぬ身には、このうへのよろこびやはある。権をきらひ、勢をきらひて、世にへつらはず、つねに人にかずまへられぬ身をわらふ人もおほけれど、わが松坂にても、陸奥までゆきし人は、かぞふるばかりもなし。これぞ、よにかずまへられぬ身の幸にはありける。つかへなく、つとめなき商人の身を、はからずたかきに心をかけ、武家をうらやみ、権を愛し勢に乗ずるより、おのづからわが身をくるしめて、ひ

ろき世をあぢぎなきかたにせばくゝらして、みづからの心をもて、みづからの身をしばり、腰をすることを常とすなる愚人は、いふにもたらず。つかへある人は、さがたきゆゑもあれど、商人の身にては、なりはひのひまをぬすまば、漫遊はこゝろのまゝなるべし、とつねに身をくるしめずして、わがごとくに、としくくに山水の勝をさぐり、記行しるすくせあるをも、いとほかなく、益なきすさみ、とわらふ人もあるべけれど、その任にあらずして、身にあづからぬ国家のこと、又はしらぬ昔の史どもを、せばき心もてあげつらひ、治にありて乱をあげつらひ、あるはおほけなくも御政事のことなどをそしるをこのしれものにはまさりぬべきが、益はなくとも、害はすくなき日記にこそあれ。

世の人の心は、かの面のごとくにして、ひとつにあらず。されば、このむところたがひて、そのたがふところをたのしむが、つねなり。わがたのしみは、かみにいへるごとくなれば、かく長々しきみちの記をしるしたる筆のついでに、常におもふことをも、一言二言かいつけたるは、ひとつのそしりをますものなるべし。

達磨宗の歌人雑学菴のあるじ

久足ふたとびしるす

陸奥日記卷下終

協力

板坂耀子

慶應義塾大学文学部古文書室

陸奥日記研究会（五十音順）

青柳周一 阿部浩一 泉田邦彦 井上拓巳

籠橋俊光 小松賢司 斎藤善之 坂本達彦

佐藤大介 添田 仁 高橋陽一 徳竹 剛

菱岡憲司 平野哲也 山川千博

執筆者紹介（執筆順）

佐藤大介 東北大学災害科学国際研究所准教授

菱岡憲司 山口県立大学国際文化学部准教授

板坂耀子 福岡教育大学名誉教授

高橋陽一 東北大学東北アジア研究センター助教

青柳周一 滋賀大学経済学部教授

東北文化資料叢書 第十一集

小津久足 陸奥日記

二〇一八年三月三二日

発行 東北大学大学院研究科

東北文化研究室

代表者 森本 浩一

〒九八〇―八五七六

仙台市青葉区川内二七番一号

編集 佐藤大介・高橋陽一・菱岡憲司・青柳周一

制作 蕃山房

〒九八九―三二一六

仙台市青葉区落合一丁目四―八